

村上寅次『波多野培根伝』の研究

塩野和夫

はじめに

村上用箋（1枚200字）1254枚に直筆で書かれた村上寅次¹⁾『波多野培根伝』（以下、村上『波多野伝』稿本、と記す）が²⁾、厚表紙で製本されて4巻で保存されている。村上『波多野伝』稿本4巻の目次は次の通りである。なお、各巻は目次では各部となっている。すなわち、第1巻は第1部、第2巻は第2部、第3巻は第3部、第4巻は第4部である³⁾。なお、各部にはタイトルがないが⁴⁾、便宜的に内容に対応したものを（ ）内に記した³⁾。

第一部 （思想の形成）

- 一. 戦国武将の裔
- 二. 藩儒の家

1) 村上寅次（1913-1996）西南学院短期大学部助教授・西南学院大学教授を務めた後、西南学院大学学長・西南学院院長・西南学院理事長を歴任した。

2) 各部にはタイトルがない。内容を見ても各部ごとにまとまっているとは必ずしも言えない。したがって、現在の区分は全体をほぼ4等分した上で、それぞれを第1部・第2部・第3部・第4部としたのかもしれない。ただし、各部の内容に即してタイトルを付けるとすると、次の様なものになる。

第1部 思想の形成

第2部 天職を求めて－同志社へ

第3部 新島襄の教育精神継承と同志社辞職

第4部 西南学院における日々

3) 漢詩や論説でタイトルが分からない場合がある。このようなケースでもはじめにある言葉などによって仮タイトルとした。その際に仮タイトルに括弧を付けた。

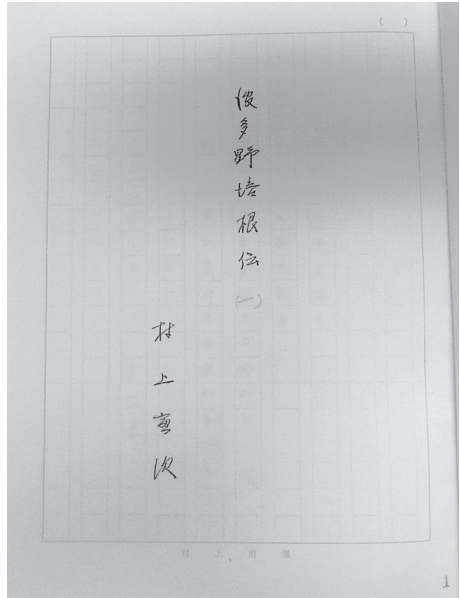
- 三. 少年期の環境
- 四. 澤潟塾の教育
- 五. 同志社へ
- 六. 新島襄と創業期の同志社
- 七. 同志社学生生活 (一)
- 八. 同志社学生生活 (二)⁴⁾

第二部 (天職を求めて)

- 十. 予備学校教師時代
- 十一. 遍歴 (一)
- 十二. 遍歴 (二)
- 十三. 同志社に帰る
- 十四. Bonus Pastor
- 十五. 自由主義
- 十六. 増野悦興の死

第三部 (新島襄の教育精神継承と同志社辞職)

- 十七. 同志社大学設立運動
- 十八. 「続同志社大学設立趣意書」
- 十九. 自由と規律
- 二十. 紛擾の予兆
- 二一. カーライルへの傾倒
- 二二. 紛擾 (一)
- 二三. 紛擾 (二) 同志社辞職



村上貞次『波多野培根伝』稿本の第1頁
提供：西南学院100周年事業推進室

4) 村上『波多野伝』稿本の目次には「九」が欠けている。そこで、この目次においても手を加えることなく、「九」は欠落したままにしている。

第四部 (西南学院における日々)

- 二四. 辞職後の日々
- 二五. 柏木義円と「上毛教界月報」
- 二六. 原田総長の退任
- 二七. 愚公移山への決意
- 二八. バプテスト文書への協力
- 二九. その後の同志社、海老名総長の就任
- 三〇. 西南学院へ
- 三一. 斯文会－独逸語研究会
- 三二. 海老名総長との対決
- 三三. 水町事件
- 三四. 日曜日問題とドージャー院長排斥事件
- 三五. ボールデン院長留任事件

村上『波多野伝』稿本には「序」や「あとがき」にあたる箇所がない。したがって、著者の執筆意図や目的が直接には分からない。奥付がないため執筆年も分からない。また、稿本について記している文献もほとんど見当たらない。要するに村上『波多野伝』稿本を研究する手掛かりは『勝山餘籟－波多野培根先生遺文集－』を除いて周辺にも見当たらない。このような事情を反映して西南学院百年史編纂事業が進む西南学院において、関係者にさえ稿本の存在と価値はほとんど知られていない。

そのために、村上『波多野伝』稿本の研究は稿本そのものの検討から始めるしかない。そこで、まず村上『波多野伝』稿本の綿密な分析から始めたい。次いで、稿本を構成する各部の内容を概観する。その上で、村上『波多野伝』稿本の執筆年・執筆の意図・研究方法などを考察した後に、『勝山餘籟－波多野培根先生遺文集』における関連記事と比較検討する。最後にこれらの作業によって明らかになった事柄を踏まえて、キリスト教教育者 波多野培根の真実に迫る。なお、村上が『波多野伝』を執筆した時期における西南学院史研究の中に

培根を置き、稿本の意味を考察する作業が残っている。この課題には今回手を付けることができなかった。

第1章 村上寅次『波多野培根伝』稿本の「文献」研究

村上『波多野伝』稿本をそれ自体から研究するに際し、どこに手がかりを求めればよいのだろうか。稿本の基本的な性格は言うまでもなく波多野培根の伝記である。したがって、各部の内容は折々における培根の思想と行動を中核として描き出している。しかし、村上『波多野伝』稿本の内容はそれだけでは説明できない。たとえば、「第1部 思想の形成」⁵⁾で村上は近代日本における教育史を山口県の場合を中心に検討し、その中に培根を置いて考察している。同じことが第2部・第3部・第4部でも言える。つまり、彼が思想し行動した場を綿密に検討したうえで、そこに培根を置き考察するのである。その際に、彼の環境を検討するために多くの文献や一次史料⁶⁾（以下、一次史料を含めて「文献」と表記する）を用いている。ここに村上『波多野伝』稿本の顕著な特質があり、この特質が稿本の学問的価値を高めている。そこで、多くの「文献」を駆使した研究書という性格を踏まえて、まず各部ごとに使用されている「文献」の一覧表を作成する。その上で、各部において「文献」を用いた研究方法を検討する。これらの作業によって村上『波多野伝』稿本研究の手がかりを求めたい。

第1節 「第1部 思想の形成」の「文献」研究

(1) 第1部の「文献」一覧

波多野培根は1888（明治元）年に現在の島根県津和野市に生まれた。父の波

5) 各部のタイトルが原稿にはないため、内容に応じて付けた事実はすでに指摘した。そこで、第1章からは各部タイトルの括弧をはずしている。

6) 本稿では自筆史料やそれに準じるものを一次史料とした。それに対して印刷された論説や分担執筆、著作などは文献とした。

多野達枝は1880（明治13）年に漢学私塾「淡水舎」を開設したが、1882（明治15）年8月に死去する。時に培根15歳であった。翌1883（明治16）年9月より培根は現在の山口県岩国市にあった澤潟塾に入門する。しかし、1年半後の1885（明治18）年3月に澤潟塾は閉鎖された。そこで、同年9月に京都の同志社英学校に入学し学び、1890（明治23）年1月には新島襄との決別を経験した。第1部はこの間における波多野培根の思想形成を主要なテーマとする。

表1 「第1部 思想の形成」における「文献」⁷⁾

1. 波多野培根の文献

(1) 一次史料

- 「磯江景亮略歴」
- 「波多野家略史」昭和8年（1933）正月
- （漢詩）「孤丘拔地」昭和13年（1938）7月
- 「拳兵殉義」昭和13年（1938）7月
- 「述志」昭和20年（1945）5月

2. 近代日本の教育史関連文献

- 東啓治『澤潟先生傳』東京陽明学会，明治34年（1901）
- 「澤潟雜稿」（『澤潟先生全集』下巻，大正8年〔1919〕）
- 大岡昇「東沢潟の生涯」（『山口県地方史研究』18号，昭和42年〔1967〕）
- 桂芳樹「東沢潟」岩国徴古館，昭和48年（1973）
- 海原徹「山口県の中等教育」（本山幸彦編『明治前期学校成立史』昭和40年〔1965〕）
- 「旧津和野藩学制」（『日本教育史資料』第2巻，昭和44年〔1969〕）
- 『明治以降教育制度発達史』第2巻，昭和13年（1938）
- 高野澄「養老館—津和野藩」（奈良本辰也編『日本の藩校』，昭和45年〔1970〕）
- 「高根県私塾の報告書」（『日本教育史資料』（復刻版）第9巻，昭和45年〔1970〕）
- 「教育」（『岩国市史』（復刻版）第3部第4編，昭和45年〔1970〕）
- 『津和野町史』第1巻，津和野町史刊行会，昭和45年（1970）
- 「中国・四国の諸藩」（『物語藩史』第6巻，昭和40年〔1965〕）
- 海後宗臣『明治初年の教育』昭和48年（1973）
- 岡田武彦「幕末の陽明学と朱子学」（『陽明学体系』第10巻）
- 岡田武彦「陽明学者五子略伝」（『陽明学体系』第11巻）
- 森鷗外『西周伝』（『鷗外全集』第8巻，昭和46年〔1971〕）
- 井上清『日本の歴史』中，昭和38年（1963）

3. キリスト教関連文献

(1) 一次史料

- 「津和野日本基督教会略史」（手稿）

表1 つ づ き

(2) 文献

- 山本秀煌『日本基督教会史』昭和4年(1929)
山路愛山『現代日本教会史論』
山路愛山『キリスト教評論』明治39年(1906)
工藤英一『日本社会とプロテスタント史—明治期プロテスタント史の社会経済史的研究』昭和34年(1959)
内田守編『ユーカリの実るを待って—リデルとライトの生涯—』昭和51年(1976)
青山四郎『土器と黎明』キリスト新聞社, 昭和51年(1976) 5月・6月号連載
岡田恒輔『増野悦興先生伝』
安部磯雄「増野悦興君を憶う」

4. 同志社関連文献

(1) 一次史料

- 新島襄, 波多野培根宛書簡, 1888年11月1日
新島襄, 波多野培根宛遺言, 明治23年(1890) 1月21日
ラーネット, 波多野培根宛書簡, 1936年9月17日

(2) 新島襄関連文献

- 「新島先生詳年譜」昭和34年(1959)
和田洋一『新島襄』(人と思想シリーズ) 昭和49年(1974)
渡辺実『新島襄』昭和34年(1959)
『新島襄書簡集』岩波文庫, 昭和29年(1954)
「新島先生就眠始末」
安部磯雄「其時代の先生と学生生活」(『新島先生記念集』昭和15年[1940])
波多野培根「新島先生の生涯の意義」(『新島先生記念集』昭和15年[1940])

(3) 同志社関連文献

- 『同志社50年史』昭和5年(1930)
手塚竜磨「同志社英学校と東京の私学」(手塚竜磨『英語史の周辺』昭和43年[1968])
松浦政泰『同志社ローマンス』大正7年(1918)
『同志社九十年小史』昭和40年(1965)
瀬口彰「同志社とスポーツ」(同志社百周年記念出版『日本の近代化と同志社』)
徳富蘆花『黒い目と茶色の目』岩波文庫, 大正3年(1914)
小崎弘道『七十年の回顧』警醒社書店, 昭和2年(1927)
渡瀬常吉『海老名弾正先生』昭和13年(1938)
住谷悦治『日本経済学の源流—ラーネット博士の人と思想』昭和44年(1969)
住谷悦治『ラーネット博士伝』昭和48年(1973)

5. 西南学院関連

- 波多野培根「アルプス国民への感謝」(『西南』昭和3年[1928])
波多野培根「京都同志社に就て」(『西南学院新聞』昭和11年[1936] 2月15日号)
波多野培根「教育瑣言」(『西南学院新聞』昭和11年[1936] 5月)

(2) 第1部における「文献」の用法

波多野培根が誕生した1888（明治元）年から新島襄が死去し培根が同志社を卒業する1890（明治23）年までを対象とする第1部を執筆するために、村上はかなりの分量でしかも内容の多岐に及ぶ「文献」を用いている。これら多くの「文献」の用法を如何にして考察できるだろうか。そこで第1部が培根の経歴を前提した上で彼の思想形成に関する叙述を主要な課題としたことを踏まえ、「表1」と対応したいくつかの類型を考案し、提出する必要がある。この作業によって提示できるのが以下の4類型である。

第1類型 「真情を表現する」文献

第2類型 「伝記および歴史を記述する」文献

第3類型 「明治・大正期の教育制度に関連する」文献

第4類型 「明治・大正期の同志社を描く」文献

第1類型「真情を表現する」文献はいずれも一次史料であり、波多野培根の漢詩3編と新島襄の波多野宛書簡と遺言がこれにあたる。村上はこれらを叙述するにあたって多くの解説を付けることはしない。むしろそれぞれを読者の前に置く。こうした方法によって読者がこれら一次史料に込められた真情に触れ、触発されることを期待していたと思われる。

第2類型「伝記および歴史を叙述する」文献には培根の漢詩以外の一次史料と「3.キリスト教関連文献」のほとんど、それと「4(2)新島襄関連文献」の多くがこれに該当する。村上はこれらの文献から引用しあるいは参照して伝記を書き進める。たとえば、波多野家の由来を記述するためにしばしば「波多野家略史」から引用している。

それに対して、第3類型「明治・大正期の教育制度に関連する」文献の場合

7) 本文では西暦に基づく年号を主として用い、必要に応じて元号を（ ）内に入れた。それに対して、「文献」表では村上寅次の用法を尊重してまず元号で表記し（ ）内に西暦年号を入れた。

は、引用や参考に留まらない。第3類型に属するのはいずれも「2.近代日本の教育史関連文献」である。たとえば、その中に東澤潟に関する研究文献がある。村上はこれら研究書を用いて明治初期の教育活動の中に澤潟塾を位置づけ、その特色を明らかにしている。

第4類型「明治・大正期の同志社を描く」文献も、用法としては第3類型の場合に類似する。「4(3)同志社関連文献」を用いて、村上は培根の人格形成に大きな影響を与えた同志社を描く。澤潟塾の叙述においても培根の人格形成への影響を重視していた。

第2節 「第2部 天職を求めて」の「文献」研究

(1) 第2部の「文献」一覧

1890(明治23)年6月に同志社普通学部を卒業した波多野培根は同年9月より同志社予備校の教師となった。培根23歳の時である。しかしわずか2年足らずで伝道への志を立てると、同志社を退職した。こうして、1892(明治25)年8月より山形県酒田で、1893(明治26)年12月からは宮城県涌谷で、1894(明治27)年にはしばらく仙台に滞在した後に福島県白河町で伝道活動に従事した。1895(明治28)年3月に宮城教会伝道師に就任すると丸山貞と結婚し、しばらくして津和野から母と弟を呼び寄せている。ところが1896(明治29)年12月に宮城教会を辞任すると伝道界を退き、教育界に移っている。その後1897(明治30)年1月から仙台の尚綱女学校で、1898(明治31)年4月からは北海道の函館中学校で、1901(明治34)年4月からは奈良県の畝傍中学校で教えている。なおこの間に妻の貞が1898年に死去したため、1901年に藤田貞子と再婚している。やがて培根37歳の時、1904(明治37)年9月に同志社普通学校の教員として復帰すると同志社の教育に邁進し、1907(明治40)年1月に同志社社長として原田助を迎えた。伝道界と学校を転々とした動機として天職を求めずにおれなかった培根の心情が考えられる。

表2 「第2部 天職を求めて」における「文献」

1. 波多野培根の文献

(1) 一次史料

- (覚書) 「同志社勤務控」明治25年(1892)6月
 「(Evangelist)」明治25年(1892)頃
 「五年間の沈黙」明治38年(1905)
 (書簡) 河野貞幹宛書簡, 昭和20年(1945)6月12日
 (提出書類)
 「明治38年9月以来, カラシテ矯正整理シタル点」明治40年(1907)頃
 「同志社普通学校整理案 第1号」明治40年(1907)2月25日
 「整理案 第2号」明治40年(1907)7月8日
 「犯則ニ対スル制裁」明治41年(1908)7月29日

(2) 著作

『眞道指鉄』大阪・福音社, 明治26年(1892)

(3) 論説

- 「『韓国合併』を報ぜる新聞の号外を読み、平素、強く之を主張せる某氏へ」明治43年(1910)8月23日
 「同志社普通部の回顧十年」(『同志社時報』66号, 明治43年[1910])
 「(再び母校に帰りし)」(『同志社時報』94号, 大正元年[1912]12月25日)
 「ラルネド老博士を送る」昭和3年(1928)

(4) その他

- 吉岡義睦「(波多野先生)」明治44年(1911)頃
 本多虎雄「波多野先生の思い出」(『同志社時報』88号, 昭和37年[1962])
 加藤延雄「波多野培根」(『同志社時報』22号, 昭和41年[1966])

2. 近代日本の教育史関連文献

- 海老名弾正「日韓合同論」(『新人』明治37年[1904])
 海老名弾正「国民教育主義の発展」(『新人』6巻5号, 明治38年[1905])
 海老名弾正「韓国の教育方針」(『新人』6巻5号, 明治38年[1905])
 海老名弾正「日韓合併論を視す」(『新人』明治43年[1910])
 山辺健太郎『日韓併合小史』岩波新書, 昭和41年(1966)
 土肥昭夫「海老名弾正 - 思想と行動」(和田洋一編『同志社の思想家たち』昭和40年[1965])
 大久保利謙『日本の大学』昭和18年(1943)

3. キリスト教関連文献

(1) 一次史料

- 「津和野基督教会略史」
 プゼル, 波多野宛書簡, 1898年4月2日
 岸本能武太, 波多野宛書簡, 明治34年(1901)1月10日

(2) 文献

- 増野悦興『英国清教徒記事』大阪・福音館, 明治22年(1889)
 増野悦興『教理講要』第1集, 明治27年(1895)
 増野悦興『清教徒の英傑ピーチョル伝』東京警醒社, 明治29年(1896)
 中島徳蔵「雷軒増野悦興君小伝」(『丁酉倫理講演集』明治44年[1911], 所収)

表 2 つ づ き

岸本能武太「増野悦興君を弔す」(『丁酉倫理講演集』明治44年 [1911], 所収)
竹越三又「読画楼閑話」(『日本新聞』明治44年 [1911] 10月24日号)
故増野悦興先生著, 岡田恒輔編『筆華舌英』
岡田恒輔『増野悦興先生伝』
安部磯雄「増野悦興君を憶う」
『靈南坂基督教会略史』大正6年 (1917)
増野肇「キリスト教ユニバーサリストの渡来」(『早稲田大学商学』232号, 昭和47年 [1972])
増野肇「新神学の消長」(『早稲田大学商学』237号, 昭和48年 [1973])
徳永規矩『逆境の恩寵』大正13年 (1924)
徳富蘆花『竹崎順子』大正12年 (1923)
中野好夫『蘆花徳富健次郎』昭和47年 (1972)
海老名弾正「聖書の戦争主義」(『新人』5巻4号, 明治37年 [1904])
山本泰次郎訳補『内村鑑三, ベルにおくった自叙伝的書簡』
小沢三郎『内村鑑三不敬事件』新教出版社, 昭和36年 (1961)
『尚綱七十年史』昭和37年 (1962)
土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』昭和55年 (1980)

4. 同志社関連文献

(1) 一次史料

「同志社明治24年度報告」(『同志社90年小史』昭和40年 [1965])
大塚節治「覚書」明治38年 (1905) 10月12日
原田助「日記」明治38年 (1905) 7月25日, 明治39年 (1906) 10月23日 (『原田助遺集』昭和46年 [1971])

(3) 同志社関連文献

海老名弾正「同志社は果たして存在の価値ありや」(『新人』6巻7号, 明治38年 [1905])

品川義助『野人野語』昭和4年 (1929)
大隈重信「現代国民の覚悟」(『同志社時報』明治43年 [1910])
石川芳次郎「私の学生時代」(『同志社時報』創刊号, 昭和37年 [1962])
『同志社90年小史』昭和40年 (1965)
『同志社百年史 通史編』昭和54年 (1979)

(4) 関連文献

小崎弘道『七十年の回顧』警醒社書店, 昭和2年 (1927)
渡瀬常吉『海老名弾正先生』昭和13年 (1938)
柏木義円「海老名先生と私」(伊谷隆一編『柏木義円集』第2巻, 未来社, 昭和45年 [1970])
武田清子「柏木義円の臣民教育批判」(『人間観の相克』弘文堂, 昭和34年 [1959])
伊谷隆一『非戦の思想』紀伊国屋書店, 昭和42年 (1967)
笠原芳光「柏木義円」(和田洋一編『同志社の思想家たち』同志社大学生協出版部, 昭和40年 [1965])
高橋虔「日本組合基督教会年表(3)」(同志社大学人文科学研究部編『キリスト教社会問題研究』20号)
『原田助遺集』昭和46年 (1971)

(2) 第2部における「文献」の用法

第2部における「文献」の用法も大きく4種類に大別できる。ただし、第1部の「文献」にあった第3類型「明治・大正期の教育制度に関する」文献はない。それに代わって第5類型「主張を訴える」文献が認められる。したがって、第2部の「文献」における用法の4類型は次の通りである。

第1類型 「真情を表現する」文献

第2類型 「伝記および歴史を記述する」文献

第4類型 「明治・大正期の同志社を描く」文献

第5類型 「主張を訴える」文献

第1類型「真情を表現する」文献には、培根による1(1)「Evangelist」「5年間の沈黙」、1(3)「ラルネド老博士を送る」と3(1)「ブゼル、波多野宛書簡」がある。村上はこれらの場合でも多くの説明を付けていない。

第2類型「伝記および歴史を記述する」文献は第2部では多くなっている。すなわち、人物では1(4)で波多野培根、2で海老名弾正、3(2)で増野悦興・徳永規矩・竹崎順子・徳富健次郎・内村鑑三、4(2)で柏木義円を取り上げている。歴史記述としては2で日韓併合、3(1)で津和野教会略史、3(2)で靈南坂教会略史と内村鑑三不敬事件を扱っている。第2部の場合、第2類型の多くは第5類型「主張を訴える」文献の背景を説明している。

第4類型「明治・大正期の同志社を描く」文献のほとんどは、4(1)と4(2)にある。これらも第5類型で取り上げる論争の背景を描き出している。

したがって、第2部において最も緊張感を込めて扱っているのは第5類型「主張を訴える」文献である。取りあげた主張はいずれも対立する立場を前提している。まず、社会的出来事において「主張を訴える」文献である。日韓併合に賛成し推進する立場から2に海老名の4本の論説を置いている。これに反対する立場からは1(2)における波多野、4(3)における柏木の論説を対峙させている。戦争に関しては必要性を認める立場から3(2)で海老名「聖書の戦

争主義」を、反対する立場から4(3)で「柏木義円の臣民教育委批判」や伊谷『非戦の思想』を取り上げている。同志社の教育行政に関しては1(1)と4(1)でいずれも培根の方針と実践を、彼の一次史料を使って克明に記している。培根はこれらの立場から原田助や海老名弾正と鋭く対立していくことになった。

村上が第2部で用いた「文献」とその使用法を検証すると、第5類型「主張を訴える」文献の重要性は明らかである。この事実は第2部において何を意味するのか。長い探究の後に培根は天職を生きる場として同志社の教育現場に辿りついた。しかし、天職を生きる場は彼にとって安住の地を意味しなかった。むしろ幾重にも重なりあう対立の間をぬって、培根は天職を生きていくのである。

第3節 「第3部 新島襄の教育精神継承と同志社辞任」の「文献」研究

(1) 第3部の「文献」一覧

原田助が同志社社長に就任した1907(明治40)年頃から専門学校令による大学昇格を目指す運動が同志社の内外で盛んになる。文部省より1912(明治45)年2月24日付で認可を受け専門学校と神学校を合併して同志社大学と改称した同志社は、5月20日に同志社大学開学式を行った。同志社社長の原田助が大学学長を兼務する。しかし大学昇格運動が高揚する中で、培根は拙速に大学開設を急ぐ動きに反対した。彼にとって普通学部の充実強化が当面の課題であり、その上に同志社大学は開設されるべきであった。大学開設後、同志社では原田社長の指導力に対する批判が高まる。これを受けて原田社長は1917(大正6)年9月に開催された理事会に辞表を提出する。社長の辞表を受け1918(大正7)年1月に開いた理事会は、原田社長の留任を決議する。一連の騒動の中で培根は1918(大正7)年1月31日付で同志社を退職する。

表3 「第3部 新島襄の教育精神継承と同志社辞任」における「文献」

1. 波多野培根の文献

(1) 一次史料

(漢詩)「書懷」明治42年(1909)11月

「(欲披棒奔)」大正7年(1918)1月15日

「(望明楼外)」大正7年(1918)1月23日

(書簡)「浦口文治宛書簡」明治43年(1910)2月28日

(覚書)「同志社普通学部の整理(完成)」大正2年(1913)11月18日

(日記)「無迹庵日誌」大正6年(1917)2月5日・8月11日・12月20日・21日・22日・23日・30日・31日, 大正7年(1918)1月6日・11日・12日・15日・16日・23日・2月5日・7日・9日・12日

(3) 論説

「附記」明治42年(1909)8月14日

「同志社創立ノ二大主張」明治42年(1909)

「同志社普通学部の回顧十年」(『同志社時報』66号, 明治43年[1910]11月18日)

「続同志社大学設立趣意書」(『同志社時報』103号, 大正2年[1913]10月25日)

「四十而不迷」(『同志社時報』109号, 大正3年[1914]4月20日)

「因信而望有」(『同志社時報』120号, 大正4年[1915]5月1日)

「大正六七年同志社扮憂顔末」大正7年(1918)8月27日

「宣言」大正7年(1918)2月10日

「余の辞職の理由」大正7年(1918)

(4) その他

本多虎雄「波多野先生の思い出」(『同志社時報』88号, 昭和37年[1962])

2. 近代日本の教育史関連文献

大久保利謙『日本の大学』昭和18年(1943)

4. 同志社関連文献

(1) 一次史料

原田助「日記」明治43年(1910)4月12日, 明治44年(1911)4月20日(『原田助遺集』昭和46年[1971])

(3) 同志社関連文献

原田助「社長辞任問題に関する理事会の経過と希望」(『同志社時報』150号, 大正7年[1918]2月1日)

「(定期理事会)」(『同志社時報』大正7年[1918]2月)

小崎弘道『七十年の回顧』警醒社書店, 昭和2年(1927)

荒木智夫「大正初期の同志社普通部点描」(『同志社時報』88号, 昭和37年[1972]11月)

大塚節治「大学開設運動における二三のピーク」(『同志社時報』16号, 昭和40年[1965])

田中良一「同志社初期の学風」(住谷悦治編『日本におけるキリスト教と社会問題』)

『同志社90年小史』昭和40年(1965)

『同志社百年史 通史編』昭和54年(1979)

5. 西南学院関連文献

波多野培根「アブラハムと星の教訓」(『バプテスト』103号, 昭和13年[1938]12月1日)

波多野培根「トマス・カーライルの英雄崇拜論に就て」(西南学院高等学校チャペル講演, 昭和15年[1940]4月18日)

(2) 第3部における「文献」の用法

第3部における「文献」は5種類に分類できる。ただし類型によって使用頻度数は大きく異なる。第3部における5類型は以下の通りである。

- 第1類型 「真情を表現する」文献
- 第2類型 「伝記および歴史を記述する」文献
- 第3類型 「明治・大正期の教育制度に関連する」文献
- 第4類型 「明治・大正期の同志社を描く」文献
- 第5類型 「主張を訴える」文献

第1類型「真情を表現する」文献は直接には1(1)にある培根の漢詩3編である。彼は折々に漢詩を創作して自らの真情を表現した。村上はこの事実を重んじて培根の真情を理解するために多くの漢詩を適切な箇所においている。

第2類型「伝記および歴史を記述する」文献は多い。それらのほとんどは1917-18年に起こった同志社の紛争に関連している。これに関して波多野側に属する文献として1(1)の「日記」、1(3)の「同志社普通部の回顧十年」,「大正六七年同志社扮擾顛末」がある。原田側の文献として4(1)原田「日記」、4(3)原田「社長辞任問題に関する理事会の経過と希望」がある。いずれの立場にも属さないものに1(4)本多「波多野先生の思い出」、4(3)「(定期理事会)」,小崎「七十年の回顧」がある。このように村上は歴史的出来事を叙述する際に一方に偏した文献への偏りを避け、様々な立場からの文献を採用して客観的な記述を心がけている。

第3類型「明治・大正期の教育制度に関する」文献は2の1冊だけである。大久保『日本の大学』は専門学校令による私立学校の大学が認可されていく過程を記している。

第4類型「明治・大正期の同志社を描く」文献も多くはない。同志社を直接扱っているのは、いずれも4(3)に属する荒木「大正初期の同志社普通部点描」、大塚「大学開設運動における二三のピーク」、田中「同志社初期の学風」

の3本である。これらは内容的には第2類型の文献と重なっている。

第2類型と並んで多いのが第5類型「主張を訴える」文献である。これに属するのは、1(1)の(書簡)「浦口文治宛書簡」、(覚書)「同志社普通学部の整理(完成)」, 1(3)の「附記」, 「同志社創立ノ二大主張」, 「続同志社大学設立趣意書」, 「四十而不迷」, 「因信而望有」, 「宣言」, 「余の辞職の理由」であり、いずれも培根の「文献」である。それに対して、大学昇格を推進した側の文献はない。客観的な記述を心がけてきた村上がこのように一方的な文献だけを並べることはこれまでなかった。したがって、第3部の第5類型において村上は明らかに従来とは違った文献の並べ方をしている。

第3部で多かった「文献」は第2類型「伝記および歴史を記述する」文献と第5類型「主張を訴える」文献であり、それらはいずれも同志社における1918-19年当時の紛争を背景にしていた。そこで村上は第2類型による叙述では波多野側・原田側・中間的立場の文献を用いて、出来事を複眼的視点から捉えることにより客観性を確保していた。それに対して第5類型の場合では一方的に波多野側の主張だけを取り上げている。これまでの方針を変更して、村上はずなぜこのような叙述を試みたのか。それは本稿が単に波多野の伝記であるという短絡的な理由ではないだろう。そうではなく同志社紛争時における培根の主張には一貫した彼の教育精神が内在している。この精神性が「第4部 西南学院の日々」においても教育者波多野に内在し、展開した。したがって、培根の主張の底流にある精神性を理解しないことにはその後の教育精神の展開を理解することもできない。あえて、一方的な叙述になることも承知の上で、村上が第5類型では培根だけを取り上げた理由はここにあると考えられる。

第4節 「第4部 西南学院における日々」の「文献」研究

(1) 第4部の「文献」一覧

同志社を辞職した波多野培根はすでに50歳になっていた。しばらく静養して「静思及び読書」の時を過ごしながら、「余が辞職の理由」を印刷配布するなどして同志社の善後策を講じ、進むべき道を考えた。この頃、柏木義円は『上

毛教界月報』で再三にわたり同志社における原田助社長の責任を問い、原田は1919（大正8）年1月17日に辞任した。将来は「通俗的基督教文学の普及」に努めようと考え始めていた培根に、南部バプテスト連盟の宣教師ワーンから要請が来る。そこで、1919（大正8）年9月に下関に移った培根は福音書店の出版事業を応援することになる。さらに1920（大正9）年9月には西南学院に教師として赴任した。それ以来、生徒の寄宿舎に住み生徒と食事を共にしながら、培根は西南学院における教育と研究に打ち込む日々を変わることなく続けた。この間役職には就かなかったが、生徒教師からの人望は厚く日曜日問題などの難局に当たっては西南学院を維持するため重要な役割を担った。

表4 「第4部 西南学院における日々」における「文献」

1. 波多野培根の文献

(1) 一次史料

- (日記)「無迹庵日誌」大正7年(1918)3月末頃・4月27日・5月4日・11月12日・12月19日, 大正15年(1912)7月23日・7月25日, 昭和5年(1930)3月・6月8日・6月11日・7月9日・9月15日, 昭和6年(1931)5月11日, 昭和7年(1932)5月3日・6月24日・6月25日・6月26日・7月1日, 昭和8年(1933)1月17日・3月9日
- (記録・メモ)「メモ」大正7年(1918)5月27日
「研究題目」大正8年(1919)3月31日
「余の今後の大目的」大正8年(1919)5月5日
「三事」大正14年(1925)9月28日
「覚書」昭和2年(1927)9月6日
「斯文会記録」大正11年(1922)～昭和7年(1932)
「所感」昭和6年(1931)6月19日
「道学及び其精神」昭和6年(1933)8月29日
「覚書」昭和7年(1932)
- (漢詩)「贈 浅野君」大正7年(1918)12月2日
「(暗霧濛々)」大正7年(1918)11月16日
「憶同志」大正8年(1919)2月13日
「偶成」大正8年(1919)2月9日
「(黑白多顛倒)」大正8年(1919)2月22日
「立志書懷」大正8年(1919)3月7日
「探春二種」大正8年(1919)3月9日
「探春二種」大正8年(1919)3月9日
「(逍遙名利外)」大正8年(1919)3月9日
「題北山愚公移山図」大正8年(1919)3月
「書懷」大正8年(1919)3月13日

表 4 つ づ き

	「書懐」大正 8 年 (1919) 3 月 13 日
	「〔弘文開世務〕」大正 8 年 (1919) 5 月 5 日
	「入 下関」大正 8 年 (1919) 12 月
	「入 下関」大正 8 年 (1919) 12 月
	「壇浦所見」大正 8 年 (1919) 12 月
	「師教」大正 9 年 (1920) 1 月 23 日
	「聞海老名某同志社総長就任之報」大正 9 年 (1920) 3 月 8 日
	「偶成」大正 13 年 (1924) 6 月 20 日
	「偶成」大正 13 年 (1924) 9 月 28 日
	「偶成」大正 14 年 (1925) 5 月 5 日
	(書簡) 加藤延年宛書簡, 大正 8 年 (1919) 9 月 21 日
	ワーン夫人宛書簡, 1936 年 12 月 9 日
(2) 著作	波多野培根先生遺文集刊行会『勝山餘籟—波多野培根先生遺文集』昭和 52 年 (1977)
(3) 論説	「来朝前のデビス先生」(『同志社時報』大正 6 年 (1917) 10 月 1 日)
	「1 週年に際して湯浅治朗翁を憶ふ」(『上毛教界月報』25 号, 昭和 8 年 [1928] 6 月 20 日)
3. キリスト教関連文献	
	栗原基『ブゼル先生伝』昭和 15 年 (1940)
	栗原基「ウオズウオスの宗教思想」(講演) 大正 3 年 (1914) 5 月
	栗原基「英文学に就て」(講演) 大正 6 年 (1917) 5 月
4. 同志社関連文献	
(3) 同志社関連	
	柏木義円「同志社々長たり組合教会理事たる原田助君に与ふる書」(『上毛教界月報』237 号, 大正 7 年 [1918] 8 月 15 日)
	柏木義円「原田助君に与ふる第 2 公開状」(『上毛教界月報』238 号, 大正 7 年 [1918] 9 月 26 日)
	柏木義円「敢て同志社理事諸氏に訴ふ」(『上毛教界月報』239 号, 大正 7 年 [1918] 10 月 15 日)
	柏木義円「再び原田助君に」(『上毛教界月報』239 号, 大正 7 年 [1918] 10 月 15 日)
	海老名弾正「総長就任の辞」大正 9 年 (1920) 4 月 16 日
	『同志社五十年史』大正 15 年 (1925)
	『同志社九十年小史』昭和 40 年 (1965)
	『同志社百年史 通史編』昭和 54 年 (1979)
5. 西南学院関連文献	
(1) 一次史料	
	波多野培根, C. K. ドージャー宛書簡, 昭和 2 年 (1927) 4 月 2 日
	「理事会の回答」昭和 3 年 (1928) 2 月 17 日

表 4 つ づ き

「神学生に手渡す文書」昭和3年(1928)2月17日
波多野培根「覚書」昭和3年(1928)2月
C. K. ドージャー「日記」昭和4年(1929)6月20日
「理事会記録」昭和4年(1929)12月
波多野培根「理由書」昭和5年(1930)5月
「学生大会の決議書」昭和7年(1932)6月
「聲明書」昭和7年(1932)6月21日
波多野培根「ボールデン院長留任紛憂事件」昭和7年(1932)
波多野培根「ボールデン院長留任問題に対する教師一同の立場」昭和7年(1932)6月30日
波多野培根「日曜日競技許否の問題に関する教師一般の意見」昭和7年(1932)7月
波多野培根「覚え書」
波多野培根「余が16年間勤続中聊か西南学院のために盡くしたりと思う点」昭和11年(1936)5月11日
(2) 論説
波多野培根「健全なる学風の養成」(『中学部学友会会報』4号, 大正10年[1921]7月)
三串一士「痛ましい思い出」(第一部)(『西南学院大学広報』27号, 昭和49年[1974]2月6日)
伊藤裕之『忘れ得ぬ人びと』
西南学院学院史企画委員会『西南学院七十年史 上巻』昭和61年(1986)

(2) 第4部における「文献」の用法

第4部における「文献」の種類と用法には、第3部までのそれと比べると顕著な違いがある。まず「文献」の種類であるが、第4部では一次史料が非常に多くなっている。用法についてみると、3種類の類型だけに限定されている。このような第4部だけに認められる特色にはいくつかの理由があると思われる。用法の3類型は以下の通りである。

第1類型 「真情を表現する」文献

第2類型 「伝記および歴史を描写する」文献

第5類型 「主張を訴える」文献

第1類型の「真情を表現する」文献は、1(1)における波多野の一次史料の

ほとんど5(1)にある波多野「ドージャー宛書簡」、ドージャー「日記」、波多野「西南学院のために尽くしたりと思う点」、5(3)波多野「健全なる学風の意義」がある。培根の一次史料を内容で分類すると2種類に大別できる。(漢詩)の多くは折々の彼の真情を表現している。それに対して(記録・メモ)は直接には培根による記録や計画であるが、そこから彼の人柄や性格さらに真情が伺われる。村上「第4部 西南学院における日々」では、培根の一次史料を多く用いることによって彼自身の言葉で培根の実像を叙述している。

第2類型「伝記および歴史を描写する」文献で重要なのは、5(1)「理事会の回答」、「神学生に手渡す文書」、波多野「覚書」、「学生大会の決議書」、「声明書」、波多野「ポルデン院長留任紛憂事件」、波多野「覚書」と5(3)三串「痛ましい思い出」である。これらはいずれも西南学院における日曜日問題を扱っていて、理事会側・学生側・間に立つ培根による一次史料である。

第5類型「主張を訴える」文献は4(3)における柏木の3本の論説と5(1)における波多野「ポルデン院長留任問題に対する教師一同の立場」、波多野「日曜日競技許否の問題に関する教師一般の意見」である。柏木の主張に関しては、背景を『同志社五十年史』などで述べているものの、一方的に叙述されている。同様に日曜日問題の全体像は5(1)で明らかにされているが、それに関する主張としては培根のものだけを扱っている。要するに一方的である。

村上『波多野伝』稿本の中で第4部「文献」とその用法に際立った特色があるのは明らかである。特色の一つである一次史料の多さは波多野の伝記という性格上、彼の一次史料を多用したのかもしれない。しかしたとえば第1部と比べると「文献」の使い方に未整理な印象をぬぐえない。時間的な利約があったのではないかと推測される。日曜日問題に関しては第2類型の一次史料を用いてそれぞれの立場を明らかにする手法によって、現場の緊張感が伝わってくる。第5類型に関しては柏木にしても培根にしても一方的な主張となっている。波多野の伝記として違和感は少ないが、客観的な叙述を重んじたこれまでの手法とは明らかに違っている。

第2章 村上寅次『波多野培根伝』稿本の内容概説

村上『波多野伝』稿本を研究するに際し、その手がかりは周辺の文献などからもほとんど得られなかった。したがって、稿本そのものから研究を始めるしかなかった。そこで最初に注目したのは、村上が『波多野伝』を執筆するにあたって多くの一次史料と関連文献を用いていた事実である。彼はどのような「文献」を使い、どのような方法を駆使して稿本を執筆したのか。このような分析を各部ごとに行ったのが、「第1章 村上寅次『波多野培根伝』稿本の文献研究」である。ところで、稿本そのものから取り組む最も基本的な研究方法があった。それは村上『波多野伝』稿本の内容を概観する作業である。そこで、第2章では各部ごとに内容を概説する。

第1節 「第1部 思想の形成」の概説

「第1部 思想の形成」は8つの章から構成されているが、前半と後半で大きく内容は異なる。すなわち、前半の4つの章では出生から始めて儒教教育で育てられる培根を叙述し、後半の4章は同志社においてキリスト教教育で思想を形成する培根を対象としている。まず1部の前半4章が扱っている儒教教育で生まれる波多野培根を概観する。

(1) 儒教教育による思想形成—第1部前半—

「一、戦国武将の裔」⁸⁾は、波多野培根「波多野家略史」を主要な史料とした波多野家の由来である。「波多野家略史」で培根が行を改めて書き入れている「勝山城の戦」という1節⁹⁾を引用したうえで、村上は「培根が戦国武将として義に殉じた先祖の行蔵に感激し、その末裔であることを誇りとしていたことがうかがえる。彼はまた、生涯、筆名として『勝山学人』の号を用いている。…それが右の事蹟に由来するものであることはいうまでもない」¹⁰⁾とする。さ

8) 村上寅次『波多野培根伝(一)』稿本、4-17頁。

9) 村上寅次、前掲書、11-12頁。

らに培根が世を去る6か月前に書き残した漢詩「述志」において、「遠い戦国武将の生き方（あるいは死に方）が、彼の信仰の生涯に重なっているのを見る」¹⁰⁾と言う。

「二．藩儒の家」¹¹⁾は波多野矢柄と節の間に生まれた3人の男子、達枝（1838年出生）・貞吉（1842年出生、後の増野貞吉）・景亮（1845年出生、後の磯江景亮）の生涯によって、培根が生まれた時代を描き出している。波多野達枝は1860年に津和野藩藩校の養老館で生徒の生活指導にあたる塾頭に任命される。1865年には井関威（みな）と結婚し、1866年に女子の強が、1868（明治元）年に男子の培根が生まれている。培根誕生の年に、達枝は養老館の助教に昇進する。しかし、1871（明治4）年頃に養老館が閉鎖されると、彼は社会的な活動の場を失ってしまう。増野貞吉は秀才で選ばれて江戸に遊学し昌平学に学んだ。その後堀氏の養女と結婚したが、彼女は1865年に男子悦興を生んだ。磯江景亮は1863年に津和野藩から京都に派遣された10名に選抜され、1866年の第2回長州征伐では幕命に従い津和野藩兵を率いて出兵した。このように培根が生まれた1868年頃の津和野藩は時局に翻弄され、父や2人の叔父は混迷する中国地方の小藩にあってそれぞれの生き方を探っていた。

「三．少年期の環境」¹²⁾は父波多野達枝及び従兄増野悦興の生き方と並列させながら、少年期の培根を描き出している。明治政府の教育政策に基づき津和野にもいくつかの小学校が設立された。培根は1875（明治8）年1月に広小路小学校に入学する。その頃、叔父増野貞吉は東京にいたが、従兄の悦興は津和野で祖母に預けられていた。彼は1877（明治10）年12月に津和野小学校を卒業すると、翌年には山口にあった岡村圭三の私塾に入りキリスト教と出会っている。そこで1880（明治13）年にキリスト教系の築地大学校に入学したが、翌1881（明治14）年9月には同志社英学校に移っている。波多野達枝は1879（明

10) 村上寅次、前掲書、13頁。

11) 村上寅次、前掲書、16頁。

12) 村上寅次、前掲書、18-85頁。

13) 村上寅次、前掲書、86-121頁。

治12)年10月に島根県師範学校津和野分校の漢学教師に任命されたが、1年後に分校は廃止されて失職する。そのため1880(明治13)年7月に自宅を開放して漢学私塾「淡水舎」を設立した。このようないきさつで小学校を終えた培根は自宅で父から漢学の手ほどきを受けることになる。ところが、開塾2年目の1882(明治15)年8月に達枝は突然に世を去る。

「四. 澤潟塾の教育」¹⁴⁾は、明治期教育機関の中に澤潟塾を位置づけた上でその特色を明らかにし、澤潟塾で学んだ培根を扱っている。培根は「明治16年9月(父の没去翌年)16歳の時、志を立て笈を負いて山口県周防国玖珂郡保津村の澤潟塾に赴き東崇一先生(陽明学者)の門に入り、明治18年3月まで在塾して漢学を修む。在塾1年半。」¹⁵⁾通称を崇一と言った東澤潟(1832-1891)は1870(明治3)年秋に保津村に移り、私塾「澤潟塾」を開いた。「彼はどこまでも古い漢学塾の精神に立って気節ある国士の人物の養成をもって学舎の存在の意義と考へ」、「専ら漢学教育に力を注い」だ¹⁶⁾。村上は東澤潟の教育精神が若い波多野培根の精神形成に強く影響し、この精神が新島襄との出会いを導いたと考へ、終生培根が好んだ語を解説している。

後年、培根は人から書を求められると、好んで明朝末期の儒学者方孝孺(方正学)の語、

国家使数十年無才智士 国家数十年才智の士無からしむるも
国家不可一日無気節士 国家一日も気節の士無かるべからず

を選んで記した。「人物になれ」との澤潟の教育精神は、後述する同志社における新島襄との出会いとともに、若い培根の精神形成にその痕跡をとどめたというべきであろう¹⁷⁾。

14) 村上寅次、前掲書、122-164頁。

15) 村上寅次、前掲書、122頁。

16) 村上寅次、前掲書、139-140頁。

(2) キリスト教教育による思想形成—第1部後半—

第1部後半の4つの章は澤潟塾から津和野に帰省していた波多野培根が新島襄と同志社に強い関心を持つきっかけから始めて、同志社のキリスト教教育と新島から受けた強烈な人格的影響を描いている。

「五. 同志社へ」¹⁸⁾は津和野に帰った培根が、約6か月後の1885(明治18)年9月に同志社英学校への入学を目指し津和野を発ったいきさつと理由を考察している¹⁹⁾。澤潟塾における東澤潟のキリスト教理解は「切支丹邪宗観」であった。しかし、培根は師の尊王愛国の思想は継承したが、切支丹邪宗観は受け継がなかったと村上は見るとする。むしろ、津和野で培根が接したのはキリスト教に好意的な周辺の雰囲気であった。1881(明治14)年春には叔父増野貞吉が津和野にキリスト教伝道者を斡旋している。1885(明治18)年には叔父磯江景亮夫妻が山口で洗礼を受けている。さらにこの年の7月に同志社で学ぶ増野悦興が津和野に帰省していた。培根が同志社英学校への進学を決意した直接のきっかけは悦興の熱心な勧めである。

彼は培根に会い、培根の近況を聞くとともに彼が現在学んでいる同志社英学校の充実した学習の生活や、彼が傾倒する校長新島襄の人格と思想について語り、入学を奨めた。こうして培根は、従兄の熱心な奨めに動かされて同志社において英学を学ぼうと決意した。母皆子も培根の決意に賛成し、彼の京都遊学を励ましたであろう²⁰⁾。

17) 村上寅次、前掲書、162頁。なお、方正学の漢詩は次の個所でも触れられている。
村上寅次、前掲書、2頁。

村上寅次『波多野培根伝(四)』稿本、1076頁。

18) 村上寅次、『波多野培根伝(一)』稿本、165-185頁。

19) 村上寅次は培根が漢学から洋学(英語)に転向し、京都の同志社を目指した理由を2点挙げている。「培根が同志社入学を決意した動機の一つに、当時同志社普通学校四年生として在学していた従兄増野悦興の奨めがあったことは確かである。……しかし、彼の英学への志向を受け入れ、その実現を支持した雰囲気が彼の周辺にあったこともまた確かであろう。」村上寅次、前掲書、165-166頁。

20) 村上寅次、前掲書、183-184頁。

「六. 新島襄と創業期の同志社」²¹⁾は、同志社創立者新島襄の人物と培根が入学した当時の同志社を描いている。村上は山路愛山の指摘を踏まえて、「新島の特色は、『成功したる吉田松陰』として、純乎たる素質の日本武士が米国の自由・民政の精神を体得したる熱烈なる耶蘇教徒として帰朝した点である」²²⁾としている。1875（明治8）年11月に同志社英学校を設立した新島は、「教育と伝道の二面を総合し、その二面の力を相互に補充し合うような方向に向けて」指導した²³⁾。1879（明治12）年9月に同志社英学校に入学した安部磯雄は当時の新島について記している。「先生は旅行其の他の故障なき限り殆んど毎日学校に出席した。学校では毎日始業前三十分を礼拝に費すことになって居たのであるが、礼拝は僅に十分位で、他の二十分は教師の修養講話に宛てられて居た。先生は殆んど教場に於て教授することはなかったけれども差支のない限り朝の礼拝には必ず出席した。」²⁴⁾同志社英学校卒業生の活発な活動は「独立自由の人材養成を目ざす同志社教育の成果を示すものとして、時あたかも自由民権運動の高揚の時期にあつて、同志社と新島の名を広く社会に知らせることとなった。」²⁵⁾

「七. 同志社学生生活(一)」²⁶⁾は、1885（明治18）年9月に同志社英学校に入学した培根の前半約2年間の学生生活を対象としている。村上は「英学校規則」[明治18年（1885）]にある5年間の学科課程表から当時の特色を次の通り記している。

この学科課程表からうかがうことのできる第一の重点は、いうまでもなく英語の学習である。リーダー、発音から始まって文法、作文、修辭学、会話等に毎週四～五時間があてられている。現在の大学の英語学科に相当する内

21) 村上寅次、前掲書、186-219頁。

22) 村上寅次、前掲書、192頁。

23) 村上寅次、前掲書、204頁。

24) 村上寅次、前掲書、207-208頁。

25) 村上寅次、前掲書、216頁。

26) 村上寅次、前掲書、220-292頁。

容である。第二の学習の重点は一般教養（リベラル・アーツ）の諸科目で、これは新島が卒業した北米マサチューセッツ州のアマースト・カレッジ（Amhurst College）の学科に準じていると考えられる。そのうち自然科学系の諸科目、とくに数学関係が相当に重視されているのが目立つ。人文関係では歴史・地理の他に経済学、政治学などが珍しい²⁷⁾。

培根が入学して4か月を経た1885（明治18）年12月17日に新島襄は再度の欧米巡遊の旅から帰国した。この時、同志社関係者は京都駅に新島を迎えたが、これは培根の新島を見る最初の機会となった。翌12月18日に同志社の校庭で礼拝堂の定礎式が執行された。式辞を述べた新島は、式辞の中で彼の留守中に退学させられた数名の学生に触れ、彼らのために涙を流した。その場にいた来賓・生徒たちは新島の教育者としての真情に打たれ、感動したと伝えられている。

1886（明治19）年6月20日に培根は寺町丸太町にあった第二教会でラーネッド博士から洗礼を受けた。その日の日記に彼は「予の悔改入信の動機となれる聖句（ガラテヤ書6章7-9）に就て」と書き込みをしている。これについて村上は下記の通り、分析している。

培根がこの個所について、新島の講義を受けたか、また、彼自身この聖句から、どのような霊的な覚醒を与えられたか、それを知ることができない。ただ、この聖句から受けることができる単純で根本的な内容は、自己を本位とする現世主義な生き方から、神を中心とする霊的な世界への転換であり、道徳的実践の究極の目標は霊的信仰によって永遠の生命に生きるという真理に外ならない。彼は少年時代から培われた儒教倫理を越え得たことを、この聖句は示している²⁸⁾。

27) 村上寅次、前掲書、223-224頁。

28) 村上寅次、前掲書、274頁。

「八. 同志社学生生活(二)」²⁹⁾は、培根の同志社における後半3年目から卒業までの学生生活を描いている。ところで、1888(明治21)年4月から培根は英学校入学志望者に対して数学を教えることになる。1年上で数学を教えていたのが柏木義円であり、この時に彼らは協力者として親しい関係を持ったと思われる。

1888(明治21)年は新島の大学設立運動に重要な意味を持つ年である。この年4月12日に京都知恩院で開かれた大学設立を訴える講演会は好評を得た。4月16日に東京に向かった新島は連日有力者に協力を求めたが、22日には病に倒れてしまう。11月1日に培根は病床の新島から直筆の書状を受け取る。「学校ノ将来ヲモ御托シ置キ申度ク」内密に訪問するようにと促す内容であった。同じ日に柏木も同様の趣旨の英文の手紙を受け取っていた。

11月7日に全国20余りの新聞雑誌に発起人新島襄による「同志社大学設立の旨意」が公表される。私立大学設立を訴える趣意書の中に次の一文がある。

一国を維持するは、決して二三英雄の力に非ず、實に一国を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざる可からず、是等の人民は一国の良心とも謂ふ可き人々なり、而して吾人は即ち此の一国の良心とも謂ふ可き人々を養成せんと欲す、³⁰⁾

村上は「同志社大学設立の旨意」が培根に与えた影響について次のように述べている。

彼(波多野培根)が新島の「趣意書」をどのような感激をもって読んだであらうか。それは感激というよりはさらに深い、永続的な力をもって培根の生涯に決定的な影響を残すものとなった³¹⁾。

29) 村上寅次、前掲書、293-356頁。

30) 村上寅次、前掲書、336頁。

31) 村上寅次、前掲書、339頁。

新島は1890（明治23）年1月23日に永眠する。新島の亡骸は翌日1月24日に汽車で京都に移され、棺は京都駅から自宅まで学生に担がれて運ばれた。棺を担いだ学生の中に波多野培根もいた。葬儀をおえて間もなく新島の培根に宛てた遺言状を彼は受け取る。そこにはこのように記されていた。

同志社ノ前途ニ関シテハ兼テ談シ置タル通りナリ、
何卒将来ハ同志社ノ骨子ノトナリ以テ盡力セラレンコトヲ切望ス

明治二十三年一月二十一日

新島 襄³²⁾

第2節 「第2部 天職を求めて」の概説

「第2部 天職を求めて」を構成するのは7つの章である。前半の4つの章は波多野培根が同志社卒業後に母校に奉職しながらも天職を求めて遍歴し、ついに同志社に帰って来るまでを扱っている。後半の3章は当時の培根と彼に影響を与えた人物をテーマごとにまとめている。まず前半の4章を概説する。

(1) 波多野の遍歴—第2部の前半—

「十. 予備学校教師時代」³³⁾は、培根が同志社予備学校に務めた頃の時代状況と彼が同志社を辞任した理由について考察している。

新島襄の死は関係者に深刻な打撃となったが、彼らの課題は設立者の精神に従って同志社を維持発展させることであった。そこで臨時社長として山本覚馬を迎え、小崎弘道が1890（明治23）年3月に校長に就任した。またそれまでは1年間であった予備学校修学年限を2年間に変更し、併せて同志社組織内の学校として整えていくことにした。この年の6月に同志社普通学校を卒業した培根は、9月より予備学校で数学を担当する教師として迎えられた。この時の予備学校主任は柏木義円である。

32) 村上寅次、前掲書、352頁。

33) 村上寅次『波多野培根伝（二）』稿本、359-427頁。



明治23年初夏，同志社予備学校嘱託教師時代，卒業する生徒たちと共に。中央，培根。23歳。
村上寅次『波多野培根伝(二)』稿本，(370頁)より
提供：西南学院100周年事業推進室

しかし、「日本の思想界は漸く変調を帯び来り次第に所謂保守的反動の時期に入らんとしつつ」あった³⁴⁾時期に，同志社の経営も厳しさを増していた。この時の社会状況を象徴する出来事として「内村鑑三不敬事件」(1891年)と「奥村禎次郎事件」(1892年)³⁵⁾がある。

培根はキリスト教学校に対して反動的な状況の中であって同志社予備学校で数学を教えていたが，1892(明治25)年5月31日付で同志社を辞任する。新島の遺言により同志社への使命を托されていた培根がなぜ辞任したのか。キリスト教伝道活動への志を表明した彼の2つの覚書が，辞任の理由を推測させている。

34) 波多野培根「同志社普通部の回顧十年」

35) 村上は「奥村禎次郎事件」については，詳細にいきさつを述べている。

参照，村上寅次，前掲書，383-404頁。

明治二十五年六月、伝道ノ為メ奥州ニ行ク志ヲ抱キ辞職。

‘Evangelist’ 大ニ感ズル所アリ、伝道ノ決心ヲ起シ強テ同志社ヲ辞職シ、明治二十五年八月ヨリ二十九年十二月迄（四ヶ年半）伝道ニ従事シ、此間専ラ宗教学ヲ研磨ス³⁶⁾。

「十一．遍歴（一）」³⁷⁾は、東北地方で培根が従事した開拓伝道と教会活動について分析している。彼が日本基督伝道会社所属の伝道者として、山形県の酒田に派遣されたのは1892（明治25）年8月である。酒田における開拓伝道は成果の少ないきびしいものであったと推測されるが、村上はそれが「かなりな程度に充実したものであったと推測」し、その根拠を3点挙げている³⁸⁾。しかし、培根は1893（明治26）年12月には酒田から宮城県涌谷の開拓伝道に移動している。さらに1894（明治27）年5月には仙台へ、同年9月には福島県白河の開拓伝道に移っている。白河での伝道活動も約半年で終わると、1895（明治28）年3月からは仙台にあった宮城教会の主任伝道師に就任した。この時をもって培根の開拓伝道は終わり、生活も幾分安定したと考えられる。そこで、同年4月22日に横浜組合教会で丸山貞と結婚した。時に培根は28歳、貞は20歳であった。次いで6月になると、津和野から母と弟を呼び寄せている。ところが、1886（明治29）年には宮城教会を辞任し、同年12月に伝道活動の一線からも退いている。

「十二．遍歴（二）」³⁹⁾は、学校の教師として仙台・函館・奈良県畝傍と転動する培根と彼をめぐる周辺の事情について検討している。伝道界を退いた培根

36) 村上寅次、前掲書、411-412頁。

37) 村上寅次、前掲書、428-452頁。

38) 3点とは、波多野培根『眞道指鉄』（大阪福音社、1893年5月）の出版、木村清松との出会い、弟習農の熊本英学校への入学である。

参照、村上寅次、前掲書、434-444頁。

39) 村上寅次、前掲書、453-532頁。この章のタイトルとして目次には「遍歴（二）」とあるが、本文には「尚綱女学校とプゼル女史」とある。本稿は内容を考慮して、目次にあるタイトルを採用している。

は、1897（明治30）年1月から仙台にある尚綱女学校で数学と漢学を教えた。尚綱女学校で教えた期間はわずか1年3か月であったが、村上是校長ブゼル女史を初め教員・生徒からの評価は高かったとし、これが後に培根を西南学院に結び付けるきっかけになったという⁴⁰。なお、仙台において培根はただ一人の弟習農を失っている。1897（明治30）年10月のことである。1898（明治31）年4月培根は北海道丁立函館中学校の英語担当教師として北海道に渡る。同志社の先輩岸本能武太の紹介によるものと思われる。函館に移った年の11月に今度は妻の貞を東京で失っている。家族を離れ、彼女はしばらく東京で療養していたと考えられる。一方1890年代に様々な問題が続いた同志社では、1899（明治32）年に同志社復興運動の先駆として加藤延年と三輪源造が同志社中学校（翌年「同志社普通学校」と改称している）に教師として復帰している。彼らの間では復興運動のリーダーとして培根を呼び戻す動きが次第に盛んになったと推測される。岸本の推薦により、培根は1901（明治34）年2月に奈良県の畝傍中学校から英語教師として招かれる。そこで、奈良に移る直前、培根は函館教会（メソジスト系）で藤田貞子と結婚した。培根は34歳、貞子は22歳であった。1901（明治34）年4月から1904（明治37）年8月迄、培根は畝傍中学校の英語科教師として働いた。その間に、同志社では彼の母校復帰への要望が強まっていた。

「十三．同志社に帰る」⁴¹は、母校に復帰した培根が着実に実行した同志社の改善運動と海老名弾正及び原田助の同志社をめぐる動向を叙述している。牧野虎次の要請を受けた培根は、1904（明治37）年9月に同志社普通学校教師に復帰する。この年、同志社は新しい専門学校令に対応した組織、普通学校・専門学校・神学校・女学校で構成されていた。これら各学校に関して培根が記した改善計画書のメモが残されている。その内容は復帰したばかりの培根がすでに意欲的に同志社の改善計画を具体的に検討していた事実を示している⁴²。と

40) 参照、村上寅次、前掲書、453-464頁。

41) 村上寅次、前掲書、533-599頁。

42) 村上寅次、前掲書、540-543頁。

ころが、1905（明治38）年7月1日発行の『新人』（第6巻7号）に海老名弾正「同志社は果して存在の価値ありや」という論説が掲載される⁴³⁾。

培根は1905（明治38）年8月1日付をもって、同志社普通学校教頭事務取扱を命じられる。以後、教頭として取り組んだ事項を示すメモ「明治三十八年九月以来、カヲ尽シテ矯正整理シタル点」⁴⁴⁾がある。このように培根が教頭として同志社の教育事業に取り組み始めた1907（明治40）年1月に原田が第7代同志社社長に就任した。早速、培根は原田に同年2月25日に「同志社普通学校整理案 第一号」⁴⁵⁾を提出して、これまでの改善運動と今後の計画を示した。7月3日には「整理案 第二号」⁴⁶⁾を提出し、同志社における普通学校の役割を強調した。ところが、原田が7月25日に発行された『同志社時報』第34号に発表した論説で強調していたのは専門学校令による大学昇格を重視する立場であった。

（2）同志社で教える波多野培根—第2部後半—

「十四．Bonus Pastor」⁴⁷⁾は、同志社普通学校で教えていた培根が当時の生徒や教員にどのように写っていたかをまとめている。加藤延雄は「彼（培根）はもちろん同志社の伝統的精神である基督教主義を強く明瞭に打ち出し、よい礼拝を行うことを心がけ、先ず礼拝出席と静粛に重点をおいた」⁴⁸⁾としている。品川義介は印象的に培根の一面を「何たる悪日か、此の一事が翌日、卒業式前に波多野先生の耳に這入ったからたまらない。性来の硬骨病は先生の怒りを忽ち爆発せしめ、直ちに何等か假借する所もあらばこそ、断々乎として全部退学

43) 村上はこの論説の全文を掲載したうえで、その内容について分析している。

村上寅次、前掲書、544-562頁。

44) 村上寅次、前掲書、563-564頁。

45) 村上寅次、前掲書、576-589頁。

46) 村上寅次、前掲書、591-594頁。

47) 村上寅次、前掲書、600-628頁。目次には「Bonus Pastor」とあるが、本文にはこのタイトルの記載がない。そこで、記述内容から判断して区分した。なお、タイトルはラテン語で「よい羊飼ひ」という意味である。

48) 村上寅次、前掲書、601-602頁。

を命じてしまった。泡を喰ったのは世間並みの社長閣下其の人である。多少の手加減を強要したが、其所は正義を踏んで怖れざる先生の事である。更に効目がない。小気味よくも其の凡てを一蹴してしまった。為めに折角の大卒業式も白け切った訳であるが、此の至誠を含んだ先生一流の果敢決行は全校の反省を促した⁴⁹⁾と伝えている。吉岡義睦は培根の違った一面を「それでいて先生は大変思いやりの深いやさしい反面を持っておられたのは不思議である。私も先生のそんな半面には全然気がつかずにいたが、ある時先生の私宅へ来いとこのことで、又何か叱られるのかとびくびくしながらお宅を訪ねると、学校で見たこともない笑顔をもって温情のあふれたご馳走を並べられ、『いつも君には気を使わせるが、今日は鐘のことは忘れてしまつてくつろいで下さい』と言われて、私は思わず熱い涙がこぼれたのを今なお覚えている⁵⁰⁾と追憶している。本多虎雄は「すると『あなたの授業料は納まっていますよ。…あなた、まだ知らないのですか。あなたの三学期授業料が未納であることを、普通学校へ報告しましたら、波多野先生がお出でになって、自分で納められましたんですよ。』…私は事の意外にただ茫然としてしまった⁵¹⁾」と思い出を述べている。

本多虎雄は教師の思い出にも触れ、「中堀愛作先生は、地方の公立学校に務めて居られたが、同志社からの招きを受けられてご就任の時に、波多野先生は厳粛に『同志社では生徒を信用しております。公立学校とは違います。どうか生徒を信用して教育をしていただきたいです』とおっしゃって、思わず背筋がひやりとしたと、当時を回想しておられた⁵²⁾と伝えている。加藤延雄は後に培根のキリスト教教育者としての姿勢に触れ、「私は、彼（培根）が同志社を去った翌年（大正八年）母校によび戻されたが、数年もたった頃、ふと教員室の扉に貼ってある名刺大の紙が目に入った。波多野の筆跡である。

49) 村上寅次、前掲書、606-609頁。

50) 村上寅次、前掲書、612-617頁。

51) 村上寅次、前掲書、618-622頁。

52) 村上寅次、前掲書、625頁。

Ego sum pastor bonus. Bonus pastor animam suam dat pro ovibus suis. Joan 10. 11⁵³⁾

命がけの教育は彼の覚悟であり、教師への要望であると知った⁵⁴⁾と『同志社時報』第22号に記している。

「十五. 自由主義⁵⁵⁾は1905 (明治38) 年から1910 (明治43) 年にかけて日本が推進した韓国併合政策⁵⁶⁾に対し鋭く対立する海老名弾正と培根の見解を述べている。海老名は日本政府の韓国併合に向けた政策を支持し、キリスト教も応分の役割を果たすべきだと主張した。これに対して、培根は海老名への公開質問状の体裁を採った「明治四十三年八月二十二日 (月), 『韓国合併』を報ぜる新聞の号外を読み、平素強く之を主張せる某氏へ」を書いて、日本の韓国併合政策を鋭く批判した。公開質問状の結びは次のようになっている。

古来、国家の禍機は大抵、正義を蹂躪して獲得せる領土の擴張に眩目酔心せる民衆が逆上して慢心を起し淫々相率て狂態を演ずるの時に胚胎せずや。愷鑒遠からず露西亞にあり (武人、政治を左右するは乱の階なり) 知らず足下以て如何となす。

明治四十三年八月二十三日

洛北の一隠士

勝山生⁵⁷⁾

村上寅次は培根の公開状について述べている。

53) ラテン語で、ヨハネ福音書 10 章 11 節の聖句である。「私はよい羊飼いである。よい羊飼いは羊のために命を捨てる。」

54) 村上寅次、前掲書、626-628 頁。

55) 村上寅次、前掲書、629-653 頁。

56) 1905 年に日本は日韓協約によって朝鮮を保護国とし、1906 年には京城に総督府を置いた。1907 年には韓国軍を解散させ、1910 年に韓国を併合した。

57) 村上寅次、前掲書、638-648 頁。

ここには、韓国人民と世界を欺瞞した日本の政治外交の在り方に対する道理に立つきびしい問責があり、朝鮮民族への同情と日本の将来の平和についての絶望、軍人政治への危機感が、彼の漢学の教養を示す格調ある（高い）文章を通して読む者の心に迫るものがある⁵⁸⁾。

「十五．増野悦興の死」⁵⁹⁾は、教育界に入って後の増野の動向と彼の最期を描いている。岐阜中学校・金沢中学校を経て、1899（明治32）年4月に増野は埼玉県立川越中学校の校長として赴任した。教え子の一人、岡田恒輔は当時の増野を回想して記している。

先生はその著述に「高貴なる人格」と命名されたが先生の人格そのものが高貴という二字をもって最もよく形容し得ると思う。先生の人格は清濁併せ呑むという如き闊達なる所はなかった。洒脱な所、磊落な所、才気煥発するというのが如き所はなかった。しかし飽くまでも真面目に、善と信ずる所は何物をも顧みず之を遂行された。不善と見る所は恐ろしいまでにこれを憎み卑しまれた。我々にはあまりに清くあまりに高く近付き易からず親しみ易からず思われる程であった。先生は世に阿り人に諂うという事は絶対に出来なかった。従って、辞令にも巧みではなかった。先生は円満な人ではなかった。…しかし自分は教育家として将た宗教家として先生と比肩し得可き人を多く見ない。自分は最も大切なる修養期の十年間を先生の下に送り得たのをまたとなく有り難く思うのである⁶⁰⁾。

1902（明治35）年2月まで川越中学校に在任した増野は、その後東京麹町区富士見町に瑞豊塾を開き、飯田町にあったユニバーサリスト教会の牧師を兼ねた。しかし、1906（明治39）年には肺結核が進行したので、長男肇を京都平安

58) 村上寅次、前掲書、649-650頁。

59) 村上寅次、前掲書、654-669頁。

60) 村上寅次、前掲書、655-658頁。

教会の西尾幸太郎牧師に託している。死の数日前、友人に「私の一生は成功の一生であった」と告げたという。また妻には「私は今に至って神に向かって唯感謝あるのみ」と語り、辞世に「汽車の中発車の笛を待つ心地」の一句を残した。1911（明治44）年10月18日に死去した。47歳であった。培根は増野とは連絡を取り合い、彼が亡くなった年にも7回も音信を交わしている。

第3節 「第3部 新島襄の教育精神継承と同志社辞任」

「第3部 新島襄の教育精神継承と同志社辞任」は7つの章から構成されている。前半の3つの章は当初は大学設立に批判的であった波多野培根が、設立決定後は校祖新島襄の教育精神を継承しようとして柔軟に対応する姿を描いている。後半の4章は紛争の中で自らの立場を貫き培根が同志社を去るまでを扱っている。

(1) 教育の精神を継承する波多野培根—第3部前半—

「十七. 同志社大学設立運動の中で」⁶¹⁾は、教育内容の伴わない大学設立に慎重であった培根が設立決定後は柔軟に対応するいきさつを記している。新島の同志社大学設立の志を受けて、培根がその実現を目指したことは言うまでもない。しかし、彼によると普通学校を改善充実した後に同志社大学の設立は可能となるのであって、事を性急に急ぐべきではなかった。ところが、1907（明治40）年頃から急速に同志社大学設立運動が起こる。その頃、培根は「同志社創立者ノ二大主張」と題する抜き書きを作って、末尾の「附記」で彼の考えを明らかにしている。

附記 明治四十二年八月十四日

勝山生

同志社大学の発起者は其計畫せる大学教育に期待する所、甚だ高し、彼は

61) 村上寅次『波多野培根伝（三）』稿本、672-732頁。

其大学を以て単に智識の源泉と為す而已ならず、又、徳風の渊源と為し、日本の文明に精神的要素を貢献して其内容を豊瞻且高尚ならしめ、依て以て滔々たる俗悪極まれる物質的風潮を抑制し且つ之を清めんと欲せり。

左れば人生に対する寛大なる理想なく、唯、烏合の衆を数千人集めて盛んに学問の切賣りを為すのみ、学生の精神的訓練の如きは之を度外視する所謂「大学」なる者は、彼の建てんと欲する所のものに非るや明かなり、況や不見識にもこれに模倣することをや、同志社大学は精神的強化の大主張を貫かんが為めに建設せらるゝものなれば、断じて策士等の手腕に依りて機械的に製造せらるゝ底の事業にあらず、否、敬神、愛人、愛国の積誠と篤実なる祈祷の中より生れ出づべきものなり、従て其成長と発展とに永き歳月を要すべし⁶²⁾、

ところが、1910（明治43）年3月19日の校友会総会が「大学開設基金三十万円」を決議し、4月12日には臨時同志社理事会が募金運動に応じることを確認した。こうして大学設立運動は活性化していく。このような流れの中で1912（明治45）年2月14日付で文部省の認可を受け、同年4月より同志社大学（神学部・政治経済学部・英文科）、同志社女学校専門学部（英文科・家政科）が発足する。同年2月28日付浦口文治宛書簡で、培根は大学開設に関する従来の立場を修正する理由を述べ、末尾に次の様に記している。

小生は大学開設の公表迄は漸進論者なりしが、已にレキシントンの砲声を聞きたる今日は此義挙の成立に努力致居 候⁶³⁾

「十八. 続同志社大学設立趣意書」⁶⁴⁾は、培根が1913（大正2）年10月25日付の『同志社時報』（第103号）に発表した論文である。序に続く第1段落で培

62) 村上寅次、前掲書、679-581頁。

63) 村上寅次、前掲書、714-727頁。

64) 村上寅次、前掲書、733-760頁。

根は近代国家における私立学校の存在意義を論じる。

私立学校にはその内容の面から見て、二種類に大別することができる。第一種類の私立学校は、「国家教育の不足を補うもの」、第二の種類は、「国家教育の不足を補うと共にその弱点を矯正し、その欠陥を填充するもの」とである。前者は「政府や地方府県の財政窮乏し、多数の学校を開きて社会の知識的需要を充たす能わざるを以て、その不足を補わんが為に設立せられたるもの」であって、この場合、「学科の組織は言うに及ばず、学生管理の方法に至るまで、一に範を官立学校に取り」、「別に何等の主張も特徴も無い。故に、国家の財政充実し官設の学校普及するに従い、これ等の学校は自然に衰微廢滅に至る」。しかし、後者は、「自存独特の天地を有するのみならず、官学の興隆普及に伴ひて倍必要の度を加へ、其隆替存亡は社会の安寧及び一国の文化の消長に極めて重大なる影響を及ぼすこととなる。」⁶⁵⁾

次に官学の存在意義と長所短所を述べる。

「官設の学校は国家維持国力発展の目的を以て国家直轄の下に経営せらるるものなれば、内部に於て思想及び政見の統一能く行はるるのみならず」、「機械的学問の研究及び技芸の熟練に至りては到底資力の貧弱なる民設の学校の競争を許さぬ」は当然である。しかし官学の長所には大なる短所が伴う。即ち「進歩せる政治教育と高尚なる精神教育を施し難き」点である⁶⁶⁾。

そこで私立学校の使命に触れる。

「故に国民の政治教育は唯現制度に恰適するの資格を與ふるのみでは十分でない、現在を守ると共に将来の新状態に適應する一否新状態を開拓するの

65) 村上寅次、前掲書、736-738頁。

66) 村上寅次、前掲書、749-741頁。

新勢力を涵養するの必要がある。国民に自己革新の政治的素養なき時は社会は停滞不進，老衰，腐敗遂に滅亡の外はない，此重大なる進歩的政治教育を施すことは官学の最も不便とし短所とする所なるに反し境遇の自由なる私学の最も便利とし長所とする所である。此処に私立学校の一大使命が存する。」⁶⁷⁾

村上是培根の主張する私立学校の存在意義について分析している。

培根は，社会の将来を開拓する活力ある主体的な政治教育は，政府の直接の管理拘束から自由な私立学校において初めて可能であり，そこに私学の使命があると主張するのである。これはおそらく武士階級に生を受け，儒教的教養のうちに育ち，さらに青年時代，東澤潟の塾における陽明学の思想に接してきた培根の精神形成の歴史のうちに体認されてきたものといえるであろう⁶⁸⁾。

さらに村上是培根の教育観における宗教的世界の意味を指摘する。

さらに彼（培根）は，この人間の精神生活に深い関係を持つものとして，宗教的世界を指示する。これによって人間の精神は安らぎと深さを与えられ「安心立命」に至り得るのであり，「民衆之（生命の水）を飲んで心霊の渴きを醫し，社会の道義之に触れて清新の活気を加ふ」という。それであるから，「真正の意義に於ける精神的教育即ち人間の道義性と靈性とを啓発涵養して精神の内容を作り以て人格を完成する修養」は人間教育の根本として重視されなければならないと強調するのである⁶⁹⁾。

67) 村上寅次，前掲書，743-744頁。

68) 村上寅次，前掲書，744-745頁。

69) 村上寅次，前掲書，746-747頁。

その上で、培根は「私立学校存在の意義」を「自由なる政治教育」と「高尚なる精神教育」にあるとし、これらが新島の二大主張であったと言う。最後にこの主張について所見を述べた上で、培根は「大学」に対して警告している。

大学と言へば必ず高等なる学問の研究と人格の訓練とを要件とする。研究もなく訓練もなく唯猥りに多数の学徒を集め知識の伝授を為すのみでは大学と称する事が出来ぬ、然るに近時我邦に於て私学の不取締と教育家の理想低落の為め動もすれば此名称を濫用するの傾向が見ゆる、世間は如何なる事を為すも同志社は先生の標準に従ひ名実相応のものを開設して大学と云ふ文字の尊厳を傷けぬやう深く注意する必要がある⁷⁰。

「十九. 自由と規律」⁷¹は、1905（明治38）年以來培根が教頭事務取扱として改革に取り組んでいた頃の同志社普通学校の校風を記している。1913（大正2）年11月18日に培根が記した覚書がある。

此四項目⁷²中、最も困難なりしは秩序回復の問題なり。同志社衰微時代より歴代の当局者、此問題に頭を悩まし手を焼きたること少なからず。宿弊は自由と同情の濫用にあり、抑も青年の教育上、戒しむべきこと少なからずと雖も、学校の綱紀弛廢して、生徒に自由の名を以て自墮落を行はしめ、同情の名の下に情実を許すより有害なるはなし、是れ断じて剛健有為なる活青年を養成するの道にあらず、たれば真正の自由と同情とは飽迄之を尊重するも似而非なる自墮落と情実とは飽迄之を排斥せざる可からず、教育家の苦心茲に在り。過去八年間、予は世評の如何を顧みず成敗を全く天に任せて果敢決行し、学校の秩序回復の為に全力を傾注せしが、幸にして豫期したる反対

70) 村上寅次、前掲書、758-759頁。

71) 村上寅次、前掲書、761-788頁。

72) 4項目とは「(一)校舎、運動上及び機械標本 (二)良教師の招聘 (三)生徒数の増加 (四)秩序の回復(紀律及風紀)」である。

も波乱も起らず、平和の中に此問題を解決することを得たるは全く神明の祐導と人和とに依るものにして同志社のために慶祝に堪へざるなり。Gott sei dank !⁷³⁾

ところで、培根が規律の回復を重んじた同志社普通学校に学んだ生徒は、「当時としては驚くほど自由主義」を感じていた。培根はこのような学風の本質に自治・友愛・信仰を挙げ、説明している。

(一) 自治自修

自治自頼の主義は同志社の創業時代に大志を懐て天下の各地より来学したる有為の学生等が残したる自学自修の美風と相合して校風の一特徴なる自治自修の良習慣となれるなり、苟も学に志して将来社会の要路に立ち国家有用の材とならんと欲する者は、…自ら監督し自ら規律し自ら奮励し、自己の独力に頼り、…自己の運命を開拓するの気概なからざる可からず、…。

(二) 友愛

敬神愛人の大主義に依りて連結せされ、一代の偉人新島先生を師表と仰ぎ同志社の一人となりたる以上は互いに相敬し相愛し…先輩後輩相扶け以て友愛の情直を全ふすべきである、…。

(三) 信仰

同志社の学風の第三の、然かも最重要の特徴は信仰である。…人類は物質的生活のみにて満足の出来る者でない、深き靈性の要求を充すと共に確実なる道義の支柱となるべき純正なる宗教の信念を要す、…是れ同志社に於て基督教を以て徳育及び靈育の基本と為す所以である⁷⁴⁾、…。

(2) 同志社を辞任する波多野培根—第3部後半—

「二十. 扮擾の予兆」⁷⁵⁾は、1914（大正3）年6月に開設3年目を迎えていた

73) 村上寅次、前掲書、763-766頁。

74) 村上寅次、前掲書、777-784頁。

同志社大学の経済学科で起こった学生によるストライキを記している。培根は「予の辞職の理由」の冒頭でこの事件に触れている。

大学創立後にも社長の校務に対する態度、依然熱心を欠きて一般の期待に伴はず（学校に直接関係なき教会関係の事務に執掌して留守勝なる事、殊に教育の要務なる学生の徳育及び風紀の維持に対して努力すること極めて少き事等）校務年を遂て弛廢に傾き、教育殊に教化の不振の結果は種々の忌まわしき事件（大正三年六月に於ける同志社大学の改革運動の後半が社長攻撃の大騒動となりしが如く）を誘発するに至れり⁷⁶⁾。

「二一．カーライルへの傾倒」は、1915（大正4）年5月1日発行の『同志社時報』（第120号）に波多野が発表した論文「因信而有望」に認められる。その中で、培根は2か所カーライルについて言及している。アブラハムの人物について述べた個所である。

世に真人（Sincere men）なる者あり、真人と何ぞや、カーライル流に言へば真人とは事実の人なり、虚偽暇作の生活に安んずる能はざる人なり、誠実ならざらんと欲するも能はざる底の人なり、良心の声雷の如く其耳朶に響くこと感ずるの人なり、…。

第二の個所は、アブラハムにならって「静に天を仰ぎて其処に神力の偉大なる発見を見、之より新希望、新元氣を得たる者」として、宗教改革者ルターをあげ、カーライルの「英雄崇拜論」の一節を原文のまま引用しているところである⁷⁷⁾。

75) 村上寅次、前掲書、789-795頁。

76) 村上寅次、前掲書、793-795頁。

77) 村上寅次、前掲書、800-801頁。

培根のカーライルへの傾倒は生涯を通じて変わることがなかった。1945（昭和20）年に河野貞幹に宛てた書簡の中でも培根はカーライルに触れている。

西南学院に於て十年以上『サーター・リサータス』（衣裳哲学）を学生と共に講読せし時代は、教育者としての小生の生活中、最も楽しき時代に属し、此の喜ばしき追憶は終世忘るるの期なかるべしと存じ候⁷⁸⁾。

「二二. 扮擾（一）」⁷⁹⁾は、培根が同志社辞任を決意するまでのいきさつを扱っている。続出する同志社の教育現場における不祥事の根本には原田助社長の全学に対する指導の取り組みに問題があると考えた培根は、社長に職務上の姿勢を改めてもらう以外にないと判断した。

余、明治三十八年以來之を中学部（大正五年二月二二日、普通学校は中学部と改称された）の教頭に承け、明治四十年、原田社長就任後も引続きて其職に当り、庸劣其器にあらざるに拘らず、微力を尽して社長を輔佐し来りしが、社長の校務に対する前述の如き態度が、社長に対する校内一般の信任と尊敬の減退の因となり、延て教育上に悲しむべき悪影響を及すに至らんことを患ひ、数名の主任教授と熟議して一の覚書を作製し、大正五年一月六日の夜、一名の教授同伴にて社長を訪ひ学事に就いて懇談し、覚書を呈して、社長は爾後外出を少くし、一層校務に熟注せられんことを求めたり、…⁸⁰⁾。

しかし、培根たちの期待は応えられなかった。1917（大正6）年には培根は原田の下で教頭職を続けることは困難だと判断し、それを辞する決意をする。

重要なる校務（即ち学生の精神的感化、風紀の維持及大中両学部学生の管

78) 村上寅次、前掲書、813頁。

79) 村上寅次、前掲書、815-892頁。

80) 村上寅次、前掲書、823-825頁。

理上の協調等)に就きて動もすれば意見を異にし、兎角社長と共鳴せざる余は、前に述べたる六月八日の事件後到底輔佐の重任を継続して中学部の教育を全ふする能はざるを感じ、大正六年の夏期休業を限りとして、行政官たる教頭の職を退き、事後は専ら平教員として母校の爲めに尽くさん決心し、愈々教頭の辞職願を提出せり⁸¹⁾。

ところが、同年9月17・18両日に開催された臨時理事会は社務と校務の分離を決議したので、培根は当面新制度による中学長事務取扱を承諾した。このようにして新制度による再出発に希望が見えるかと思われた時、原田社長は理事会に辞表を提出した。学内の対立は深刻さを増した。

社長の留否は慥に同志社の一大問題たるを失はず、何となれば社運の隆替、教育の振否は、社長其人を得ると得ざるとに依りて定ればなり、此重要問題が極めて真面目に考慮せられつつありし時、不幸にも「今回の事件は一部の人士が原田社長排斥の悪意を抱きて仕組める陰謀に外ならず」との流言校内の一角に起れり、此意地悪き流言一事件の真相を全く誤解せしむるに至れる不吉なる流言は、宛も燎原の勢を以て校内に傳播し、人心の反発を挑発し、遂には縷々新聞にも顕れて広く人心を蠱惑せしかば当初の標語たりし「学校改善」の声は何時の間にか全く囂々たる「陰謀」の声に圧倒せられ事の真相を知らざる者をして、今回の事件を一種の感情問題或は単純なる党争の如くに誤解せしむるに至りしは、実に遺憾至極の事なるのみならず又同志社の教育上の一大不幸と云ふべし⁸²⁾。

このような事態にあつて、培根は「解決私案」を作製し、学校の改善に向けて奔走していた。ところが、1918(大正7)年1月6日に至り、同志社辞任の決意を固める。原田社長に対するぬぐい難い「不信」がその理由であった。

81) 村上寅次、前掲書、839-841頁。

82) 村上寅次、前掲書、867-869頁。

「二三. 扮擾 (二) 同志社辞職」⁸³⁾は培根が同志社を辞職するいきさつを詳細に描いている。1918 (大正7) 年1月11日に辞表を提出した培根を憤激させる事件がおこる。

辞表提出後理事会よりは松本, 大沢二理事を通じ, 社長よりは中学部の評議員を通じて, 懇切なる留任の勧告あり, 更に中学部の職員諸氏及び生徒の代表者より同様な勧告を受けしも, 余は再考の餘知乏しきと, 尚ほ当時, 大学部の某教授の首喝に依りて校内 (校外には新聞利用) に起されたる, 彼の残酷悪辣, 実に言ふに忍びざる「所謂無節操教師処分要求」即ち同僚誹陥の大混乱に対する社長の理解し難き態度 (何故か社長は毫も之を阻止せず宛も之を黙認せるが如くに見えたり) とに鑑み, 愈々辞意を固くし一切の勧告を謝絶して断然辞職することと為せり⁸⁴⁾。

1月15日に原田社長より辞職許可の通知を受け取り, 培根の同志社辞任は確定した。翌日, 中学校の朝拝式で培根は告別の挨拶をしている。

人誰か母校を愛せざらん, 同志社は余の母校なり, されば余は今校門を辞するに臨み, 一度顧みて社運の隆盛を祈らざるを得ず, 思ふに同志社興隆の眞道は, 其教育の特長を發揮し, 広く国家社会に貢献して世人の期待に負かざるにあり, 凡て特長の無き物に「存在の理由」あるなく, 「存在の理由」なき物の永く昌栄せざるは自然の法則なり, 余は同志社が将来, 如何なる部門を増設するも, 終始, 新島先生の創業の精神に従ひ社意を恪守し, 学校の特長にして又光栄なる基督教主義 (神の眞理) の徳化を深くし, 良教授の指導の下に学業と教化の調和並進を計りて倍々興隆發展し, 其負へる高貴なる使命を尽さん事を望みて已まず, 此事にして当局者の眞面目なる考慮を引かぬか, 吾が願足る, 余一身の進退の如きは一小些事にして敢て顧る所にあらざるなり⁸⁵⁾。

83) 村上寅次, 前掲書, 893-935 頁。

84) 村上寅次, 前掲書, 897-898 頁。

第4節 「第4部 西南学院における日々」の概説

「第4部 西南学院における日々」は12の章から構成されている。同志社辞職後、新しい職を求めてバプテスト文書伝道に協力するため下関に一時移るまでを描いているのが前半の6章である。後半の6章は西南学院における波多野培根を扱っている。

(1) 50代の旅立ち—第4部前半—

「二四．辞職後の日々」⁸⁶⁾は、同志社を辞任した当時の培根の日々を描いている。辞職した頃、彼が日記帳の裏表紙に鉛筆で記した四行の書き込みがある。

辞職後の問題

- ①学校の善後策（顛末出版及びデビス氏伝翻訳）
- ②静思及び読書（休養の費用）
- ③後図⁸⁷⁾

村上はこの「書き込み」を分析している。

これによって培根がデビス伝完訳を「学校の善後策」として取り組もうとする意図をうかがうことができる。「辞職後の問題」として、①学校の善後策、に続いて記している ②静思及び読書（休養の費用）、③後図 の語は、その後に来たるべき人生に対処するために、培根が先ずどのような精神的な姿勢をもってこれを受けとろうとしていたかを示している。もちろん彼は、この時すでに齢五十を越えていた。孔子のいう「天命を知る」人生の段階に在った。それだけに今後如何なる社会生活を過ごすべきか、「後図」の問題は重大な、しかも容易ならぬ問題であることは彼自身の最もよく知るところ

85) 村上寅次、前掲書、902-903頁。

86) 村上寅次『波多野培根伝（四）』稿本、939-955頁。

87) 村上寅次、前掲書、939頁。

であったであろう。先ず急がずにしばらくを「静思と読書」にあてて、確信と決断の時を待とうとしたと思われる。「休養の費用」は家計の責任者としての当然の配慮であった⁸⁸⁾。

培根と行動を共にして同志社を去った人々も新しい道に向かっていった。浦口文治は東京商科大学専門部で英文学を教えることになり、培根は4月27日に一家を見送っている。水崎基一も5月4日に東京へ発っている。培根自身も仙台出身の英文学者で第三高等学校教授の栗原基としばしば会っているが、後図のためかもしれない。その頃、培根が読んでいた図書の一覧表が日記（大正7年〔1918〕5月27日）記されている。村上はこの一覧表について分析し、当時の培根の関心事を考察している。

この覚書は、人生の新しい展開を前にした当時の彼の関心の所在を示すものとして受け取ることができる。ここに見られる彼の精神的志向の第一は、彼の理想とした優れた教育者像の探求である。したがってそれは、単に学者・思想家としての業績についてではなく、その人の教育者としての生き方、その人格的感化に関するものであった。覚書に見られる第二の関心の分野としては、旧・新約聖書を貫流するヘブル民族の宗教思想の特色ともいべきもの、さらに第三にカント、フィヒテの流れを汲むドイツ理想主義の倫理思想に関するものに大別することができる⁸⁹⁾。

「二五．柏木義円と上毛教界月報」⁹⁰⁾は、1918（大正7）年に公表された柏木による一連の原田助社長を批判する論説を扱っている。柏木は『上毛教界月報』（第237号、8月15日）紙上で「同志社々長たる原田助君に与ふる書」で、同志社の現状を憂い原田の行動に不信と究明の声をあげた。なお、彼の論説は

88) 村上寅次、前掲書、944-945頁。

89) 村上寅次、前掲書、955頁。

90) 村上寅次、前掲書、956-971頁。

明治期における論争の一形式である「公開状」という性格をもっていた。

若し果して、足下にして、同志社々長として、組合教会理事として、公人の責任を解せば、須らく事実の真相を明にするの手段を取て、同志社と組合教会との威信と名誉とを保持す可き義と存候。吾人、同志社校友又組合教会員は、足下に向て敢て之を要求するの権利ありと信ずる者にて候。足下のために我母校と我教会との名の辱めらるゝは、吾人の忍ぶ能はざる所にて候。敢て足下の高慮を煩はし候⁹¹⁾。

原田は9月12日に柏木に答える一文を発表した。これに対して柏木は『上毛教界月報』（第238号、9月26日）で「原田助君に与ふる第二公開状」を公表した。しかし、柏木の言論活動も同志社理事会を動かすことはなかった。かえって、9月27日開催の理事会は全会一致で原田を同志社総長に決定した。このような動きに対して、柏木は『上毛教界月報』（第239号、10月15日）で、「敢て同志社理事諸氏に訴ふ」と「再び原田助君に」を公表して、理事会の対応を問い原田の責任ある弁明を求めた。

「二六．原田総長の退任」⁹²⁾は、原田助退任のいきさつを叙述している。柏木義円の言論活動は各地の同志社校友会支部に問題を提起した。こうして、10月19日の東京校友会支部総会、11月14日の横浜校友会支部総会、11月21日の神戸校友会支部総会、11月23日の名古屋校友会支部総会、12月7日の大阪校友会支部総会が次々と原田総長不信任を決議した。これに対して同志社の学内では校友会の動きに対抗する運動が起こった。このような混乱が続く中で、1919(大正8)年1月17日に開催された理事会に原田は辞表を提出し、これが受理された。こうして、1917・1918年と続いた同志社の扮憂は終結した。

「二七．愚公移山への決意」⁹³⁾は、培根がついに決めた新しい仕事について

91) 村上寅次、前掲書、959-963頁。

92) 村上寅次、前掲書、972-986頁。本文には「二六．原田総長の退任」の記載がない。内容から判断して、区分している。

記している。総長問題も一応の決着を見たので、1919（大正8）年春の培根はもっぱら読書と詩作に打ち込んでいた。そのような3月初め、培根は北山の愚公と呼ばれる90歳の老翁が一年発起し、山を移す計画を建ててそれに取り組んでいる絵を見て強い感銘を受ける。

題北山愚公移山図

千秋独見北愚公

壑壤叩巖意氣雄

九十移山君勿笑

精誠唯願亮天功⁹⁴⁾

愚公の行動力に感銘を受けると共に、培根は今後取り組むべき任務を真剣に問うのであった。事実学修の日々の中で、今後の人生の課題が次第に定まりつつあった。

九十歳の北山の愚公の移山の事業に似たるも、予は弘文会なるものを組織し、予の才能の及ぶ限りを尽して、通俗的基督教文学（翻譯、著作等）の普及を計らんとす。

予の今後の大目的は（其何の業務に従事するに關せず）此弘文会の事業を完成するにあるものとす。（大正八年五月五日記す）⁹⁵⁾

村上は培根が目指した「通俗的基督教文学」について考察を加えている。

元来彼（培根）は従兄の増野悦興のような弁論の人ではなくむしろ文筆の人であった。しかしその文筆活動の根本的性格は、士族階級の教養である儒

93) 村上寅次、前掲書、987-1003頁。

94) 村上寅次、前掲書、993-994頁。

95) 村上寅次、前掲書、998-999頁

教思想の伝統に結びつく漢詩、漢文学であった。江戸文学の他の一つの潮流である国文学、あるいは町人階級の戯作文学の伝統は彼のものではなかった。また青年時代からその中にあった日本の明治期のキリスト教はその倫理的な厳格さの点で鴎外や漱石に代表される「近代」の文学にもなお一線を画していた。したがって培根が理解している「基督教文学」とは、日本の社会における一般的な市民階級の生活感覚にある距りをもつものであった。培根がこのことについてどれだけの自覚をもっていたかは知り得ない。しかしまた、何らかの形でそのことを理解し、それを越えようとして敢えて「通俗的」と呼び、「普及」の語を用いたとも考えられる。いずれにしてもその実現と推進のために「弘文会」という組織を企画したことを知るのである。ここでも培根の理想主義的な性格がうかがわれる⁹⁶⁾。

「二八．パプテスト文書伝道への協力」⁹⁷⁾は、アメリカ南部パプテスト連盟外国伝道局の宣教師ワーン (E. N. Walne 1867-1936) の要請に応じて、培根が福音書店の出版事業を手伝うために下関に向かったいきさつを記している。ワーンは1892 (明治25) 年に来日した。かねて「キリスト教文書伝道」に関心と使命を感じていたワーンは、1903 (明治36) 年にミッション・ボードより助成金を与えられる。これによって長崎に福音書店を発足し、機関誌『星光』(月刊)を発行した。しかし、この機関誌は1909 (明治42) 年に廃刊となる。その後ワーンは下関に移り、福音書店も1916 (大正5) 年に下関に移転した。アメリカの文書伝道で用いられていた信仰的著作の翻訳出版には文筆の才能ある協力者が必要であった。こうして、ワーンの要請を受け培根は1919 (大正8) 年9月に下関に行く。

96) 村上寅次、前掲書、1001-1002頁。

97) 村上寅次、前掲書、1004-1022頁。

入下関

雲深無由仰蒼旻	雲深くして蒼旻を仰ぐに由無し
去寓長州古渡濱	去りて寓す長州古渡の濱
碧海白帆千里景	碧海白帆千里の景
洗除京洛十年塵	洗除す京洛十年の塵を ⁹⁸⁾

1920（大正9）年1月23日は新島襄の第30回記念日であった。この日、培根は詩一編を記して、新島が培根を信じ託した遺言が彼の人生を導いてきた事実を確認している。

師教（新島先師第三十記念日）

師教懇篤猶存耳	師教懇篤にして猶耳に存す
回顧當年涙滿臉	當年を回顧し涙臉に満つ
黽勉須磨魂一片	黽勉して須らく磨くべし魂一片
神光未普照皇州	神光未だ普ねく皇州を照らさず ⁹⁹⁾

「二九．その後の同志社，海老名総長の就任」¹⁰⁰⁾はその後の同志社の動向を扱っている。原田助総長の辞任以来，総長事務取扱を担っていた中村栄助は海老名弾正と次期総長就任交渉を進めていた。理事会はこの人事に賛成であった。しかし，培根は違った。1905（明治38）年7月に海老名が発表した論説「同志社は果たして存在の価値ありや」を忘れていなかったからである。

98) 村上寅次，前掲書，1019頁。

99) 村上寅次，前掲書，1022頁。

100) 村上寅次，前掲書，1023-1032頁。なお，第23章のタイトルは目次では「海老名総長の就任」であるが，本文では「その後の同志社」となっている。本文と目次のタイトルをあわせて採用した。

聞海老名某同志社總長就任之報

慨然有作

詭辯縦横無寸誠

詭辯縦横寸誠無し

狡兎又瀆總長名

狡兎又總長の名を瀆す

行人聞否御園畔

行人聞くや否や御園の畔

松籟時為鬼哭聲

松籟時に鬼哭の聲を為す¹⁰¹⁾

第8代同志社総長海老名弾正の就任式は1920（大正9）年4月16日に行われた。前日の4月15日に同志社は文部省より大学令による大学として設立認可を受けた。そこで、大学の学生が發起人となり、5月13日に海老名総長歓迎会と大学昇格祝会園遊会を校庭で行っている。

(2) 西南学院における波多野培根—第4部後半—

「三〇．西南学院へ」¹⁰²⁾は、培根が就任した頃の西南学院と当時の培根を描いている。1920（大正9）年9月に培根はワーンの紹介と推薦により学院に就任した。学院は1916（大正5）年4月に私立中学校西南学院として開設され、1918（大正7）年には西新に移転していた。培根の着任した1920年は創立5年目で最上級生の5年生までが揃った年である。当初、培根は英語と歴史を教えながら礼拝の指導をしたと推測される。宿舎としては当初から中学部舎監住宅の2階に居住し、3度の食事は寮で生徒と共にとっていた。その後、中学部宿舎3階の一室に移った。さらに1930（昭和5）年には高等学校玄南寮に移転している。その頃の様子を杉本勝次は記している。

先生は福岡にいらした間、ずっと西南の寄宿舍の一室での独り住みであられたが、先生のお部屋にお邪魔する時、壁一杯の大きな書棚には何百冊もの和漢洋の書物が整然と置かれ、ロンドン・タイムズなどもキチンと少しの

101) 村上寅次、前掲書、1026頁。

102) 村上寅次、前掲書、1034-1103頁。

(42)

Seimon Gakuhin, Fukuoka,
December 9, 1936.

Dear Mrs. Wahe,
It is a little more than two years
since I saw both Dr. Wahe and you last just
before your departure for America.

All your friends here, who are grateful for
your missionary work in Japan as well as for
your warm personal friendship, have been
praying for both of you, and believing that you
are peacefully enjoying old age in California.

You can imagine with what dismay and
sorrow the sad news of Dr. Wahe's passing away
on Oct. 21, has been received by them. They have
condoled with you in your affliction, and expressed
their most sincere sympathy. They write
in regretting that they have lost one of the most
prominent leaders in the Christian field — pioneer
of Southern Baptist Mission of Japan; originator
of the Gospel-propagation by means of religious

literature and travel; designer of many Church
buildings; trustee of two Seimon Colleges;
and especially, a promoter of friendly relations
between U. S. A. and Japan.

His long forty-two years missionary life and
his fruitful interesting work, the spirit of which
is embodied in his impressive farewell address,
"My duty will be to feel to America, but
my soul remains in Japan,"
will be not only the source of inspiration for
many Christian workers, but, under God's blessing,
foundational stones in the great work of the evangelists
of the Kingdom of God in Japan.

As for myself, the note of his decease caused
me more grief than I can express. I shall
never forget his unchanging goodness and the
special favor of introducing me to be a teacher
of Seimon Gakuhin here at Fukuoka.

Condoling with you and wishing you
God's never-failing consolation, I am
Yours sincerely,
M. Hartono.

培根のワーン夫人宛英文書簡（1936年12月9日付）
村上寅次『波多野培根伝(四)』稿本、(1037-1038頁)より
提供：西南学院100周年事業推進室

乱れもなく整理整頓されていたこと、そして、お部屋には机が二つあって、一つの机は『聖書』を読むためだけの特別のものであった¹⁰³⁾。

西南学院は文部省の認可を受けて、1920（大正9）年4月から高等学校を開設した。当時の様子を河野貞幹が『西南学院七十年史 上』（572頁）に記している。

水町先生が部長，若い大村(匡)先生が補佐役，伊藤哲太郎氏が事務長。会社重役だったヒゲの生えた紳士，柔道五段の猛者など，生徒として老若男子仲よく入学。中学生校舎の二階を間借りしていた一生涯和服で通された波多野培根先生は，すでに中学部で教えて居られ，高等学部にも講師として教えられた。易者のおじいさんそっくりであった。まことに少数教育で，皆互いに知り合って，家族的な空気の中に育って行った¹⁰⁴⁾。

103) 杉本勝次「序文」（『勝山餘籟』）

就任当時嘱託講師であった培根は1923（大正12）年からは高等学校教授となり、文科1年には西洋史、2年には哲学史、3年には英論文の講読を教えた。教科書はすべて原書で、3年生にはカーライルの『英雄崇拜論』、4年生にはカーライルの『衣裳哲学』を用いた。

村上はその頃の培根の余暇の過ごし方を紹介している。

日曜日の午後や祝祭日などの暇な時間における培根の楽しみは、市内の古書店めぐりと近郊の歴史散歩であった。当時、福岡市内には九州帝大や福岡高等学校などの官立学校を背景にして洋書の丸善は別格として、古書店で相当に格の高い古書専門店が千代町や中島町には軒を列ねていた。培根はそれらの古書店の上得意として店主らと懇意になった。千代町の「山内書店」の店主は戦後まで培根のことをよく記憶して後年次のように語っていた。

「先生は実に変わった方でしたね。毎月俸給日が来ると必ず私のところへみえて書物を買われました。本当に書物が好きな方だったですね。」¹⁰⁵⁾

若き同僚であった伊藤佑之は当時の培根について、次のように記している。

西南学院時代の先生は、清白孤高ユング・フラフの秀峰を偲ばしめ、又レバノンの香柏を思はされるような超高な一凡ての上に超然たるような一存在であられた。科長とか部長とか一切そうしたものを固くお断りになって、ひたむきに学問・研究に精進され、これによって神と人ともに奉仕されて余念なきものようであられた。時たまにチャペルで声を励まして大声叱咤され、また声涙ともにくだるアピールをされたこともあったが、おおむね深山中の太湖のようなしづけさのうちにあられ、黙々として一路真理の探求と菁莪の業に邁進される崇高な姿が強く脳裏に焼きつけられている。いつも謹厳、枯淡そのもののような古武士か高僧の面影を見る御姿の前には襟が正され、

104) 村上寅次、前掲書、1055-1056頁。

105) 村上寅次、前掲書、1070-1071頁。

頭がさがる思いがした。先生の歩まれた跡には何か厳粛なものの馨りが残されているような感さへしたものである¹⁰⁶⁾。

1924（大正13）年9月28日に培根は教師として重んじてきた「三事」についてコメントしている。

三事

①歴史（欧州近世史）

欧州に於る近世の強国の盛衰消長の顛末を教へ、併せて日本民族の世界に於る位置を明かにし以て健全にして博大なる国民的精神を学生の心に涵養することを務む。

②哲学（哲学史）及び論文

古今の大哲学者の世界観及び人生観の一斑を教へ、唯物思想の浅薄偏狭にして取るに足らざるのみならず道德上、極めて有害なることを明にし、以て健全且つ廣汎にして深味ある精神的人生観の理論的背景を学生の心に扶植することを務む（哲学史及び文明史、補足の意味にて、カーライル及び其他の精神学派の人々の筆になれる論文を講読す）。

③聖堂（禮拜）

チャペルの集会を規則正しく行ふことに依りて学生の信念涵養の機会を作ると共に福音的基督教に準拠して信仰の正脈を明にし以て彼等の純真なる信念と堅実なる信念と堅実なる品性とを養成することを務む。

予が西南学院に於る仕事は外面上、種々に分かるべきも、是等を一貫する内面の趣旨は、要するに前記の三事実行する事に外ならじ、而して之を実行することに依りて聊かにても学院の発展上に貢献することを得ば予が願足る¹⁰⁷⁾。

106) 村上寅次、前掲書、1077-1079頁。

107) 村上寅次、前掲書、1085-1088頁。

村上はこのコメントについて考察している。

培根の意図する「三事」とは、文中からこれをとりあぐれば、①健全にして博大なる国民的精神 ②深味ある精神の人生観 ③福音的基督教に立つ信念と品性、この三つの教育的実践に他ならない。「三事誓来感轉深」と感動をこめて詠じているが、これは何時からの決意であったか、その点については説明がない。ただ彼にとってこの三事は彼のこれまでの人生の思想的エッセンスであり、また彼自身の精神的骨格であった。さらにこれからもその全心を献ぐべき生涯の目標であることに相異なかった¹⁰⁸⁾。

「三一．斯文会—獨逸語研究会」¹⁰⁹⁾は培根の個人的ゼミナールで、1922（大正11）年から1944（昭和19）年まで22年間にわたって断続的に続けられた。会の名称として「斯文会」や「獨逸語研究会」が使われた。初期の頃（1922-1932）の様子を記す培根による記録「斯文会記録」が残っている。それによると、「本会の目的」は「本会は獨逸語の知識を進むると共に会員間の社交を温め、尚ほ間接に学院の学問及び教育上に多少の貢献を為したしとの目的の下に生れ出でたるものなり」とある。「本会の成立」としては「本会は大正十一年（西曆一九二二年）十月二十四日（火）午後六時半、左記の三氏（伊藤祐之・大村匡・波多野培根）が西南学院構内、中学部舎監住宅二階の一室（当時波多野寓居）にて第一回の会合を開きたるに始まる」としている。「本会の名称」としては「本会は本、会名を有せざる無名会なりしが大正十四年十月二十四日、第六十五回（満三年記念日）の席上にて『土曜会』、大正十五年十月二十五日、第百回（満四年記念会）席上、改めて『斯文会』と名づくることとなれり」とある。なお、村上は使用されたテキストについて分析している。

108) 村上寅次、前掲書、1089頁。

109) 村上寅次、前掲書、1104-1135頁。ただし、タイトルについて目次には「斯文会—フィヒテと陽明」とあり、本文には「斯文会—獨逸語研究会」とある。本文を採用した。

テキストの選択からみて、培根の当時の関心の重点を知ることができる。総体的にみれば、その一つはマルクス主義の哲学的性格とその思想史における位置づけである。培根のこの問題意識の背景に、当時（大正十四年 [1925] から昭和三年 [1928] に至る）の日本の社会が当面していた思想問題があったことを無視することはできないであろう。…「斯文会」テキストの選択にみられる培根の関心の第二の重点は、カントに始まるドイツ理想主義哲学の発展、とくにフィヒテの倫理思想を中心にするものであった。ドイツ理想主義の倫理思想に対する関心は、すでに早く培根のうちに在った¹¹⁰⁾。

ところで、1927（昭和2）年は王陽明（1472-1528）の没後400年にあたった。岩国の陽明学者東澤渦から薫陶を受けた培根にとって、陽明四百年記念の年は忘れることができなかつた。彼は陽明の思想の特色である知行一致説、到良知の説がフィヒテの「絶対的自我」に立って、「事実」と「行為」の一体、即ち「事行」（Tat-handlung）を説くその実存哲学に深く類似しているのに気付いていた。

「三二．海老名総長との対決」¹¹¹⁾は、1926（大正15）年の同志社評議員会における培根と海老名弾正の論争を扱っている。この年、海老名は同志社総長2期6年の任期を終え、3選の時を迎えていた。そこで、7月の評議員会は海老名総長3選について意見を求めた。以下、培根の日記からの引用である。

大正十五年七月二十三日（金）曇

必要ありて海老名弾正氏が作りたる「同志社は果たして存在の価値ありや」と題する文を写し置く。

七月二十五日（日）晴

午前十時より午後三時頃まで、同志社評議員会あり、之に出席す。出席者二十五名（午前二十四名）代員の委託若干票。

110) 村上寅次、前掲書、1113-1118頁。

111) 村上寅次、前掲書、1136-1143頁。

津下紋太郎氏，座長兼議長となる。

予，海老名氏が明治三十八年七月，新人誌上に「同志社は果たして存在の価値ありや」の論文の趣旨に就て

①午前は一般評議員の前に論じ

②午後は海老名氏の出席せられたる懇談会に於て，予は直接に海老名氏に対し詳しく質問せり

(氏は答辯を何等かの方法にてせらる筈)

評議員会は大多数を以て海老名氏を総長に推すことに決せり。

(予は絶対的不賛成論者にあらず，海老名氏の辯明を聞きたる後に非れば賛意を決する能わず。即ち賛意を保留することと決せり。)

予の語りし所を或は喜ばざる者ありしなるべし，然し予は神に対し，新島先生の霊に対し，同志社に対し，又我良心に対して，己の為すべきことを為し，言うべきことを言いたりと感じて，衷心に深き慰安と喜悅とを感じたり¹¹²⁾。

「三三．水町事件」¹¹³⁾は，1926（大正15）年10月に起こった水町事件とその後のいきさつを記している。この時，文科・商科の科長であった水町義夫と学生の間でトラブルが生じ，学生大会が水町課長退任要求を出した。これに対して培根と杉本勝次が調査と調停に入り，水町の科長職を解いた上で，彼がアメリカ留学することで事件は落ち着いた。翌1927（昭和2）年4月の新学期にあたり，C.K. ドージャー院長は培根に科長就任を懇請した。これを丁寧断った培根について，村上は分析している。

右の手紙によって，培根の高等学部教授の一員としての真摯で積極的な姿勢をうかがうことができるとともに，自ら決定した人生の目標に如何に忠実

112) 村上寅次，前掲書，1139-1142頁。

113) 村上寅次，前掲書，1144-1155頁。なお，タイトルについて目次には「水町事件―『日暮れて道遠し』」とあり，本文には「水町事件」とある。本文を採用した。

であろうとしたか、その断固たる生き方を明確に知ることができる。それはいわば世俗の人生に一線を画した「余生の人」であったことを示している。

培根のこうした確固とした教師としての姿勢は自然に同僚教授の信頼と敬意を集めた。その結果として、役職にこそ就かなかったが、時に応じて学校当局から学校運営について意見を求められたり、また教授会から選ばれて委員として様々な問題の処理に関与することとなった。文商科長就任を固辞した彼も、その後ドージャー院長が科長を兼任するやその相談機関として設けられた委員会には委員四名の中の一名としてその任を担った¹¹⁴⁾。

「三四．日曜日問題とドージャー院長排斥事件」¹¹⁵⁾は、1928（昭和3）年2月の学生ストライキに始まり、1929（昭和4）年6月のドージャー院長辞任に至る経過を叙述する。学生に信任のあった商科一教授の解任を契機として、学生は1928年2月10日にストライキを構え、同日開いた学生大会で院長退任要求を決議した。いわゆる「日曜日問題」である。これに対して理事会は次のように回答した。

- 一．理事会は事情を詳細に調査したる後、ドージャー院長に何等辞職に値する過失なきを認め、従来通り西南学院長として信任を置くこと
- 二．理事会は財力と事情の許すかぎり、適当と信ずべき方法に由りて、学院の進歩改善を計りつつあり、嘆願の形式にて提出せられたる学生の要求は要求として之を容れる能はず、尤も其中合理的と認むるものは之を改善し参考に資すべきも其選択又は実施の方法等に就て理事会は学生より何等拘束を受くるものにあらざること
- 三．理事会は学院の精神教育の基礎にして又存立の条件となる宗教の諸規定に対し学生に何等の容喙を許さざること
- 四．学院は如何なる事情あるも、其組織及教育主義に変更を加うるに能はず、

114) 村上寅次、前掲書、1154-1155頁。

115) 村上寅次、前掲書、1156-1176頁。

又財産不相応の経営をなす能はざるに依り、学生中之に服し難き者は自ら進退を決定して学院を辞去するも其自由に任すこと

五. 自決勧告書（院長宛）及嘆願書（当局宛）は之を返却す

六. 理事会は学院当事者をして将来斯の不祥なる扮擾の再発することを防止する為に適當なる処置を講せしむること

（神学生に手交する文書）

西南学院理事会は今回、神学生の一部が高等学部学生大会において取りたる態度を深く遺憾とす。諸氏は将来日本精神界の善良なる指導者たるべき重任を負う者なれば自今一層の自任自重を以て全学院の囑望に応へられんことを切望す¹¹⁶⁾

さて、理事会の回答を全学生に伝える難しい役割を担当したのが培根である。当日の培根について三串一士の証言がある。

前に述べたる学生側よりの院長退陣要求に対して、理事会は勿論その理由を認めずとして断然学生の要求を退けた。しかし誰が理事会の回答を学生に伝えるかという段になって、当局は苦慮の末、学生の尊敬最も深い波多野培根先生に白羽の矢を立てたのである。学生一同が中学部の講堂に集められ、波多野先生によって理事会の回答とその趣旨が伝達された。波多野先生に矢面に立たれては学生側も氣勢があがらず、結局そのまま黙従という格好となってしまったのである。後で波多野先生が私に述懐して、「自分は学生共の中に床板を踏み鳴らして激昂する者のあることを予期していたが、まことに意外であった。しかし、もしも学生たちが私の言うことを聞かず失敗に終わったならば、即刻学院をやめて京都に引揚げる覚悟であった」と漏らされた¹¹⁷⁾。

116) 村上寅次、前掲書、1161-1164頁。

117) 村上寅次、前掲書、1166-1168頁。

その後の経過については、培根の覚書がある。

さしもの紛糾した院長排斥事件も、理事会の確固たる態度により学生より誓約書を提出させたのみにて、一人の犠牲者をも出すことなく解決した。

こうして一応事件はおさまったが、ドージャー院長は学院を騒がしたのは自己の不徳の致すところとして責任を痛感し、またかねてから院長は日本人であるべきであるとの所信に従って四月辞意を表明し、その後任として千葉勇五郎氏を推薦した。理事会は強くドージャー氏の慰留につとめたが辞意が堅いので、やむなく千葉氏との交渉をはじめた。

しかし十月、千葉氏より辞退の通知を受けた理事会は、ドージャー氏が明年（昭和四年 [1929]）休暇帰米の時期まで留任を懇請することにし、ドージャー氏もやむなくこれを了承した¹¹⁸⁾。

1929（昭和4）年6月、休暇帰米を前にドージャーは院長を辞任した。

「三五. ボールデン院長留任事件」¹¹⁹⁾は、培根の日記を主たる資料として G. W. ボールデン院長辞任までのいきさつを叙述している。ボールデンは日曜日問題について理事会の意向を汲みながらも、現実在即した処理を計ろうとした。そこで、1929（昭和4）年12月に「日曜日委員会」を設置した。1930（昭和5）年に日曜日委員会はわずかに弾力的な対応の案を提案した。培根が担当し、記した理由書は次の通りである。

理由

我等は日曜日を「主の日」として厳守することを以て我等基督教者の務むべき宗教的義務の一なりと信ず。然れども日曜日競技の問題に關して従来、学院が執り来れる方法即ち競技を絶対的に禁止することは、

118) 村上寅次、前掲書、1169-1170頁。

119) 村上寅次、前掲書、1177-1254頁。ただし本文には35章のタイトルがないので、内容から判断して区分した。

- 一．其事が縷々学生と学院当局者との間の好ましからざる誤解或は衝突の因となりて校内の平和を害し教育の達成を妨げしこと
- 二．学生と他校学生との社交を困難ならしめて彼等を不幸なる孤立の状態に陥らしめしこと等

に鑑み、更に同主義の他校に於て行はるる实例に照し、日曜委員は、聖日厳守の精神を傷けざる範囲内に於て、学院が少しく従来の態度を緩和し多少の手加減を為すの必要あることを認む¹²⁰⁾

西南学院は1931（昭和6）年5月に創立15周年記念式を行った。しかし、理事会内部には日曜日問題が未解決のままに残り、教会内部でも「アサ会」をめぐる対立が生じていた。村上はこの間の事情をまとめている。

たしかにこの年は表面的に西南学院は祝賀の時であったが、理事会内部においてはなお日曜日競技問題が未解決のままくすぶっていた。さらにこの頃西南学院の母胎である日本バプテスト西部組合の諸教会において、いわゆる「アサ会」という教会内部よりの靈的改革運動が起り、各地の教会内にも分裂と対立が起こっていた¹²¹⁾。

1931（昭和6）年に入ると、ボールデン院長は辞任に追い込まれていく。学生はボールデン院長辞任問題について、翌1932（昭和7）年6月に第2回学生大会を開き、決議書と声明書を出した。

学生大会の決議書

我等西南学院高等学部全学生は現ボルデン院長の留任を決議し、断固たる意志と強固なる決意を以て之を要求す、但し六月二十五日午前十時迄に確答を得ん事を要求す

120) 村上寅次、前掲書、1226-1227頁。

121) 村上寅次、前掲書、1201-1204頁。

聲明書

我等西南学院高等部全学生は理事会に対し五月三日嘆願書を提出しボールデン現院長の留任を嘆願せり、然るに理事会は此の学生の嘆願にも拘らず、現院長を七月十日限り解職し後任院長を推さんとす、此處に我等は再び学生大会を開催し、断固たる決意の下に現院長の留任を決議すると共に声明を發して世の理解と同情を乞ふものなり

現ボールデン院長は外人宣教師中、稀に見る教育家にして、我等は院長自身にて有する教育方針に絶大の讃意を表するものなり、日本人に対する理解はもとより日曜日運動に対し亦相当の理解あり学生に対しては進歩的立場と好意とを以て臨めり

然るに財団法人西南学院に全権利を有する理事会なるものは、此の院長のとれる進歩的方針を快しとせず、日曜日運動競技出場の絶対禁止を要求し、悉く現院長のとれる方針に反対せり、此處に於て現院長は不得止辞表を提出せしが、理事会は一応の引留めもなく直ちに辞表を受理し解職せんとす。

我々は日曜日運動に対し、現今まで出場競技部の大将、マネジャーの犠牲さへも甘受し来れり、これ以上の取締りは最早忍従する不能、我々は飽くまでも無理解なる理事会に対し、我等の意志の貫徹を期し現院長の教育方針を支持するものなり

尚、今回の留任運動には卒業生の絶対的的支持あり、且つ純真なる学生運動たる事を共に辯明す

昭和七年六月二十一日

西南学院高等学部

学生大會¹²²⁾

培根は6月30日にこの事件に対する教師の立場を明らかにしている。

122) 村上寅次、前掲書、1211-1215頁。

ボルデン院長留任問題に対する教師一同の立場

- 一. ボルデン院長の留任に関して起れる扮擾の根本原因は、宣教師間にある不和にあるを以て予等は宣教師諸氏が過去の一切の行懸りを水に流し心機を一轉して互いに相恕し相譲り、和衷共同して傳道の事業にも教育の事業にも当られことを切望す、さすれば院長の更迭をみることもなく、学内には平和の風、長く吹きて萬人喜びを共にするを得ん。
- 二. 然るに不幸にも、ボルデン氏と他宣教師との間の不和は調停の見込みなき程、深刻、且つ複雑なることを発見せるにより、予等は彼等に和解を勧むるも効果なきを思ひ従って院長留任の問題に関しても唯、理事会の裁決に従ふの外に道なきを感ずるに至れり。別言すれば予等教師は此問題に関して、心ならずも厳正中立の位置に立てるなり、否立たされたるなり（教師が此問題に容喙することは扮擾を倍々大ならしむる虞あり）¹²³⁾

7月5日の理事会はボールデン院長の不留任を決議した。翌日、院長は辞表を提出する。なお、7月上旬に記されたと思われる培根による「日曜日競技許否の問題に関する教師一般の意見（方針決定の一大好時機）」が残されている。

日曜日競技許否の問題に関する教師一般の意見（方針決定の一大好時期）

- 一. 日曜日を「聖日」又は「主の日」として厳守することは基督教の原則の一なれば、之に対して依存のあるべき筈なし、然れども此原則を日曜日競技行否の問題に適當するに當りては、日本の国状と学生の大部分が未信者なる現状とを顧慮して多少の手加減を為すを穩当と思ふ、言い換ゆれば、日曜の競技を昭和五年に日曜委員会が研究の末、作成したる規定の標準（又は程度）にて取締るを適當とせん
- 二. 然れども理事会が此折衷案を採用せずして絶対禁止の方針を取る時は、萬障を排して左の四事を断行するの必要あり

123) 村上寅次、前掲書、1226-1227頁。

イ. 夏期休業中に、学院より生徒の父兄に対し、今後学院は日曜日競技絶対禁止を勵行する方針なる故、此方針に不同意の父兄は其子弟を退学せしめらるるも学院に於ては遺憾なき旨を通知し、父兄をして自由に去留を選ばしむる事、之に加へて九月に帰校せる学生には重ねて此旨を訓示し、去留、意に任せて堅く誓約せしむる事

(学院代表を意味せず、クラブ等の名を以て行ふ私的団体の競技は、日曜日に為すも之を咎めず)

ロ. 教師にも理事会より同一趣旨を明示して、自由に去留を選ばしむる事

ハ. 明年四月より入学の時、口頭試験に於て本人の決心を聞く事は言ふ迄もなく、父兄立合の上にて嚴肅なる宣誓式を行ふ事

ニ. 選手制度を廃止して自由運動主義となし、学友会費に大減額を加へて父兄の負担を軽くする事(但、明年度より)此の如く方針を一定して、学院に晴れやかなる空気を作り、理事会も院長も教師も生徒も、同心協力して校運の前途を開くべし。

(此の如くしても猶、学内の平和を維持することを得ざる時は、断然、学院高等部を縮小するか、又は廃校するを可とす)¹²⁴⁾

なお、日曜日競技が条件付きで公認されたのは、1940(昭和15)年1月9日であった。

1936(昭和11)年5月の西南学院創立20周年記念式典で、培根は勤続15年以上の教職員の一人として表彰を受けた。その日、培根は覚書を残している。

予が十六年間勤続中聊か西南学院のために盡くしたりと思う点

- ①学問
- ┌ カーライルの哲学(理想主義)
 - └ 西洋史、獨逸語(自由主義及立憲主義)

124) 村上寅次、前掲書、1239-1243頁。

- ②信仰
 - 聖書本位の福音的キリスト教宣布
 - チャペル集会 基督教主義教育の高調
- ③国民精神
 - 皇室中心、君民一体の国民思想
 - (進歩的国民主義)の鼓舞
- ④学位の秩序維持 三四の扮擾
 - 一. 水町事件
 - 二. ドージャー院長事件
 - 三. ボールデン院長留任事件¹²⁵⁾

第3章 キリスト教教育の継承—波多野培根と村上寅次

村上寅次『波多野培根伝』稿本を2つの観点から検討した。使用されていた「文献」の分析と使用方法及び村上『波多野伝』稿本の概説である。

これらの研究を通して明らかになった一つの事実はなお未完成な部分を残していると思われるとはいえ、村上『波多野伝』稿本がキリスト教教育精神の受容と継承を主軸とする質量ともに大部な原稿であることである。すなわち、儒教次いでキリスト教の教育によって波多野培根の人間性が形成された。さらに培根の教育活動によって同志社においても西南学院においてもキリスト教の教育精神が継承されていく。とりわけ、戦後の西南学院においては、いくつかの資料によって確認されるのだが、培根のキリスト教教育によって西南学院の教育精神史における重要な基層が形成されている。

そこで第2に、村上寅次をしてこの大部な『波多野伝』稿本を書かせた動機、あるいは内なる力は何であったのかという問いがある。『波多野伝』に向かった村上には、かなりの期間持続された並々ならぬ意欲があったことは間違いない。それは一体何であったのか。

このような村上に向けた問題意識から第3章を始めたい。

125) 村上寅次、前掲書、1253-1254頁。

第1節 村上寅次と西南学院

村上寅次と西南学院の関係を考察するにあたって、どのような研究方法が妥当性を持つのであろうか。ここでは村上の生涯を大きく二分することから、糸口を見出したい。すなわち、前半は彼の思想形成における学院との関係であり、時期的には出生から1938（昭和13）年3月に九州帝国大学での学生生活を終えるまでである¹²⁶⁾。後半は1938年4月に西南学院中学部に就職した後の学院との関わりであり、学院と村上の波多野培根をめぐる動きを中心に検討する。



村上寅次
村上寅次『望郷』口絵より

(1) 村上寅次の人間形成と西南学院

村上寅次は1913（大正2）年8月10日に福岡県八幡市（現在の北九州市八幡東区）枝光に生まれ、早くに父を亡くしている。後に幼い日の記憶をたどり、臨終の父を送った時を回想している。

126) 村上寅次の「履歴書」によると、村上は1938年4月に西南学院中学部に就職している。他方、『西南学院七十年史 上巻』（537頁）は1936年の西南学院中学部の宗教部活動の中に村上寅次を教員として記しており、この報告からすると村上は1936年には西南学院中学部の教員として在職している。また、村上寅次『歌集 望郷』（29頁）には、「1936年 福岡市西新の西南学院高等学部に入學 百道松原の学寮に生活す」とある。ここにも「1936年」とあり、村上が西南学院中学部に就職した年が高等学部入學と誤って記憶された可能性を考えさせる。しかし、西南学院中学部の就職時については「履歴書」を採用した。

回想

意識なき臨終の父によりゆきて
おづおづ呼べり幼なことばに

みちびかれ湿せる筆を手に持ちぬ
いまわの父の唇うるおすと

貨物車のとどろき長き夜の更けを
迫りし父が命まもりぬ¹²⁷⁾

幼児が深い経験を言葉で理解することはできなくても、このような経験は彼の生涯を貫いて存在の根底に関わる問いを発しつつ強い影響を与える。村上にとっても幼い日の父との死別という深刻な経験は、何よりも彼の感受性を鋭くしたであろう。しかも人間の生死に敏感な彼の感受性は自ずと宗教的感性を芽生えさせた。やがて、西南学院高等学部に入學した村上が学院のキリスト教や波多野培根から決定的な影響を受けた根拠として、豊かな宗教的感性を内在させた彼の幼児経験が考えられる。さて、八幡市枝光にある地元の小学校を卒業した村上は、1925（大正14）年4月に八幡中学校に進学する¹²⁸⁾。次いで、1930（昭和5）年4月には西南学院高等部商科に入學、玄南寮に入る。16歳であった¹²⁹⁾。彼は西南学院高等部における4年間に生涯を決定するいくつかの重要な出会いを経験する。

幼い日における父との死別という宗教的経験を実存的な求めとし、これに向

127) 村上寅次『歌集 望郷』47-48頁。

128) 旧制中学校の修業年数は5年間であった。したがって村上の場合、1925年4月に八幡中学校に入學し、1930年3月に卒業したと推定される。

129) 西南学院高等部の当時の修業年数は4年間であった。したがって、村上は1930年4月から1934年3月まで在學したと考えられる。なお、彼が所属した学科は商科であった。この事実は彼自身の証言によって確認できる。『西南学院七十年史 上巻』727頁。

けた答えとして村上寅次が西南学院高等部で出会ったのがキリスト教信仰である¹³⁰⁾。この信仰は彼の魂に平安をもたらしただけでなく、彼の生涯を決定した他の出会いにも通定した。村上が残した歌集には若い日にキリスト教の真実に向かう姿を歌った短歌がある。

阿蘇湯の谷行

心しづめ聖書に對うひとときを

谷風こもり梢ならしぬ

ローマ書七章

うつせみのなやみを越えていにしへの

聖人が説きしこれの文はも

砕けたる心を神はよろこぶと

知る時しややに心ひらけり¹³¹⁾

第2に村上が研究者として生涯追求することとなったテーマ、キリスト教教育との出会いである。彼は後に『教育的実存とキリスト教—福音の下における教育論—』¹³²⁾（以下、『教育的実存とキリスト教』と略記する）を著したが、「序」で次のように述べている。

最後に、著者が西南学院在学中、教育とは何かを身をもって示し、さらに著者を導いて教育学研究に入らしめて下さった現同志社大学教授篠田一人先

130) 村上寅次は1938年4月（他の資料によると1936年4月）に西南学院中学部に就職すると、早い時期から教師として宗教部活動に参加していた。この事実は西南学院高等部在学中に村上がキリスト教と実存的に出会っていた可能性を推測させる。

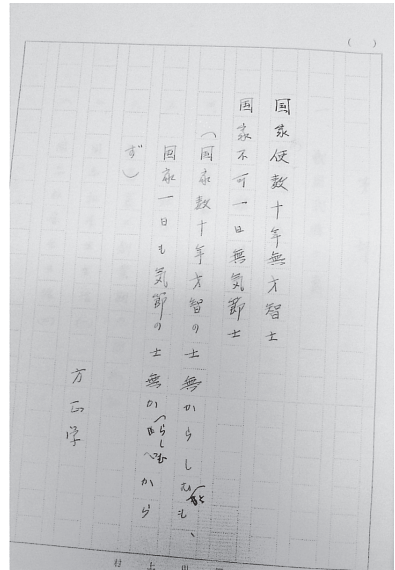
131) 村上寅次、前掲書、50-55頁。

132) 村上寅次『教育的実存とキリスト教—福音の下における教育論—』ヨルダン社、1962

生の深い学恩を記さずにはおられない¹³³⁾。

多彩な内容を含む『教育的実存とキリスト教』で注目すべきは、「第一部 教育的実存とキリスト教」である¹³⁴⁾。ここでは現場で教育活動に取り組む教員の実存的課題がキリスト教の立場から考察されている。ところで、このような実存的考察は如何にして可能なのか。第1部が教育現場における村上の経験に裏づけられた実践的性格を持つことは言うまでもない。そして、彼の教育現場における経験の中核には西南学院高等部で彼自身が受けた教育がある。

第3は教育への志であり、これが波多野培根から村上が受け取ったものである。培根は1930（昭和5）年9月15日に西南学院高等部の学生寮、玄南寮3階の第1号室に移っている。以来3食を玄南寮で採るなどして、高等学部の学生と共同生活をした¹³⁵⁾。村上は1930年4月に入学して以来、玄南寮で生活した¹³⁶⁾。したがって、玄南寮では村上が培根の半年先輩であり、彼は培根とは3年半寮生活を共にした。そこで、村上が培根から継承した精神性がキリスト教教育への志である。



培根が愛し、村上が『波多野伝』の冒頭において方正学の漢詩
村上寅次『波多野培根伝(一)』稿本(2頁)
提供：西南学院100周年事業推進室

133) 村上寅次、前掲書、3頁。

134) 『教育的実存とキリスト教』は3部構成となっている。次の通りである。

第1部 教育的実存とキリスト教

第2部 プロテスタント教育の歴史的展開

第3部 現代キリスト教教育研究の動向

135) 玄南寮は3階建てで1部屋8畳に学生2人が生活した。定員数は50名で、培根は3階の西端の部屋であった。参照、村上寅次『波多野培根伝(四)』稿本、1186-1188頁。

136) 参照、村上寅次『歌集 望郷』29頁。『西南学院七十年史 上巻』627-628頁。

彼は、『波多野伝』稿本の冒頭で記している。

国家使数十年無才智士

国家不可一日無気節士

(国家数十年才智の士無からしむとも

国家一日も気節の士無からしむべからず)

方正学¹³⁷⁾

強調されている「気節の士」の育成こそ培根におけるキリスト教教育の志であり、これが村上『波多野伝』稿本の主題でもある。村上は玄南寮における寮生活を初めとした西南学院高等部で培根に身近に日常的に接し、彼のキリスト教教育の志に触れた。やがて村上自身も教育への志を継承して生きるなかで、培根との出会いの意味を再確認しながら取り組んだのが『波多野伝』稿本に違いない。

(2) 波多野培根の教育への志を追求して

1938（昭和11）年4月に西南学院中学部に奉職した村上寅次は、2度の徴兵（1940年に中国、1944年にルソン島）を経て、1947（昭和22）年4月には西南学院中学部の教頭を務めている。1951（昭和26）年4月には西南学院大学商文学科の専任講師となり、教育原理を担当した。

この年西南学院は創立35周年を迎え、記念誌『Seinan Gakuin Today and Yeaterday 創立三十五周年記念 1951』¹³⁸⁾を出版した。編集者は村上寅次である。この記念誌に波多野培根が度々登場している。まず、表紙を開いた裏頁の上段に

137) 村上寅次『波多野培根伝（一）』稿本、2頁。

138) 村上寅次（編）『Seinan Gakuin Today and Yeaterday 創立三十五周年記念 1951』西南学院、1951。同記念誌によると村上は当時西南学院大学商文学科専任講師であり、教育原理を担当している。「履歴書」によると、西南学院中学校で教えながら西南学院大学学芸部非常勤講師を兼任している。1951年当時の村上の略歴について、ここでは創立三十五周年記念誌の記述を採用した。



記念誌の C. K. ドージャーと波多野培根
『Seinan Gakuin Today and Yesterday 創立三十五周年記念 1951』より

C. K. ドージャーの写真と彼の1927（昭和2）年2月13日の日記が掲載されている。下段にはドージャーと同じサイズで波多野培根の写真と彼の漢詩「述志 3首」が置かれている。

述志（三首）

一

庸才叨學古賢心
三事誓來感轉深
不厭前程千里遠
晚成二字是吾藏

庸才 叨りに學ぶ 古賢の心
三事 誓い來れば 感 轉た深し
厭わず 前程 千里の遠きを
晚成の二字 これ 吾が藏

二

閑居退隱事難期
切々偏憂世道危
老境未消匡濟志
弘文報國尚堪為

閑居退隱 事 期し難し
切々として 偏えに憂う 世道の危うきを
老境 未だ消えず 匡濟の志
弘文報國 尚 為すに堪う

三

欲開神國救斯民
努力耐難不顧身
殉節由来吾黨志
仰看十字架頭人

神國を開き この民を 救わんと欲し
努力 難に耐えて 身を顧みず
殉節は 由来 吾が黨の志
仰ぎ看る 十字架頭の人

昭和二十年乙酉五月十一日

昭和二十年乙酉五月十一日

勝山學人¹³⁹⁾

勝山學人

杉本勝次は「建学の精神に立脚して一使命達成を神に誓うー」の中で「われらがモーゼなりし故シー・ケー・ドウジャー院長，われらのヨシュアたりし故波多野培根先生」と培根に C. K. ドージャーと並ぶ位置づけを与えている¹⁴⁰⁾。伊藤祐之は「義と愛との人 波多野培根先生の片影」でキリスト教教育に打ち込んだ波多野培根の姿を伝えている¹⁴¹⁾。執筆者名不記載の記事「波多野先生と掲示板」は「然し黙々とした先生の胸中には深くいつも沸々とたぎる憂国の情があった」として、波多野培根「原城陥落3百年記」を紹介している¹⁴²⁾。

さらに「座談会 あの頃の学生生活を語る」で波多江一俊は追憶している。

139) 「述志 三首」は『勝山餘籟』(260頁)にも載っている。

140) 杉本勝次「建学の精神に立脚して一使命達成を神に誓うー」(『Seinan Gakuin Today and Yewaterday 創立三十五周年記念 1951』2頁)なお、杉本は当時学校法人西南学院の理事長であった。

141) 伊藤祐之「義と愛との人 波多野培根先生の片影」(『Seinan Gakuin Today and Yewaterday 創立三十五周年記念 1951』6-7頁)なお、伊藤祐之は当時西南学院大学商文学科の教授で、基督教概論を担当していた。

142) 「波多野先生と掲示板」(『Seinan Gakuin Today and Yewaterday 創立三十五周年記念 1951』7頁)、無記名の執筆者は編集者であった村上寅次の可能性がある。

特に西南学院に対する圧迫も強くなって、落ち着いて勉強出来なかった、自然学生生活も無味乾燥で面白くない様になり、学校なんか止めてしまって家に帰ろうかという者もあったが、「波多野バイコンさんのござるけんの」と云ってやめなかったのですね。それ程波多野先生の学生に対して与えた影響は大きかった。あの何にも信ずることの出来ないような混乱した緊迫した時代に我々学生は眞から波多野先生を信じ、尊敬しておりました¹⁴³⁾。

次いで、波多野培根に関する論文である。村上寅次は1959（昭和34）年から1977（昭和52）年にかけて、ほぼ10年に1本培根についての論文を書いている。下記の通りである。

「波多野培根における儒教とプロテスタンティズムー日本キリスト教教育思想史の一断面ー」（『西南学院大学 文学論集』第6巻第1・2号、1959〔昭和34〕年12月）¹⁴⁴⁾

「波多野培根における『キリスト教と愛国』の問題」（『西南学院大学 文理論集』第7巻第1・2号、1967〔昭和42〕年2月）¹⁴⁵⁾

「新島襄と波多野培根ー明治教育精神史の一断面ー」（『西南学院大学 児童教育学論集』第3巻第1号、1977〔昭和52〕年3月）¹⁴⁶⁾

ここでは「波多野培根における儒教とプロテスタンティズムー日本キリスト教教育思想史の一断面ー」（以下、「儒教とプロテスタンティズム」と略記する）

143) 「座談会 あの頃の学生生活を語る」（『Seinan Gakuin Today and Yesterday 創立三十五周年記念 1951』13-14頁）

144) 「波多野培根における儒教とプロテスタンティズム」は『勝山餘韻』（295-306頁）に再掲載されている。

145) 「波多野培根における『キリスト教と愛国』の問題」は『勝山餘韻』（307-317頁）に再掲載されている。

146) 「新島襄と波多野培根ー明治教育精神史の一断面ー」は、1976年5月11日に西南学院創立60周年を記念して大学学術研究所主催で行われた講演会における記録に加筆したものである。

の概要を見ておく。「儒教とプロテスタンティズム」は2章で構成されている。「第1章 道徳」と「第2章 歴史」である。第1章の冒頭で村上は儒教とプロテスタンティズムにおける道徳の本質的相違を指摘する。

儒教が、人間の道徳性を直接に肯定するのに対して、プロテスタンティズムは、それを否定することによって、弁証法的に肯定する。現象面においては、両者は、共に「道徳的生活」の領域において共通するものを持ちながら、それを支える基盤において、本質的に異なるものである¹⁴⁷⁾。

このような違いを叙述したうえで、培根における第一の課題が道徳の問題であったとして、培根における『論語』と『聖書』理解を紹介する。

『論語』は道を載せたる重典であり、『聖書』は「神の福音」を載せたる天書である。『論語』は貴重なる書物なるも、要するに、人倫綱常を教ゆる一つの道学書に過ぎぬ。然るに、『聖書』は、崇高なる道徳を教ゆると共に、神人二界交渉の道を闢きて、脱罪・新生の要義を示し、神国の建設と言う前哲未言の大理想を掲げて、…¹⁴⁸⁾。

ここで、村上は培根において儒教からキリスト教への転向がいかにして生じたのかと問う。

「人間の行為は、究極する所、人間の意志に依りて定まるものなれば、精神学派の人々が声をそろえて、有ゆる問題解決の鍵は善心の涵養、別言すれば、善良なる意志の養成にありと主張することには、一大真理が存すると思う。」と述べて、道徳の行為的側面よりも、内面的意志的要素に、より重点を置いている。しかし、問題は、彼自らも「然らば善心を如何にして涵養す

147) 「波多野培根における儒教とプロテスタンティズム」(『勝山餘籟』295頁)

148) 「波多野培根における儒教とプロテスタンティズム」(『勝山餘籟』297頁)

べきか、これ実に問題中の問題である。」を云うている点に存する。しかし、問題の解決を得るためには、…福音の本質に立ち帰るならば、おのずと明らかであろう。すなわち、プロテスタンティズムにおける人間の救いは、善心の涵養という人間の努力とは、何ら本質的な関係を持つものではないからである。人間の善心・悪心を越えて、救いは神の恵みとして来るのである¹⁴⁹⁾。

「第2章 歴史」で村上はまず歴史学の性格を明らかにする。

歴史学は、歴史的事実に即してその因果関係を明らかにする学問である、ということが出来る。しかし、その歴史的事実を扱う時に、これにいかなる意義を附与し、いかなる位置づけをするかということになると、これを解釈する人の思想的立場が問題とならざるを得ない。これが歴史観の問題である¹⁵⁰⁾。

歴史観の課題に触れた上で、培根が歴史形成の主体である人間の育成についてどのように考えていたのかをまとめている。

波多野にとって、境遇や遺伝にも勝って、人間形成の主要因となり得る理想と信念は、どのようにして主体の内に形成されたのであろうか。「単に、理屈や思想だけで人の心は動くものでない。人心に深き感動を与えて感奮興起せしむるものは、正しき思想を人格に表現せる活人物、別言すれば、義人の感化を必要とする。」したがって、われわれが何らかの教育的感化を期待するならば、このような影響を与え得る人物に接しなければならない¹⁵¹⁾。

このように歴史形成に資するだけの人間の育成について叙述した後に、培根に見られる歴史形成の全く異なった要因を村上是指摘する。それが「摂理」である。

149) 「波多野培根における儒教とプロテスタンティズム」(『勝山餘籟』298頁)

150) 「波多野培根における儒教とプロテスタンティズム」(『勝山餘籟』302頁)

151) 「波多野培根における儒教とプロテスタンティズム」(『勝山餘籟』304頁)

摂理とは、人間の事件の中に現れる神の意志である。それは人間の事件の中に現れるものであるから、具体的には特定の個人あるいは国民生活の展開の中に現れる。したがって、摂理は、当然、特別な、特殊な、摂理となる。それは宇宙に内在する神の創造の意志に基づくものである¹⁵²⁾。

「儒教とプロテスタンティズム」と『波多野伝』稿本は、波多野培根における儒教とプロテスタンティズムというテーマをめぐって明らかに異なった研究手法を用いている。「儒教とプロテスタンティズム」は培根の経歴を踏まえながらも理論的な考察を行い、そのために彼の経験が背後に退いている。それに対して『波多野伝』稿本は培根の伝記であって、儒教からプロテスタンティズムに移行していく培根の精神性を若い日の経験を中心に叙述している。したがって、培根における儒教とプロテスタンティズムをめぐって、「儒教とプロテスタンティズム」と『波多野伝』稿本は補完し合う関係にある。「波多野培根における『キリスト教と愛国』の問題」（以下、「キリスト教と愛国」と略記する）は幾分伝記的要素を含んでいるが、全体としては理論的な構成を持つ論文である。したがって、培根におけるキリスト教と国家というテーマをめぐって、異なった手法による「キリスト教と愛国」と『波多野伝』稿本は補い合っている。それに対して「新島襄と波多野培根－明治教育精神史の一断面－」（以下、「新島襄と波多野培根」と略記する）は歴史的な研究手法を用いている。したがって、「新島襄と波多野培根」と『波多野伝』稿本は基本的に同じ手法である。ただし、「新島襄と波多野培根」が培根におけるキリスト教教育精神史の重要なポイントに焦点を合わせた研究成果であるのに対し、『波多野伝』稿本は培根の全体像を描き出している。このような描写における強調点の違いにおいて、両者には補完し合う関係がある。

最後に1977（昭和52）年12月に刊行された波多野培根遺文集刊行会編『勝山餘籟－波多野培根先生遺文集－』（以下、『勝山餘籟』と略記する）と村上寅次

152) 「波多野培根における儒教とプロテスタンティズム」（『勝山餘籟』305頁）

の関わりについて検討する。培根は晩年3度にわたって主要な論説などをまとめ、これに書名『勝山餘籟』を付けて出版する構想を残していた¹⁵³⁾。そこで、培根の生前の意思を受け1977年に遺文集を出版するために、波多野培根先生遺文集刊行会が組織された¹⁵⁴⁾。委員は次の通りである。

委員長 杉本勝次

委員 大村 匡・加藤康作・三串一士・長束正之・村上寅次・中村 弘・
波多江一俊¹⁵⁵⁾

1977年12月に出版された『勝山餘籟』の目次は、次の通りである。

序

宗教・思想¹⁵⁶⁾

歴史・教育¹⁵⁷⁾

講演¹⁵⁸⁾

詩歌¹⁵⁹⁾

153) 1944年4月7日, 1944年6月11日, 1945年9月9日の3度である。参照, 波多野培根先生遺文集刊行会編『勝山餘籟—波多野培根先生遺文集—』(287-290頁)。

154) 『勝山餘籟』の出版事業については, 以下を参照。『西南学院七十年史 下巻』(180-181頁), 塩野和夫「西南学院史 史料研究(1) 学院編集室史」(『西南学院史紀要』第1号, 16-39頁)

155) 村上寅次は波多野培根先生遺文集刊行会の委員を担当している。しかし, 村上が刊行会において主導的な役割を果たしたことを伺わせる事柄がいくつもある。たとえば, 村上寅次『歌集 望郷』の奥付は彼の主要な著書として『教育的実存』と『勝山餘籟』を並べている。これには十分な理由があると判断できる。

156) 「宗教・思想」に収められている作品は次の通りである。「一つにならん為」「『聖書』の英訳について」「アルプス国民に対する感謝」「ラルネッド老博士を送る」「隠れたるに見たまう神」「ヘンドリー教授の『創造主神』を読む」「アブラハムと星の教訓」「人間とは何ぞや」

157) 「歴史・教育」に収録されているのは次の通りである。「続同志社大学設立趣意書」「徳川光圀公を憶う」「京都同志社に就いて」「教育瑣言」「原城陥落の三百年紀」「新島先生の生涯の意義」

158) 「講演」に掲載されているのは「基督と愛国」である。

(付) 波多野培根先生の人と思想¹⁶⁰⁾

解説—村上寅次¹⁶¹⁾

編集後記

『勝山餘籟』の本論を構成する「宗教・思想」「歴史・教育」「講演」「詩歌」に収録されているのは、いずれも培根の作品である。これらは波多野培根先生遺文集刊行会が生前に培根の書き残していた原稿から選択し、掲載したものである。ところで、刊行会が選択した作品と村上『波多野伝』稿本を比較検討すると、興味深い事実が明らかになる。まず、「宗教・思想」で取り上げられた8編の作品であるが、これらの3編は村上『波多野伝』稿本でも使われている。以下の通りである。

「アルプス国民に対する感謝」(村上『波多野伝 (一)』稿本で使用)

「ラルネッド老博士を送る」(村上『波多野伝 (二)』稿本で使用)

「アブラハムと星の教訓」(村上『波多野伝 (三)』稿本で使用)

「歴史・教育」に収録された論説6本のうち、3本は村上の関係した作品でも紹介されている。

「続同志社大学設立趣旨書」(村上『波多野伝 (三)』稿本で使用)

「徳川光圀公を憶う」(村上「波多野培根における儒教とプロテスタンティズム」で考察)

159) 「詩歌」は「漢詩」と「和歌」から構成されている。

160) (付)「波多野培根先生の人と思想」には次の6項目がある。「(1)波多野培根先生略年譜」「(2)勝山學人の雅号の由来」「(3)澤潟塾の教育について」「(4)波多野培根先生と西南学院」「(5)書名『勝山餘籟』について」「(6)波多野培根先生著作目録」

161) 「解説—村上寅次」には村上の2本の論文が置かれている。「波多野培根における儒教とプロテスタンティズム—日本キリスト教教育史の一断面」「波多野培根における『キリスト教と愛国』の問題」

「原城陥落の3百年紀」（村上編『Seinan Gakuin Today and Yeaterday 創立三十五周年記念 1951』に収録）

さらに「詩歌」の「漢詩」で紹介されている作品のうち、十七の漢詩が村上『波多野伝』稿本に掲載されている。次の通りである。

「書懷（明治四二年十一月）」「贈淺野惠二氏（大正七年十二月二日）」「偶成（大正八年二月九日）」「憶同志（大正八年二月十三日）」「閑居雜詠 一，（大正八年二月二十二日）」「閑居雜詠 二，（大正八年三月九日）」「閑居雜詠 三，（大正八年三月九日）」「閑居雜詠 五，（大正八年五月五日）」「閑居雜詠 六，（大正八年三月十日）」「書懷（大正八年三月十三日）」「書懷（大正八年三月十三日）」「入下関（大正八年九月十日）」「入下関（大正八年十二月）」「壇浦所見（大正八年十二月七日）」「師教（大正九年一月二十三日）」「第五十六回誕生記念日偶成（大正十三年六月二十日）」「述志（三首）（昭和二十年五月十一日）」

このように『勝山餘籟』の本論を構成する「宗教・思想」「歴史・教育」「詩歌」の内容と村上『波多野伝』稿本等が用いる培根の資料を比較検討すると、両者にはかなりの割合で内容と資料に重なりがある事実が判明する。この事実は何を語っているのか。1つには『勝山餘籟』と村上『波多野伝』稿本が培根の自筆資料に関しては相当数共通する作品を用いて、それを前者は波多野の遺稿集とし後者は培根の自伝を作成していることである。第2に『勝山餘籟』の収録作品の選択にあたって、村上がかなりの影響を及ぼしたことを推測させる。

さらに解説として村上の2論文が用いられている。解説は通常、収録されている作品の説明である。ところが『勝山餘籟』の場合、なぜか解説で普通に行われる方法ではなく、培根に関する2論文の掲載をもって解説としている。これは刊行委員会の判断に基づく結果と考えるのが妥当であろう。要するに委員の多くが村上の2論文を評価して、これらの掲載によって『勝山餘籟』の解説にふさわしいと考えたのであろう。そうだとすると、刊行委員会は波多野培根

研究において村上の業績を高く評価していたことになる。

このように村上寅次が関係した西南学院における一連の波多野培根研究を調査すると、彼が西南学院中学部に就職した1938（昭和13）年4月以来、西南学院大学を定年退職した1984（昭和59）年12月まで一貫して波多野培根を主要な研究対象としていた様子が浮かび上がってくる。村上は西南学院に在職した45年間余りキリスト教に基づく教育を志した培根を想起してその志を追求した。これが村上が『波多野伝』稿本を執筆した背景である。

第2節 村上寅次『波多野培根伝』稿本の執筆事情

村上寅次は西南学院高等部の在学中、玄南寮における生活などを通して培根と日常的に接触し多大な影響を受けた。やがて母校西南学院に奉職すると教師の立場で波多野培根のキリスト教教育に関心を持って学び、研究を続けた。そのような中でかなりの歳月と集中力を費やして村上は『波多野伝』稿本を執筆した。ところが、稿本には「序文」もなければ、「あとがき」も「奥付け」もない。そのため、執筆作業がいつであったのか、執筆の動機は何であったのか、執筆期間における村上の研究関心に変化があったのかなど、執筆事情を探る直接の手がかりな『波多野伝』稿本にはない。ただ、『勝山餘籟』の「序」で杉本勝次が村上寅次は「早くから伝記の編集に手を着け」ていた事実を記している¹⁶²⁾。ここにある「伝記」は村上『波多野伝』稿本のことだと考えられる。そこで杉本勝次「序」を手がかりとして、村上『波多野伝』稿本の執筆事情に関する検討を始める。

(1) 執筆時期をめぐって

村上『波多野伝』稿本の執筆事情に関するいくつかの課題を検討する上で、その基礎となるのは執筆時期を確定する作業である。そこで『勝山餘籟』の「序」¹⁶³⁾における杉本勝次の記述と村上の波多野研究に関する業績を、村上

162) 杉本勝次「序」（『勝山餘籟』）、3頁に及ぶ「序」には頁の記載がない。

163) 「序」には「昭和五十二年十月十日」という日付が記されている。

『波多野伝』稿本の内容と比較検討する作業によって執筆時期を考えたい。なお、必要に応じて本稿の「第1章 村上寅次『波多野培根伝』稿本の『文献』研究」における使用文献の出版年を参考にする。さて、杉本が『勝山餘籟』の「序」で村上による「伝記の編集」について記している文章は、以下の通りである。

幸い、このたび遺文集『勝山餘籟』が刊行されることになって、私は年来の重荷の一つをおろさして貰ったことを心から感謝するのである。先生の伝記を刊行することも、強く望まれるところである。寂々人間の第一流、これほどの人間の生きざまは、必ずや後世に書き残しておく義務がある。村上寅次君は先生の教え子の一人で既に早くから伝記の編集に手を着けておられ、先生前半世の部分の出来あがった原稿は私も読ませて貰い、その密度の濃い充実した記述に深く感銘し、これが早く完成して世に出る日を待ち望んでおるけれども、いま村上君は西南学院大学の学長として多忙の身¹⁶⁴、筆がなかなか進まないというのも無理からぬことであろう。

杉本「序」から村上による『波多野の伝記』についてまず3点が明らかになる。第1は培根の遺文集である『勝山餘籟』出版の際に、彼の「伝記を刊行すること」も希望されていた事実である。第2に培根の教え子の一人である村上寅次が「既に早くから伝記の編集に手を着けておられ、先生の前半世の部分の出来あがった原稿」を杉本は読み、彼は「その密度の濃い充実した記述に深く感銘」した。しかし第3に、1977（昭和52）年時点で村上は西南学院学長職にあるため、「筆がなかなか進まない」状況に置かれていた。これを村上『波多野伝』稿本の執筆時期との関係から見ると、次の3点が課題となる。第1点は「村上寅次君は先生の教え子の一人で既に早くから伝記の編集に手を着けておられ」とある文における、「早くから」とはいつからなのかという執筆を始め

164) 村上寅次は1976（昭和51）年12月から1984（昭和59）年12月まで西南学院大学学長職にあった。

た時期に関する問いである。あるいは「編集に手を着けておられ」た時点から1977年までの編集経過に関する問いである。第2点は、1977年時点で執筆されていた「先生前半世の部分の出来あがった原稿」に対応する村上『波多野伝』稿本に向けた問いである。すなわち「出来あがっていた原稿」は、村上『波多野伝』稿本のどの部分にあたるのか。第3点はその後も学長職を務めた村上はいつまで『波多野伝』稿本の執筆を続けて現在の4巻からなる稿本を書きあげ、しかし現在の形で完成したと考えていたのかどうかという問題である。

そこで、村上『波多野伝』稿本の執筆時期を検討する。その際に村上『波多野伝』稿本は4部から構成されているが、時期としては「第一部」・「第二部」・「第三部」・「第四部」と順々に書かれていったと仮定する。まず、村上寅次による波多野研究で最初の業績は1951（昭和26）年に出版された『Seinan Gakuin Today and Yesterday 創立三十五周年記念 1951』（以下、『創立三十五周年記念』誌と略記する）で、村上はその編集者であった。ただし、『創立記念三十五周年記念』誌に村上の論考はない。したがって、村上は記念誌の編集にあたって、改めて教育者としての波多野培根を想起し、多少は関連文献の収集を行ったと推測できる。そこで、「早くから伝記の編集に手を着けておられ」を、最も早い時期で考えると1951年前後となる。ただし、この時点で村上が「伝記の編集」を考えていたかどうかは分からない。

村上の波多野培根に関する最初の論説は1959（昭和34）年に発表した「波多野培根における儒教とプロテスタンティズム—日本キリスト教教育思想史の一断面—」であり、この執筆にあたってかなりの文献を収集したと推測できる。しかも、儒教とプロテスタンティズムという主題は『波多野伝』稿本の「第1部 思想の形成」と対応している。したがって、1959年前後に「第1部」で使用したかなりの「文献」を集めた。事実、「儒教とプロテスタンティズム」の参考文献にある「教育瑣言」は「第1部」でも使われている。ただし、1965（昭和40）年から1976（昭和51）にかけて出版された文献が8冊、「第1部」では使用されている¹⁶⁵。したがって、1959年前後に「文献」を集め構想した「伝記の編集（第1部）」に、1976年から翌年にかけて新たな文献を加え内容

も修正して『波多野伝（一）』稿本としたのであろう。

「第2部 天職を求めて」の内容と対応する研究成果はない。ただし、「儒教とプロテスタンティズム」で使われていた「ラルネッド老博士を送る」は「第2部」でも使われている。また、「第2部」の内容には「第1部」後半との連続性が認められる。したがって、「儒教とプロテスタンティズム」執筆の際に「第2部」で参考した「文献」もある程度集めていたと推測するのが妥当であろう。ただし、「第2部」にも1962（昭和37）年から1973（昭和48）年にかけて出版された文献7冊が含まれている¹⁶⁶。そこで、1959年頃に集めた文献によって「伝記の編集（第2部）」を構想し、1976年から翌年にかけて「第1部」に引き続き『波多野伝（二）』稿本を執筆したのであろう。

「第3部 新島襄の教育精神継承と同志社辞職」の内容は一部「波多野培根における『キリスト教と愛国』の問題」（1967）に重なる。「新島襄と波多野培

165) 第1部に含まれている1965年から1976年にかけて出版された文献は次の通りである。

『同志社五十年史』昭和40年（1965）

海原徹「山口県の中等教育」（本山幸彦編『明治前期学校成立史』昭和40年〔1965〕）

大岡昇「東澤潟の生涯」（『山口県地方史研究』18号，昭和42年〔1967〕）

手塚竜磨「同志社英学校と東京の私学」（『英語史の周辺』昭和43年〔1968〕）

『津和野町史』第1巻，津和野町史刊行会，昭和45年（1970）

桂芳樹「東澤潟」岩国徴古館，昭和48年（1973）

和田洋一編『新島襄』（人と思想シリーズ），昭和49年（1974）

内田守編『ユウカリの実るを待ってーリデルとライトの生涯ー』昭和51年（1976）

166) 第2部に含まれている1962年から1973年にかけて出版された7冊の文献は次の通りである。

本多虎雄「波多野先生の思い出」（『同志社時報』88号，昭和37年〔1962〕）

石川芳次郎「私の学生時代」（『同志社時報』創刊号，昭和47年〔1962〕）

『同志社九十年小史』昭和40年（1965）

笠原芳光「柏木義円」（和田洋一編『同志社の思想家たち』昭和40年〔1965〕）

伊藤延雄「波多野培根」（『同志社時報』22号，昭和41年〔1966〕）

伊谷隆一『非戦の思想』昭和42年（1967）

増野肇「キリスト教ユニバーサリストの渡来」（『早稲田大学商学』237号，昭和48年〔1973〕）

ただし、第2部には『勝山餘籟』出版後の1979年に出た参考文献が1冊含まれている。村上は後にこれを加えたと考えられる。次の1冊である。

『同志社百年史 通史編』昭和54年（1979）

根」(1977)とも重なる。使用した「文献」を調べると、1975(昭和50)年に出版された文献もある¹⁶⁷⁾。したがって、1967年頃には関連する「文献」を収集し「伝記の編集(第3部)」を始めていたが、1977年に「第1部」・「第2部」に続いて『波多野伝(三)』稿本を執筆したと推測できる。ところで、「第3部」をめぐる問題には『勝山餘籟』の「序」で杉本勝次の記している「先生前半世の部分の出来あがった原稿」に「第3部」は入るのかがある。村上『波多野伝』稿本が4部構成であることを考えれば、「第1部」・「第2部」を前半と考えるのが妥当である。この立場は培根の年齢からも支持される。「第2部」の終わりから「第3部」に入る頃、培根は40歳前後であり生涯の折り返し点にいた。したがって、年齢からも4部で構成されている稿本からも「第2部」で前半が終わるとするのが適切である。しかし、ここで浮かび上がってくるのが現在の『波多野伝』稿本は当初村上が意図した通りに完成した作品であるのかどうかという問いである。結論から言うと、村上は『波多野伝』稿本を完成させることなく現在の体裁で断念した。村上の業績からその根拠を述べる。

村上は1967(昭和42)年に「波多野培根における『キリスト教と国家』の問題」を執筆している。この論文は培根の講演「基督と愛国」(1944)に基づき、それを分析した内容である。このように波多野「基督と愛国」に関する研究成果があるにもかかわらず、『波多野伝』稿本にはこの講演が触れられていない。なぜならば、村上『波多野伝』稿本は1944年までは執筆できなかったからである。同様に『勝山餘籟』で紹介されている漢詩は1940(昭和15)年以降に作られた作品が、「述志(三首)」(1945)を除いて、触れられていない。これらの中には「辭西南學院(1944)」や「百道濱回顧」(1944)など、西南学院と関係深い作品も含まれている。それにもかかわらず、なぜかこれらの漢詩は『波多野伝』稿本に出て来ない。その理由も『波多野伝』稿本が1940年以降の培根の生涯に言及できなかったためである。他方、「第4部」で使用されている文献をみると、『西南学院七十年史 上巻』(1986)がある。村上は「履歴書」によると1984(昭和59)年12月に西南学院大学を退職しているので、定年退職後も

167) 第3部で参考にされた文献で1975年に出版されたのは次の通りである。

『同志社百年史 通史編』昭和50年(1975)

数年は『波多野伝』稿本を書き続けていたことになる。これらを総合的に判断すると、1977年に村上が『波多野伝』稿本の前半として杉本に渡したのは現在の稿本の「第1部」から「第3部」までであった。村上はその後も『波多野伝』稿本を完成させるべく執筆を続けたのであるが、1986年以降これを断念した。そのため、「第4部 西南学院における日々」は当初村上が計画したものに対しては未完成に終わっている。なお、『波多野伝（四）』稿本で多く用いられている培根の自筆原稿は1966（昭和41）年に波多野政雄氏より西南学院に寄贈されている¹⁶⁸⁾。村上は1966年以降これらの史料に目を通していたと推測でできる。

(2) 「先生前半世の部分の出来あがった原稿」

1977（昭和52）年12月に波多野培根の遺文集である『勝山餘籟』は刊行された。この出版に先立ち村上寅次は、波多野培根先生遺文集刊行会の委員長である杉本勝次に『波多野培根伝』稿本のそれまでに書きあげていた原稿を渡した。「先生の伝記を刊行することも強く望まるところ」であったからである。「先生の教え子の一人である」村上は「既に早くから伝記の編集に手を着けて」いたが、この時杉本の手へ渡ったのは「先生前半世」を編集した原稿であった。ところで、杉本が手にした原稿は村上『波多野伝』稿本のどの部分にあたるのか。先に指摘した通り、二通りの仮説が成りたつ。

- (1) それは『波多野伝』稿本の「第1部」と「第2部」である。この場合、後半部分は「第3部」および「第4部」となる。
- (2) それは『波多野伝』稿本の「第1部」から「第3部」までである。したがって、後半部分は「第4部」となる。

仮説(1)は『波多野伝』稿本の分量や培根の年齢から一定の妥当性を得る。しかし、「第3部」までに使われている「文献」のほぼすべてが1976年までに

168) 参照、「編集後記」（『勝山餘籟』319-320頁）

出版されている事実や「第4部」が明らかに未完成に終わっている点に留意すると、仮説(2)は説得力を持つ。本稿は仮説(2)を採用した。仮説(2)によると、「先生前半世の出来あがった原稿」は村上『波多野伝』稿本の「第1部 思想の形成」「第2部 天職を求めて」「第3部 新島襄の教育精神の継承と同志社辞職」に相当する。村上は「儒教とプロテスタンティズム」を執筆した1959年前後に「第1部」と「第2部」に関連する「文献」を集め、「キリスト教と愛国」を執筆した1967年前後には「第3部」関連の「文献」を収集した。1966年に培根自筆史料の多くが西南学院に寄贈されると、それを手にして読む機会にも恵まれた。このようにして書きためた「伝記の編集」原稿に修正を加え、1976年から1977年にかけてまとめ上げたのが、仮説(2)によると村上『波多野伝(一)(二)(三)』稿本である。

ところで、杉本勝次は村上『波多野伝(一)(二)(三)』稿本を読んで、「その密度の濃い充実した記述に深く感銘」したと記している。杉本を「深く感銘させた」「密度の濃い」「充実した記述」とは具体的に何を指すのか。「第1部 思想の形成」で検証したい。その際、「第1部」で用いられている「文献」研究の成果を利用して分析する。使用した「文献」の多様さやそれらを用いた研究方法が「第1部 思想の形成」の特色を豊かに語っていたからである¹⁶⁹⁾。

さて、村上『波多野伝(一)』稿本で使われている「文献」は「表1 『第1部 思想の形成』における『文献』」によると54点で、前半の4章で24点、後半の4章で30点である。すでに見た通り、村上は早くからこれらを収集し、執筆直前にも集めていた。「文献」の収集に対する熱意が認められる。これらを各章ごとに分類すると「表5 第1部の各章における使用『文献』数」の通りになる。なお、同じ「文献」で複数回使用されているケースがあるが、このような場合先に使われた箇所の文献数に入れた。

169) 第1部の前半4章は儒教による波多野の思想形成、後半の4章は同志社のキリスト教による彼の思想形成を扱う。したがって培根における儒教とキリスト教というテーマに関しては、1959年に村上が発表した論文「儒教とプロテスタンティズム」と『波多野伝(一)』稿本は補い合う関係を持つ。前者が理論的考察であり、後者は歴史的考察である。

表5 「第1部」の各章における使用「文献」数

一. 戦国武将の裔	5
二. 藩儒の家	7
三. 少年期の環境	5
四. 澤潟塾の教育	7
五. 同志社へ	4
六. 新島襄と創業期の同志社	5
七. 同志社学生生活 (一)	10
八. 同志社学生生活 (二)	10

さて前半の4章で使われた24点を種別でみると、「1.波多野培根の文献 (1) 一次史料」と「2.近代日本の教育史関連文献」がほとんどを占める。それらを内容によって区分した類型で見ると「第1類型 真情を表現する」文献と「第3類型 明治大正期の教育制度に関する」文献にはほぼ重なる。要するに、培根の人格形成を扱う「第1部 思想の形成」の前半部分は培根が幼少期から青年期前期に受けた教育環境を「第2類型」の文献を用いて分析するのである。それによって、日本の近世以来脈々と継承されてきた儒教に基づく教育現場が、近代化に向かう変革期にあって変わっていかざるを得ない様子を山口県下のいくつかの地域社会において検証している。たとえば培根が影響を受けた澤潟塾の場合、複数の文献にあたって東澤潟の人物像、澤潟塾の教科内容と教育方針などを叙述した後に、澤潟塾で培根が受けた教育内容と精神的な影響を考察している。このような分析にはキリスト教教育を専門とした村上の研究関心が十分に生かされている。村上は変化していく教育環境の中に儒教によって教育された若い培根を置き、彼の真情を「第1類型」に属する文献で表現させている。後半4章の「文献」29点を種別でみると、そのほとんどが「3.キリスト教関連文献」と「4.同志社関連文献」である。これらを内容による類型で見ると、「第2類型 伝記および歴史を叙述する」文献と「第4類型 明治大正期の同志社を描く」文献と重なる。前半がそうであったように、後半も多くの証言に基づいて明治期における同志社を客観的に理解しようとする冷静な手法が目立つ。たとえば、従兄の増野悦興が同志社を退学する事件が起こる。これについても複数の文献を用いて客観的な状況を描いた上で、事件に対する

培根の心境を推察している。その様な叙述の中に新島襄の「真情を表現する」書簡や培根のキリスト教による人格形成という主体的な出来事が置かれている。

村上は「第1部」に認められた叙述の手法を「第2部 天職を求めて」「第3部 新島襄の教育精神継承と同志社辞職」においても用いている。すなわち、「第2部」ではキリスト教教育と伝道の間で揺れ動く培根を64点の「文献」を駆使していくつもの角度から冷静に分析した上で、彼の主体的な生き方を置いている。「第3部」では27点の「文献」を用いて同志社における大学設置をめぐる動向を俯瞰したうえで、その中に培根の主体的な活動を位置づけている。このように検討を重ねると、村上『波多野伝 (一)(二)(三)』稿本に見られた「密度の濃い」「充実した記述」が何を意味するかは明らかだと思われる。それはたとえば「第1部」のテーマである培根の儒教とキリスト教による人格形成を多くの文献を用いて考察した結果、学問的にも内容的にも「密度の濃い」「充実した記述」をもたらした。同じことが「第2部」にも「第3部」にも指摘できる。しかも、このような叙述の中に生き方・天職・真実を求め行動する培根を置くことによって、その記述は「深く感銘」を覚えさせるものとなった。これが1977年に完成し、村上が杉本に渡した『波多野伝 (一)(二)(三)』稿本であった。

(3) 「先生後半世の原稿」

仮説によると「先生後半世の原稿」として現在残されているものは村上『波多野伝(四)』稿本であり、彼は1977年に『波多野伝 (一)(二)(三)』稿本を完成させると「先生後半世の原稿」の編集と執筆にかかった。しかし、「いま村上君は西南学院大学の学長として多忙の身、筆がなかなか進まないというのも無理からぬこと」¹⁷⁰⁾であった。このような環境にあっても執筆を続けたが、1986年以降に原稿の完成を断念する。この時点で「先生の後半世の原稿」として書

170) 「履歴書」によると、村上寅次は1976年4月から1984年3月まで西南学院大学学長職にある。その上、1980年4月から1984年3月まで西南学院院長も兼務している。彼は1984年12月に西南学院大学を定年退職している。

表6 「第4部」の各章における使用「文献」数

	「文献」数・史料数・文献数
二四 辞職後の日々	6・2・4
二五 柏木義円と「上毛教界月報」	5・0・5
二六 原田総長の退任	5・3・2
二七 愚公移山への決意	12・12・0
二八 バプテスト文書伝道への協力	5・5・0
二九 その後の同志社、海老名総長の就任	3・1・2
三〇 西南学院へ	10・6・4
三一 斯文会―独逸語研究会	3・3・0
三二 海老名総長との対決	0・0・0
三三 水町事件	1・1・0
三四 日曜日問題とドージャー院長排斥事件	5・4・1
三五 ボールデン院長留任事件	10・10・0

き上げていたのが、現在の「第4部 西南学院における日々」である。けれども、この「第4部」は本来村上が計画していた『波多野伝(四)』には及ばない未完の作品であった。そこで、「第4部」についても参考されている「文献」とその使用方法を『波多野伝(一)(二)(三)』稿本における「文献」とその使用方法と比較検討して、「第4部 西南学院における日々」の特色を明らかにしたい。

ところで、本稿は自筆の一次史料及びそれに準じる史料と印刷された文献を併せて「文献」とした。その上で本稿の第1章第4節において「第4部」の「文献」には史料の比率が高い事実を指摘していた。しかし、それは具体的にはどのような数値であり、「第1部」から「第3部」までとの比較からどのような特色を示しているのか。これを検討するために「表6 『第4部』各章における使用『文献』数」を作成して「文献」と史料及び文献の数値を入れた。さらに「第4部」の数値と「第1部」「第2部」「第3部」を比較するために、「表7 各部における史料数と文献数」を作成した。

「表7 各部における史料数と文献数」は興味深い事実を示している。「第1部」の場合、史料数に対して文献の数は5倍である。それが「第2部」では約4倍、「第3部」では約3倍となって史料に対する文献の倍数が減っている。これを「第4部」前半の6章でみると、史料数が文献数の約2倍となって逆転

表7 各部における史料数と文献数

	「文献」数・史料数・文献数
第1部 思想の形成	54・9・45
第2部 天職を求めて	64・13・51
第3部 新島襄の教育精神継承と同志社辞職	27・7・20
第4部 西南学院における日々	65・47・18

し、「第4部」後半の6章では史料数が文献数の約5倍となっている。さらに注目すべき事実がある。まず史料についてであるが、「第4部」で使用されている史料はすべて1966年に波多野政雄氏より西南学院に寄贈されたものである。また「第4部」後半の6章で使用されている文献5点は西南学院が出版したものであるいはそれに準じる文献¹⁷¹⁾で、それらはすべて西南学院で手にすることができた「文献」である。この事実は1977年以降に村上寅次が置かれていた状況を明らかに反映している。当時彼は西南学院大学学長としてまた西南学院院長として多忙を極め、西南学院以外で文献を収集する余裕はなかった。それでも、「第4部」の前半部分においては「3.キリスト教関連文献」と「4.同志社関連文献」を読んで、それらを『波多野伝』稿本に活かしている。しかし、「第4部」後半になると状況はさらに厳しくなり、ついに西南学院において手にできる「文献」だけで編集し執筆せざるを得なくなっていた。このような執筆事情は当然「第4部」の内容に影響した。この点についてはすでに本稿の第1章第4節で分析しているので、ここでは視点を変えて別の問題を考察する。

別の問題とは村上寅次が本来構想していた『波多野培根伝』稿本の構成についてである。

「第4部」は12章から構成されている。これは「第1部」が8章、「第2部」が7章、「第3部」が7章から構成されているのと比較すると、明らかに

171) 第4部後半の6章において使用されている文献は次の通りである。
 波多野培根先生遺文集刊行会編『勝山餘籟』1977
 波多野培根「健全なる学風の養成」(『中学部学友会会報』第4号, 1921)
 三串一士「痛ましい思い出」(第1部)(『西南学院大学広報』第27号, 1974)
 伊藤祐之『忘れ得ぬ人びと』
 西南学院史企画委員会『西南学院七十年史 上巻』1986

長い。しかも「第4部」の内容は前半の「(1) 50代の旅立ち—第4部前半」と後半の「(2) 西南学院における波多野培根—第4部後半」で大きく異なる。しかも、「三五. ボールデン院長留任事件」の最後は取ってつけたように1936（昭和11）年の西南学院創立20周年記念式典を掲載している以外は、実質的に1933（昭和8）年で終わっている。要するに現在の「第4部」後半は1920（大正9）年に培根が53歳で西南学院に奉職してから1933年に66歳になるまでの約13年間を扱っている。しかし、それ以降培根は1938（昭和13）年に71歳で定年退職したが、その後も嘱託講師として1944（昭和19）年まで西南学院に留まっている。彼が学院を去ったのは実に77歳の時であった。村上が扱うことのできなかった10年余りは戦時体制下における時局がますますきびしくなり、西南学院におけるキリスト教教育が困難を極めた時期であった。この時に西南学院のキリスト教教育を堅持して、学院を象徴する教員として全学的に存在感を示したのが波多野培根である。したがって、培根の真価は戦時体制の締め付けが極限にまで及んだ時に変わることなくキリスト教教育を堅持したあの日々にあった。村上はそのような培根の姿を見ていた歴史的証人であり、なんとしてでも戦時下におけるキリスト教教育者波多野培根の生き方を『波多野伝』稿本に残したかったに違いない。しかし、村上にはそれができなかった。

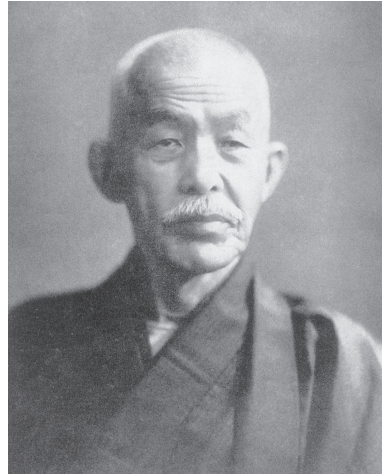
このような事情を考慮すると、村上寅次が当初構想していた『波多野培根伝』稿本は次のような構成になる。

- 一. 思想の形成
- 二. 天職を求めて
- 三. 新島襄の教育精神継承と同志社辞職
- 四. 50代の旅立ち
- 五. 西南学院における波多野培根
- 六. キリスト教教育を死守する波多野培根

このように「先生後半世の原稿」を推測すると、1977年に村上が杉本に渡した原稿『波多野伝（一）（二）（三）』稿本は文字通り、『波多野伝』の前半部分となる。

第3節 キリスト教教育者 波多野培根

村上寅次は1930（昭和5）年4月から4年間在学した西南学院高等部において学生として日常的に波多野培根と接し、1938（昭和13）年4月に西南学院中学部に奉職すると、2度軍隊に召集された期間も含めて、10年余り同じ教員の立場でキリスト教教育に従事する同労者となった。すでに本稿の第3章第1節で述べた通り、この間村上は西南学院から全人格的影響を受け、とりわけ培根からは教育活動には教育への志を込めて従事することを教えられた。すなわち、教育への志の継承である。それでは、村上が培根から



晩年の波多野培根
『勝山餘籟』口絵より
提供：西南学院100周年事業推進室

継承した真実は村上『波多野伝』稿本においてどのように叙述されているのであろうか。それは村上『波多野伝』稿本に直接表現されるものではない。しかし、とりわけキリスト教教育者 波多野培根を叙述する際に、その底流に村上の培根に対する真情が流れていよう。さて、キリスト教教育者 波多野培根を考察するに際して、3つの側面から検討することが彼の場合にはふさわしいと考えられる。培根の研究活動、彼が追求した義、培根のキリスト教教育の3点である。これら3要素を個々に検討した上でそれらを総合することにより、キリスト教教育者 波多野培根の全体像に迫りたい。なお、ここでは検討対象を再度同志社の教育現場に復帰した後の培根に限定する。

(1) 波多野培根の研究活動

1904（明治37）年9月に波多野培根は同志社普通学校の教師となって同志社に復帰し、英語・歴史・修身を担当した。以来1919（大正8）年1月に同志社を退職するまでの13年余りの期間に関しても、村上『波多野伝』稿本に培

根の研究活動に関する直接の記述はない。しかしたとえば、「第3部」の「二一. カーライルへの傾斜」¹⁷²⁾に記されている「因信而有望」(『同志社時報』第120号, 1915年5月)は、培根のカーライル理解の的確さと思想の本質に迫る鋭さを示している。その後もカーライル研究を続け、西南学院での「トマス・カーライルの英雄崇拜論に就て」と題する講話(1940年4月18日)ではスコットランドの思想家カーライルの全体像を紹介している。このように西南学院において研究成果は認められるのであるが、同志社時代における培根のカーライル理解は当時すでに彼の着実な研究活動の取り組みを推測させている。

村上『波多野伝』稿本で初めて培根の研究内容の全体像が示されるのは、「第4部」の「二四. 辞職後の日々」¹⁷³⁾においてである。1918(大正7)年の小型日記帳の裏表紙に鉛筆による4行の書き込みがある。

辞職後の問題

- ①学校の善後策(顛末出版及びデビス氏伝翻訳)
- ②静思及び読書(休養の費用)
- ③後図

書き込みの第2項目「静思及び読書」に対応すると見られるメモ(1918年5月27日)があり、そこには研究活動あるいは読書計画の全体像が記されている。次の通りである。

172) 「カーライルへの傾斜」(村上『波多野伝(三)』稿本, 796-814頁)

173) 「辞職後の日々」(村上『波多野伝(四)』稿本, 939-955頁)

哲人ソクラテス トマス・アーノルド伝 ペスタロッチー伝 デビス伝 (大儒朱熹及び其感化) 希伯来民族史 (サンダース) 基督伝, 黙示録及但以理 (ダニエル) 書註解 読経餘録
カント 実践理性批判 (仏訳参考) クーザン 眞美善論 (英訳参考) マチニー 人間本務論附マチニー伝 フィヒテ 天職論 (独和对訳) (英和参考) ヂュベロア, カントとフィヒテ (教育問題) (ヒルチ, 霊想録)。(ロバートソン説教集)。 Farvar's Seekers after God (1869) (Seneca, Epictetus, marcas Aurelius)

メモは横線によって前半部分と後半部分に区分されている。両者の区別は必ずしも明確ではないが、前半は研究関心のあるテーマを並列しているように見える。それによるとギリシャ・ヨーロッパ・中国の哲学者や教育者とその影響、ヘブル民族史とキリスト教思想を幅広く取り上げている。後半はヨーロッパに限定した原書による読書計画のように思われる。たとえば、カントやクーザンに見られるように内容のある原書を次々と精読していったのであろうか。村上はこの一覧表から3つの傾向を読みとれるとする¹⁷⁴⁾。第1に優れた教育者像の探求、第2にヘブル民族の宗教思想、第3にドイツ倫理思想に関する文献である。いずれにしても、同志社の混乱に奔走された時には落ち着いて読書も研究活動も出来なかった培根は、同志社を辞職して与えられたしばらくの時を読書に没頭していた様子が読みとれる。

1920(大正9)年9月に波多野培根は西南学院に奉職した。ここで培根は専心キリスト教教育に打ち込むことを強く希望した。このようにして営まれた培根の福岡における日常生活の興味深い一面を村上『波多野伝』稿本は伝えている。

174) 村上『波多野伝(四)』稿本、955頁。

日曜日の午後や祝祭日などの暇な時間における培根の楽しみは、市内の古書店めぐりと近郊の歴史散歩であった。当時、福岡市内には九州帝大や福岡高等学校などの官立学校を背景にして洋書の丸善は別格として、古書店で相当地に格の高い古書専門店が千代町や中島町には軒を列ねていた。培根はそれらの古書店の上得意として店主たちと懇意になった。千代町の「山内書店」の店主は戦後まで培根のことをよく記憶して後年次のように語っていた。

「先生は実に変わった方でしたね。毎月俸給日が来ると必ず私のところへみえて書物を買われました。本当に書物が好きな方だったですね。」これは古本屋の主人にも培根が普通の顧客以上の、「愛書家」としての印象を残していたことを示している¹⁷⁵⁾。

さて、西南学院において安定した培根の研究活動が展開される。学院における主要な研究活動となったのは1922（大正11）年から22年間続けられた研究会－斯文会とも獨逸語研究会とも呼ばれた－である¹⁷⁶⁾。設立当初のメンバーは波多野培根・伊藤祐之・大村匡で、その後柳原舜祐・杉本勝次・猪城英一・篠田一人・品川登などが加わっている。月2回の例会には2名から5名ほどの参加者があった。記録ノートによると、研究会は次のように実施されていた。

- ① Die Grundprobleme des Marxismus. von G. Plechanow, übersetzung von Dr. M. Nachimson（プレハノフ『マルキシズムの基本問題』）（ドイツ語版）
 第一回，大正十一年十月二十四日（火）…
 第十四回，大正十二年七月七日（土）
 [約四分の三読みて切上]

175) 村上『波多野伝（四）』稿本，1070-1071頁。

176) 参照，「三一．斯文会－獨逸語研究会」(村上『波多野伝（四）』稿本，1104-1135頁)。

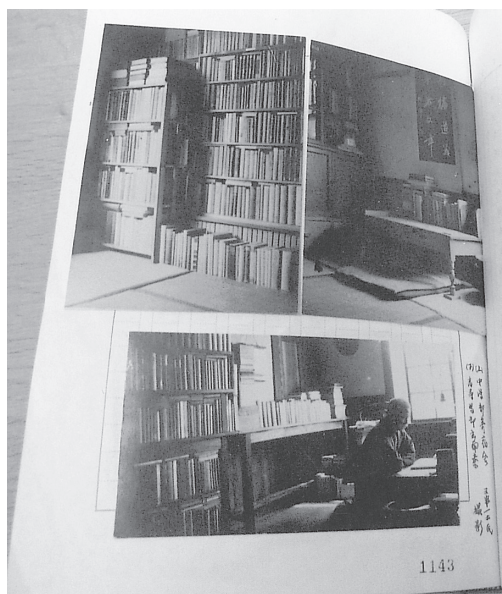
- ② Prolegomena. von Immanuel Kant.(インマヌエル・カントの『プロレゴメナ』)
第一回…(第十五回目) 大正十二年十月八日(月)
第十九回(第三十三回目) 大正十三年三月二十四日(月)
[約十分の四読みて切上]
- ③ Der Sozialismus und seine Lebensgestaltung. von Rudolf Eucken.(ルドルフ・オイッケン『社会主義とその人間形成』)
第一回(第三十四回目) 大正十三年十一月二十二日(土)
第三十二回(第六十五回目) 大正十四年十月二十四日(土)
[全部, 読了]
- ④ Die Bestimmung des Menschen. von Joh. Gottl. Fichte.(フィヒテ『人間の使命』)
第一回(第六十六回目) 大正十四年一月二十一日(土)
第二十九回(第九十四回目) 大正十五年七月十一日(日)
[全部, 読了]
- ⑤ Die Weltanschauungen der grossen Philosophen der Neuzeit. von Dr. Ludwig Busse.(ルドーウヒ・ブッセ『近代の大哲学者の世界観』)
第一回(第九十五回目) 大正十五年九月十八日(土)
第三十一回(第二百二十五回目) 昭和二年六月十六日(木)
[全部, 読了]
- ⑥ Geschichte der Socialischen Ideen. von Karl Vorländer.(カール・フォーレンダー『社会主義者の理念史』)
第一回(第二百二十六回目) 昭和二年六月十八日(土)
第二十一回(第四百四十六回目) 昭和三年三月二十三日(金)
[全部, 読了]
- ⑦ Marx als Denker. von Max Adler.(マックス・アドラー『思想家としてのマルクス』)
第一回(第四百四十七回目) 昭和三年五月八日(火)

記録ノートによると、研究会ではドイツ語原典による精読と参加者による活発な討論が行われたであろう。これを先に見た研究計画を記していたメモと比べると、研究会で扱っていた文献はメモの後半に対応する。近代ドイツにおける人間の精神性に関する諸研究である。村上によるとこれらは2種類に大別できる¹⁷⁷⁾。マルクスを含めた近代社会主義思想に関連した文献とカントとフィヒテに代表されるドイツ観念論における論理思想に関連した文献である。いずれにしても、ドイツ語原典を学ぶ研究会で培根たちは、近代社会における人間の精神性に関するドイツにおける研究成果を学び続けていた。

研究会に参加した仲間に杉本勝次がいる。研究会に関連したある鮮明な彼の記憶は、培根の研究活動におけるもう一つの側面を印象的に語っている。

謹厳寡黙な先生は自身のことを語られることは滅多にないので、先生の学殖博識は、こちらから叩かねばその底は知れなかった。学は東西に互り、その語学の強さは抜群であった。五、六人か六、七人で読書会をもち、カーライルやカントのものなどを輪読したのに、そうした折に示された先生の英語・独逸語の読解力の確かさに、私は真に驚嘆した。先生は、ギリシャ語・ラテン語・ヘブル語などにも精通しておられた。自分ではおっしゃらないけれども、フランス語なども読まれていたと思う。どうしてあれだけの学力を蓄積されたのだろうと、感じ入ったことである。読書会は会員の家を順番にまわった。先生は福岡にいらした間、ずっと西南の寄宿舎の一室での独り住みであられたが、先生のお部屋にお邪魔をする時、壁一杯の大きな書棚には何百冊もの和漢洋の書物が整然と置かれ、ロンドン・タイムズなどもキチンと少しの乱れもなく整理整頓されていたこと、そして、お部屋には机が二つあって、一つの机は『聖書』を読むためだけの特別なものであったこと、尚、読書会はいつも二時間以上に互ったが、そうした時、畳の上の場合は、二時間でも三時間でも先生は正座を崩されなかったこと等々、今でも目に見えるようである¹⁷⁸⁾。

177) 参照、村上『波多野伝(四)』稿本、1113-1120頁。



(上)
中学部寄宿舍
「百道寮」
(下)
高等学部寄宿舍
「玄南寮」

波多野培根の部屋
村上寅次『波多野培根伝(四)』稿本(1143頁)
提供：西南学院100周年事業推進室

杉本によると、培根の部屋には机が二つあった。そして、「一つの机は『聖書』を読むための特別のものであった」という。この特別な机の前に培根はいつ座ったのであろうか。朝や夜の特別な時間に自覚的に日常的に座ったことが考えられる。もう一つの机の前では近代ドイツの思想研究に取り組んだのに対して、この机の前では何をしたのであろうか。最もあり得ることは黙想と聖書の通読である。説教の準備などもこの机の前で行ったかもしれない。あるいは聖書の研究、キリスト教に関連した研究などはどちらの机の前で行ったのであろうか。いずれにしても、特別な机の存在は、培根の研究活動が単に理性的に遂行されるだけのものではなかったことを明確に語っている。特別な机の前で祈り聖書を学んだ培根は、近代ドイツの思想研究においてもその精神性や

靈性にまで思いを至らせたであろう。

さらに、1927（昭和2）年8月29日に培根が京都の自宅で開いた王陽明記念の集会¹⁷⁹⁾は彼の研究活動に重要な示唆を与えている。この日の午前9時から午後5時まで開いたのは、「王陽明先生四百年記念小会」である。8名の来会者に対して培根は陽明学について講話をしている。その日のメモが残されている。

道学者及び其精神（八月二十九日，陽明四百年記念小会）

（一）陽明学と朱子学

陽明派の人々が朱子学の弊として指摘せる点。

- ① 格物窮理の弊は、外部拘泥（誠意と云う根本を離る）、支離滅裂（無統一）となる。
- ② 先知後行の弊は、地と行とが分離

（二）陽明学とフィヒテ学

その類似点

至良知…王陽明

良心服従…Fichte

西南学院における研究活動でキリスト教と近代ドイツの観念論などに取り組んだことは、培根にとって早くから彼の精神活動の根底にあった研究対象、つまり儒教研究の排除を意味しなかった。キリスト教と近代ドイツにおける人間精神の研究が調和をもって受け止められていたように、培根の全人格において儒教・キリスト教・近代ドイツにおける研究は整合性を持っていた。この真実は近代日本における研究活動と日本人の思想形成に関して重要な事実を示唆している。

陽明学を初めとした儒教はいうまでもなく、近世を生きた日本人の人格を形成する主要な倫理感を提供していた。近代化において多くの日本人が儒教倫理

179) 参照，村上『波多野伝（四）』稿本，1122-1128頁。

を持ち続けたために西欧文明は受容してもキリスト教信仰は排除した。そのような中であって、培根は儒教という日本人の精神性を肯定しつつその上でキリスト教信仰を生きた。また、ドイツ観念論を代表するフィヒテを陽明学によって理解しようと試みている。このような研究活動における培根の特色をキリスト教教育の現場に置き換えて考えてみる。すると、培根のキリスト教は儒教という日本人の精神性を否定することなく日本人に語る事ができた。これを日本の伝統的思想という方向から見ると、培根は日本人の伝統的な精神性を肯定しつつキリスト教信仰を生きることができた。このように日本人の精神的伝統とキリスト教が矛盾しないで調和した培根の立場は、西南学院が福岡という土壤に根付いていく上で重要な契機を提供していたに違いない。

(2) 波多野培根が追求した義

津和野藩士の家系¹⁸⁰⁾に生まれた波多野培根にとって、「義」は生涯を貫いて彼の規範となる価値観であった。培根を感激させ彼の自尊心を培った戦いがある。勝山城（山口市阿東町）における波多野内蔵助滋信の籠城戦である。1938（昭和13）年7月12日に勝山城址を訪ねた培根はその日の感激を漢詩二首と和歌二首に残している。

孤丘拔地聳蒼空	孤丘地を抜いて蒼空に聳ゆ
城址仰看形勢雄	城址仰ぎ見れば形勢雄なり
緑樹蔽山清籟起	緑樹山を蔽いて清籟起る
似欽家祖殉難功	欽ぶに似たり家祖殉難の功

拳兵殉義豈為悲	拳兵義に殉ず豈悲しと為さんや
忠列偉勲竹帛垂	忠列偉勲竹帛に垂る
旧蹟徐催懷古涙	旧蹟徐ろに催す懷古の涙
勝山城畔立多時	勝山城畔立つこと多時

180) 「波多野家の津和野藩における禄高は百七十石馬廻り別称物頭の家格で、藩士の内上級に属していた。」村上『波多野伝（一）』稿本、5頁。

勝山の城の址をし尋ぬれば松風語る家祖の昔を
吾も亦天正元亀武士の裔いよよ勵まむ神の戦に¹⁸¹⁾

培根は二首の漢詩で勝山城址の情景を「孤丘」「城址」「緑樹」などによって描写したうえで、この地で繰り広げられたかつての戦いを「家祖殉難の功」「拳兵義に殉ず」としている。ここには義を尊び義に殉じる祖先の生き方への強い誇りと深い共感がある。村上は「『神の戦』が彼のキリスト教信仰に立つ表明であることはいうまでもない」と記して、培根における義がキリスト教信仰において実践的に継承されていた事実を指摘している。そこで、キリスト教教育者として培根が義をどのように追求したのかを、村上『波多野伝』稿本において検証する。

培根に強く義を自覚させる出来事が起こった。1910（明治43）年8月22日に「日韓併合ニ関スル条約」が結ばれると、全国の新聞社は号外でこれを報道した。韓国併合に沸く日本社会で韓国併合のニュースを知った培根はむしろ憤慨し、かねてよりこれを主張していた海老名弾正に向けた公開状という形式をとって、彼の見解を明らかにした。見解の内容が述べられている第2段落は次の通りである。

少数、曇れる良心の眼＝足下も人間に良心のある事を信じ居らるゝならん
＝を拭ひて最近十五年間の出来事を一瞥せん、明治二十七年八月、日清開戦の御詔勅、同三十七年二月、日露開戦の御詔勅、其他、同年同月締切の日韓議定書を初とし機会ある毎に日本国が全世界に聲鳴したる

韓国の独立、領土の保全云々

の堂々たる大文字、光明を日月と争ふべき大宣言は此度の一舉に由りて全く空言空語と化せしのみならず、日本は事実に於て正義人道の美名の下に恐るべき禍心を包蔵して吞噬侵略を行ふ陰險国と墮落し、新に世界の虎狼国の仲

181) 村上『波多野伝（一）』稿本、11-15頁。

間入りを為したるを思へば、実に国家の爲めに漸墳痛恨に堪へざるものあり、従来、仁義を標榜して常に列強国の野心を通罵せる日本人の口は今後、自己の身を呪詛せざるを得ざるに至れり、嗚呼、何たる一大恨事ぞや、知らず日本国は世界を首肯せしむべき如何なる正大の理由に頼りて韓国の合併を行はんとするものぞ、思ふに近日に発布せらるべき韓国合併の宣言書が光輝なき気焰なき平凡文字の羅列たるべきかは今より想像するに難からず¹⁸²⁾。

韓国合併のニュースに沸く中で、培根に対して的確に事柄を理解させたのは国際関係における日本国の義に関する概念である。事実、培根は一連の主張の中で「良心の眼」「正義と人道」「仁義を標榜」「正大の理由」など、いずれも義に連なる概念を用いて韓国合併が道理に背く事実を訴えている。要するに義は培根に事柄の善悪を判断させる基準であり、それは個人的な生き方だけでなく国家の政策にまで及んだ。戦争に向かう時代に日本の国が目標とすべき道はどこにあるのか。それを示すのが義であり、世界に日本の義を高く掲げえる方向にこそ国家は進まなければならない。後に杉本勝次は「日本の対韓政策、日韓併合は、日本の将来にとって大きな禍いになることを憂慮する、と話されていたこと、それは先生の卓見であったと思う」と述べている¹⁸³⁾。教育者波多野培根はただ教育現場の課題だけに関心を寄せたのではなかった。むしろ、義によって国家政策に対しても冷静な判断力を持ち、社会の動きを的確に捉えつつ教育現場に立っていたのである。

教育現場でも培根は義を教えた。たとえば、陸軍大将大山巖が1916（大正5）年12月10日に死去し、17日に国葬として葬儀が行われた時である。葬儀の前日12月16日に培根は同志社中学校のチャペルで大山公について講演を行っている。それは武人としてのふさわしい生き方、武人の義についてであった。講演の最後に語った大山公の生涯の意義は次の通りである。

182) 村上『波多野伝（三）』稿本、633-648頁。

183) 杉本勝次「序」（『勝山餘韻』）

第一に、日露戦に於る大山公の勲功（満州軍総司令官として）をあげ、併せて「日露戦争の意義」と記している。第二に、「私人として」、「①政治に関係せず、軍人の本領を守る ②党派を造らず（薩閥固めず：大山は鹿児島藩士） ③品行方正（私行上非難すべきことなし） ④不動、山の如し」とある¹⁸⁴⁾。

大山の義は、積極的には軍人としての働きにあった。正義のための戦争を肯定した培根は軍人指導者としての大山の功績を高く評価していた。消極的には「①政治に関係せず、軍人の本領を守る」立場を貫いた大山を理想的な軍人として尊敬した。この点については村上も、戦時体制下において政治介入を深めていた軍部への批判があると推測している。このようにして大山は軍人として節度をもったふさわしい在り方を示していた。軍人が社会において高い評価を得ており、学生が自分たちの明日の生き方を考える上で重要な影響力を持っていた時代である。そのような時代の教育現場で培根が節度ある軍人像を示したことには十分な意味を認められる。しかも、培根の軍人像の底流には義がある。義は人々をふさわしい生き方へと導く基準であり、軍人に対しては彼らを節度ある生き方へと導く力であった。このように培根は講壇から義を語った。

学生に向かって義を説いた培根が、キリスト教教育者に義を求めたことは言うまでもない。1920（大正9）年1月の定期理事会で次期総長に海老名弾正が選出されたと聞いた培根から堰を切った流れのようにほとぼり出たのが、海老名の義を問う熱情である。海老名は1905（明治35）年7月に「同志社は果たして存在の価値ありや」（『新人』第6巻第7号）を發表し、「同志社の使命は新島の死をもって終わった」と主張していた¹⁸⁵⁾。培根は海老名の義を問い、きびしく漢詩に表現している。

184) 村上『波多野伝（三）』稿本，829-830頁。

185) 村上「波多野伝（二）」稿本，544-562頁。

聞海老名某同志社總長就任之報

慨然有作

詭辯縱横無寸誠

狡兎又瀆總長名

行人聞否御園畔

松籟時為鬼哭聲

詭辯縱横寸誠無し

狡兎又總長の名を瀆す

行人聞くや否や御園の畔

松籟時に鬼哭の聲を為す

彰栄燈暗影層々

這裡何驚怪事興

演出一場狸貉劇

士紳冠帯拝妖僧

彰栄燈暗く影層々

這裡何驚怪事興

演出す一場狸貉の劇

士紳冠帯して妖僧を拝す

昨論解散今天戰

詭辯縱横轉耐驚

勿怪牧師清影薄

義分二字一毛輕

昨解散を論じ今は天戰とす

詭辯縱横轉驚に耐う

怪しむ勿れ牧師清影薄く

義分の二字は一毛より輕きを¹⁸⁶⁾

培根が、まず問題にしたのは海老名の言葉である。海老名の弁論は「詭辯縱横」であって、そこにはわずかな「誠」すらない。昨日は同志社の「解散」を論じていた海老名が、今日はそこに「天戰」があると言う。まさに「詭辯」である。したがって、海老名は同志社「總長」の名を瀆している。言葉に真実が無い同志社では牧師の「清影」さえ薄くなってしまふ。そのため、学びの園における「松籟」は「鬼哭」の声を發し、「彰栄燈」さえも暗くなってしまふ。これが義を疎んじた同志社の実情であり、「義分」が軽くなってしまっている。

1926（大正15）年7月に開催された同志社評議員会で培根は3選を迎えた海老名に質問している。その時の様子を日記に残している。

186) 村上『波多野伝（四）』稿本，1026-1027頁。

七月二十五日（日）晴

午前十時より午後三時頃まで、同志社評議員会あり、之に出席す。出席者二十五名（午前二十四名）代員の委托若干票。津下紋太郎氏、座長兼議長となる。

予、海老名氏が明治三十八年七月、新人誌上に「同志社は果して存在の価値ありや」の論文の趣旨に就て

①午前は一般評議員の前に談じ

②午後は海老名氏の出席せられたる懇談会に於て、予は直接に海老名氏に対し詳しく質問せり（氏は答辯を何等かの方法にてせらる筈）

評議員会は大多数を以て海老名氏を總長に推すことに決せり。（予は絶対的不賛成論者にあらず、海老名氏の辯明を聞きたる後に非れば賛意を決する能わず。即ち賛意を保留することに決せり）

世の語りし所を或は喜ばざる者ありしなるべし、然し予は神に対し、新島先生の靈に対し、同志社に対し、又我良心に対して、己の為すべきことを為し、言うべきことを言いたりと感じて、衷心に深き慰安と喜悅とを感じたり¹⁸⁷⁾。

海老名に向かつて詳細に質問した行為を培根は「神に対し、新島先生の靈に対し、同志社に対し、又我良心に対して」為すべきことを為し、言うべきことを言ったと感じている。培根は海老名の何にこだわり、何を詳細に問いただしたのであろうか。内容は分からないが、それがキリスト教教育者としての海老名の義を問う事柄であったことは推測できる。海老名に向かつて、キリスト教教育者としての人格・言葉・行為における義を詳細に問い質す、これによって培根は長年にわたって負ってきた責任を果たしたと感じていた。

晩年の培根が義についての全体像を語った講演がある。1944（昭和19）年6月3日に西南学院の精神文化研究所設立を記念して行われた講演「基督と愛

187) 村上『波多野伝（四）』稿本、1139-1142頁。

国」である¹⁸⁸⁾。しかも、この講演を中心に培根における義を分析した村上の論文「波多野培根における『キリスト教と愛国』の問題」¹⁸⁹⁾もある。しかし、残念なことに講演「基督と愛国」は村上『波多野伝』稿本では扱われていない。したがって、本稿もここではそれらの存在を指摘するにとどめる。

(3) 波多野培根のキリスト教教育

波多野培根のキリスト教教育は復職後の同志社在任期（1904-1918）と西南学院在任期（1920-1944）では、底流に一貫する姿勢を堅持しながらも力点の置き方に明らかな違いが認められる。まず、同志社在任期のキリスト教教育を検討する。

1904（明治37）年9月に同志社に復帰した培根が翌年6月までの間に記したと思われるメモ¹⁹⁰⁾がある。これによると、培根は同志社復帰後早々に同志社の

188) 波多野培根「基督と愛国」（『勝山餘籟』197-241頁）

189) 村上寅次「波多野培根における『キリスト教と愛国』の問題」（『勝山餘籟』307-317頁）

190) メモには次の通り、記されている。

同志社（普通学校）の改善

（明治三十八年以後に着手すべき事項）

- 一. 専任校長を得る事
 - 二. 教務部の整理
 - 三. 寮務部の整理
 - 四. 伝道部（宗教部）の整理
 - 五. 運動部（体育部）の整理
 - 「スクール・ゲーム」の制定
 - 柔道部の拡張・角力の新設
 - 春秋の水陸大運動会に全員強制出席
- 高等学校の刷新
- 一. 専門校を政治科（又は経済科）、文科の二部門に分つ事
 - 二. 独逸語を専門校に入る事及び英語の通訳を過程中心に入る事
 - 三. 文科を出来得べくんば文学科・哲学科の二種に小区分する事
 - 四. 書籍館（図書館）を改築して之を拡張する事
 - 五. 神学校の程度を高め、規模を一新し、大に英語の力を養ふ事

女学校の刷新

女学校を整理し「ミッション・スクール」臭味を根本より打破する事
参照、村上『波多野伝（二）』稿本、541-543頁。

普通学校・高等学校・女学校の問題点と課題を真剣に考え、検討していたことが分かる。さらに、1907（明治40）年頃に書き残していたと思われるメモ「明治三十八年九月以来、カヲ尽シテ矯正整理シタル点」¹⁹¹⁾がある。1905（明治38）年8月より普通学校教頭事務取扱を担当していた培根が重点を置いて取り組んだ事柄の全体像と特色はこのメモから分かる。このように同志社の学内行政全般について関心を持ち、着手した培根の取り組みをさらに詳細に記した書類がある。同志社普通学校教頭事務取扱の立場で1907（明治40）年に就任早々の原田助社長に「十年ヲ要スルガ如シ」として提出した書類（以下、「原田宛書類（1907）」と表記する）がそれである。以下の通りである。

[甲] 形式的整理（自 一 至 十六）×已ニ完成 △半バ完成

- △（一） 学級数及ビ生徒数ヲ増加スルコト
- ×（二） 機械標本ノ購入
- （三） 礼拝堂内部ノ修繕
- （四） 運動部ノ刷新
 - ×（運動場ノ拡張）
 - ×（兵式体操用、銃二百挺購入スルコト）
- ×（五） 採点法ノ改正
 - 無届欠席ノ取締及ビ成績通知

191) 次の通りである。

明治三十八年九月以来、カヲ尽シテ矯正整理シタル点

○三大欠点

- (1) 生徒数ノ少ナキコト
- (2) 設備ノ不充分ナルコト
- (3) 校舎ノ不潔乱雑ナルコト

○四大悪事（学風ノ弛廢）

- (1) 無届欠席ノ多キコト
- (2) 試験ノ不正行為頻繁ナルコト
- (3) 学費及ビ食料ノ納入法、甚敷乱レオルコト
- (4) 不良生徒ノ（比較的）多キコト

参照、村上『波多野伝（二）』稿本、563-564頁。

(操行点ノ採り方ヲ改正シ、品行点ト学科点トヲ區別スルコト)

× (六) 試験ニ於ケル不正行為ヲ嚴重ニ取締ルコト

× (七) 制服着用ノ勵行

(私服着用ノモノハ無届欠席ト同様ニ取扱フコト)

× (八) 休学ノ取締

× (九) 入寮規則勵行

(通学生ヲ出来ルダケ減ズルコト)

× (一〇) 学費及ビ食料納入規則ノ勵行

× (一一) 満十八歳以上ノ者ハ一年級ニ入学ヲ許可セザルコト

× (一二) 通知簿

(教務ノ重要事ヲ々々教職員ニ通知スルコト)

× (一三) 入学時期

(一学期初メノミ)

(一四) 強制的出席

学校ノ公ケノ集会(三大節、創立記念日、運動会)ニ生徒ノ点檢ヲ行ヒ出席強ルコト

(一五) 午後ノ授業

時間ヲ四十分ニシ二時半ニ一切ノ授業ヲ終ル

(一六) 教室整理委員

生徒中ヨリ毎週交替責ニ任ズ

[乙] 實質的整理(自 一七 至 二九)

× (一七) 不良学生ノ除名

(同志社学生ノ対面ヲ汚シ、又ハ汚ス疑アル不良学生ヲ調査シ断然退校ヲ命ズ)

(一八) 一年編入試験

(不幸ニシテ未タ其時機ニ達セズ)

- × (一九) 授業ノ集中
 - (一週一回ノモノヲ二回以上ニ)
- × (二〇) 科目ノ増加
- × (二一) 化学ノ実験
 - (二二) 修身科ノ組織
- × (二三) 発火演習
- × (二四) 日本習字科ノ専任講師ヲ招聘スルコト
 - (二五) 同志社文学会ノ創立
 - (二六) 普通校ト専門校又ハ神学校トノ連絡
 - (英語六十五点以下ノ者ハ不可)
 - (二七) 運動部
 - (二八) 寄宿舎
 - (二九) 通学生徒団¹⁹²⁾

なお「(一七) 不良学生ノ除名」に関して、培根は1908 (明治41) 年七月二十九日の日付を記した覚書「犯則ニ対スル制裁」(以下、「制裁 (1908) と略記する」) を残している。これは「カラ尽シテ矯正整理シタル点」と類似した性格を持つメモであるが、培根がとりわけ力を入れた事柄とその性格をよく現わしている。以下の通りである。

- 一. 通常ノ犯則 (喫煙, 質入, 芝居行等ヲ含ム) ニシテ其性質輕微ナル者ハ, 訓戒ヲ加ヘ, 操行点ヲ丙ニ減ズ 再犯ハ譴責 (或ハ場合ニヨリ論旨退校) トス
- 二. 不正試験, 卑劣ナル喧嘩 (殴打ヲ含ム), 飲酒又ハ艶書等ハ譴責ニ處シ, 操行点ヲ丁ニ減ズ 再犯ハ論旨退校トス
- 三. 偷盜, 登楼等ハ論旨退校トス

192) 村上『波多野伝 (二)』稿本, 579-583 頁。

- 四. 性質輕微ナルモノト雖モ、犯則ノ事情及ビ一般ノ生徒ニ関スル影響ニヨリ、重キニ從ヒテ處分スルコトアルベシ
- 五. 懲罰ハ校規ノ振肅上、一般生徒ニ廣告スル必要アルモノ而已ヲ廣告シ（或ハ「クラス」ニ而已、廣告スルコトアルベシ）其他ハ生徒ノ自然ニ之ヲ聞知スルニ任セ置クベシ¹⁹³⁾

培根が同志社復帰後直ちに構想し着手した一連の取り組みは、「原田宛書類（1907）」と「制裁（1908）」にその全体像及び実施状況と特色がよく現れている。そこで、これら2つの文書を分析することにより、同志社復帰直後における培根のキリスト教教育を考えたい。さて、「原田宛書類（1907）」は「甲 形式的整理」16項目と「乙 実質的整理」13項目に区分されている。両者を分けた基準は必ずしも明確ではないが、「甲」には生徒数（一）、備品（二）、建物修繕、（三）規則（五・九・一〇・一一・一二）など、教育環境に関する課題を列挙している。それに対して「乙」には、風紀の改善（一七）、授業の充実（一九・二〇・二一・二二・二三・二四）など、教育現場における課題を挙げている。このように同志社復帰当時の培根は学内の教育上の課題全般に先頭に立って取り組んでいたことが分かる。その上で「制裁（1908）」を見ると、「一七 不良学生ノ除名」に関連して学内風紀の向上にとりわけ力を入れて厳格に取り組んでいる様子が浮かんでくる。要するに、普通学校が抱える問題全般の改善に取り組みながら、学内風紀の問題に対しては生徒へのきびしい処分によって解決を目指していたのである。これに関連して本稿の第2章第2節において「一四. Bonus Pastor」を概観した際に、培根が厳格に学生を処分する姿勢とそれに対する生徒の声を紹介した。このような培根の教育姿勢における根幹となっていた主義は義である。義に対する厳格な姿勢が学内風紀の乱れという課題に対して迷いのない断固とした態度で臨ませたのである。当時、同志社のキリスト教教育に対する鮮明な認識が培根にあった事実は間もなくはっきり

193) 村上, 前掲書, 603-605頁。

とした形をとって表現される。しかし、学内風紀に対する一連の取り組みを記した文書にはキリスト教教育への言及はない。

1907（明治40）年に原田助が同志社社長に就任した頃から、同志社の内外で専門学校令による大学昇格を目指す運動が高まる。普通学校教頭事務取扱として「十年ヲ要スル」改革に着手していた培根は、本稿の第2章第3節の「十七同志社大学設立運動の中で」の概説で見たように、早急な大学設立には反対であった。同時に、同志社が大きく変革しようとするただ中であって、培根は改めて同志社の原点に立ち戻り同志社及び同志社のキリスト教教育について考えたのである。こうして、1909（明治42）年8月に「同志社創立者ノ二大主張」と題する抜き書きを書いた。ここには同志社におけるキリスト教教育が明確に自覚され、位置づけられている。

- 第一主張 （一）同志社大学ハ私立ナルベキコト、
 第二主張 （二）同志社大学ノ徳育ハ基督教主義ナルコト¹⁹⁴⁾。

同志社のキリスト教主義教育に関する培根の考察はその後も続けられ、やがて「続同志社大学設立趣意書」（『同志社時報』103号，1913年10月）（以下、「続同志社趣意」と略記する）として発表される。この論文の中で培根は同志社大学の「存在の理由」として、「(その一) 自由思想の養成」と並べて「(その二) 基督教主義の徳育」を挙げている。全文は次の通りである¹⁹⁵⁾。

（その二）基督教主義の徳育

洋々たる江河は、遠く深山幽谷に発源するが如く、高尚なる精神修養は、深く実在の根底に基礎を置かねばならぬ。基督教は、宇宙の根源力を精神的に把握して、これを絶対無限の普遍心霊なりと観じ、道義の源泉と安立の聖

194) 村上『波多野伝（三）』稿本，677-681頁。

195) 村上『波多野伝（四）』稿本，733-760頁。なお、村上『波多野伝』稿本は「続同志社設立趣意書」の要旨を記している。それに対して『勝山餘籟』は全文を載せている。ここでは「続同志社設立趣意書」（『勝山餘籟』95-103頁）から引用している。

境とをその中に求めんとする一大宗教である。「神は靈なれば拝する者も亦、靈と真とを以て之を拜すべし。」とは、斯教の真髓を約説したる名句である。今少しく具体的に言えば、神子基督の人格中に神性の完全なる表現を見、これを信仰することに拠りて聖化せられ、一切の旧悪を解脱して新人となるのである。茲に吾人の人格の完成がある。然し、基督教は、唯これのみを以て満足するものではない。有ゆる虚偽や罪惡と戦うて、これを征服し、正義公道を世界に布き、神国を建設せざれば已まざるの決心を有するものである。

同志社は、この高貴なる信仰に燃えたる一偉人が祈禱と熱涙とを以て建てた学校なることは、茲に改めて言うまでもない。同志社に於て、善なるもの、美なるもの、真なるもの、その淵源を尋ぬれば、一としてこの信仰より生まれ出でざるはない。この大信念に依りて学生の人格を陶冶し精神を訓練し、その理想を高尚ならしめ、その氣迫を雄大ならしめ、その心術を誠実ならしめ、その品性を純潔ならしめ、彼等を清めてこれを國家の聖壇に捧げんとするは、創立者が死しても斃れても止まざる所の願望であつた。同志社が一小私学なるに拘らず、名声を天下に掲げ、日本の社会に多大の貢獻を為せしは、全く基督教的徳育の賜であると言わねばならぬ。実に基督教の活信仰は学校の生命にして、同志社をして将来諸学校との角遂競争に於て勝利を得せしむる唯一の武器となり、また、保証となるものである。今や無神唯物の謬論天下に瀰漫し、功利成功の説その間に交じりて、人心次第に不信懷疑に陥り、旧道德の權威地に墮ちて、社会は虚偽と罪惡の敵う所とならんとす。官私立大学の道德教育は、混沌として何等の定見も確信もない。日本精神界の危機、今日より甚だしきはない。この重大なる時期に当たり、同志社大学が精神教育上に一大特色を發揮し、道義の異彩を鮮かに放ちて四方の暗黒を照らし、依て以て学界の宿題を解き、更に活信仰の源泉を開きて一般民衆の心靈の渴を医せんことを、社会は熱望して已まぬように思われる。

「我シオンの義、朝日の光輝の如くに出で、エルサレムの救、燃ゆる松火の如くなる迄はシオンの為めに黙せず、エルサレムの為めに休まざるべし。」

(「以賽亞書」第六十二章一節)

「統同志社趣意」の執筆に至った培根は明らかに新島襄に立ち帰っている。あわただしく学内政治に明け暮れた日々の中でもう一度新島と彼のいくつかの文書と真向かいになる時を持ち、同志社のキリスト教が何であったのかを静かに吟味し直し、その上で当時の状況にあってキリスト教教育が持つ意味を考察している。「統同志社趣意」の「(その二) 基督教主義の徳育」も前半部分と後半部分に分かれる。前半で培根は世界の一大宗教であるキリスト教は「吾人の人格の完成」をもたらすだけでなく、「神国を建設せざれば已むべからざる決心」という社会的性格を持つという。個人の人格面と社会形成というキリスト教の持つ多面的な豊かさに導かれながら、後半部分で培根は同志社がこのキリスト教を淵源とすることによって、学生の人格を磨き育てて社会に有用な人材として送り出してきたと言う。さらにこのような教育事業を通して社会的には小さな存在でありながらも、同志社は社会への貢献によって高い評価を得てきたとする。このような理解、それが大学設立をめぐる激動する同志社の渦中にあるもう一度原点に立ち戻った培根が出会った真実である。それは新島襄を校祖としてキリスト教によって人を育ててきた同志社教育に対する再認識でもあった。この認識は一方であわただしく大きな課題を担って活動していた培根を同志社の原点に立ち戻らせる役割を果たしたであろう。しかし所詮、理念は理念にすぎない。あの時、培根が立ち戻った同志社のキリスト教教育の理念は、彼が教育現場で学生たちと共に育った事柄としては述べられていないのである。

1918（大正7）年1月に同志社を退職した培根は、1920（大正9）年9月に西南学院中学の教員となるまで自由と不安が表裏をなす不安定な約2年半を過ごした。培根51歳から53歳にかけての時期である。福音館書店店主であった宣教師ワーンの招きで1919（大正8）年の後半を下関壇ノ浦で過ごした後、1920年春には京都に帰っていた。そして、この年の1月23日を迎える。新島襄の30年目の記念日である。培根はおそらくこの日の朝に若王寺山の新島襄の墓前を参拝したであろう。墓前の培根にはどのような思いがこみ上げてきたであろうか。それを推測させるのが、本稿の第2章第4節にある「二八. パプテスト文

書伝道への協力」で掲載した漢詩「師教」である。

師教（新島先師第三十記念日）

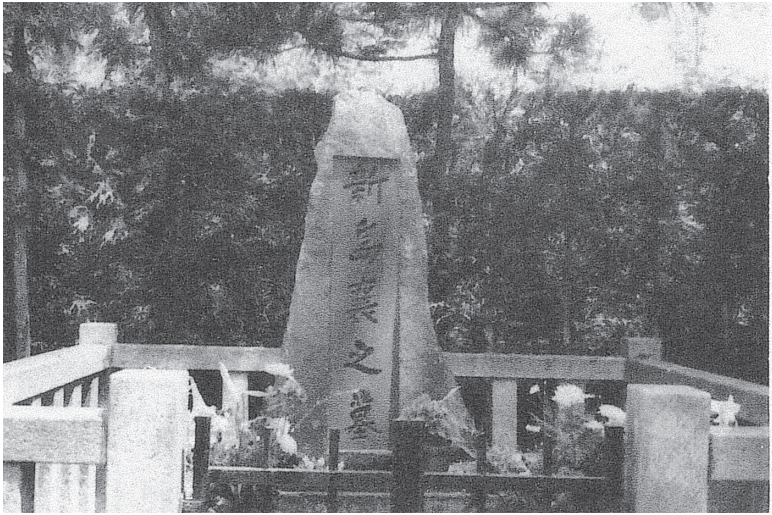
師教懇篤猶存耳	師教懇篤にして猶耳に存す
回顧當年涙滿臉	當年を回顧し涙臉に滿つ
黽勉須磨魂一片	黽勉して須らく磨くべし魂一片
神光未普照皇州	神光未だ普ねく皇州を照さず

（三四転用新島先師之句）

解説

同志社は創立記念日の11月29日と新島襄の記念日1月23日の朝に若王寺山にある新島襄の墓前で祈祷会を開いている。波多野培根は1920年1月23日の朝に同志社が主催する祈祷会に参加したであろうか。それは分からないが、少なくともこの日の朝に一人で新島の墓前に立ち手を合わせて祈りを捧げたであろう。「師教懇篤にして猶耳に存す」とは、その時に培根の全身にこみあげてきた真情を切々と表現したものである。あの時、培根は30年前の感受性に富んだ若い心に立ち帰っていて、その心に新島襄が彼に語りかけた一つ一つの言葉が響いていた。祈りを込め全身で語りかける新島の言葉は30年経ったあの日にも切々と培根の心を打った。

だから、「當年を回顧し涙臉に滿つ」のである。あの日の経験に自己を投入しながらも、一方では現実に立ち戻ることによって「當年を回顧し」と言い、他方で30年前の感動に震える心を抱えつつ「涙臉に滿つ」と告白する。これが、新島襄の墓前において培根の全身に起こった出来事である。その上で、培根は新鮮な心で「黽勉して須らく磨くべし魂一片」と初心にかえって修学への志を述べる。勉学に勤しみ、魂を磨く。それは師の教えを受けた者としてふさわしく立ち、なすべき業であった。しかも、新島の教えによると、己の修学は自分一人の事柄に留まらない。「神光未だ普ねく皇州を照さず」という現実があるからである。日本の国は神光に照らし出される日を待ち望



新島襄之墓
京都市上京区の東山に連なる若王寺山山頂にある

んでいる。だから、一片を照らす光となるべく励まねばならない。

「師教（新島先師第三十記念日）」を書いた日の培根は、同志社在職中に改革運動に邁進しあるいはキリスト教教育の理念を学生に説いた時とは、明らかに違った場に立っている。在職中も新島襄を思い起こし、彼のキリスト教教育に賭ける志に学んで全力で同志社の教育事業に取り組んでいた。しかし、あの時の培根は教員として多くの課題を抱え込み、責任を負って取り組んでいた。だから、退職してしばらくはなお同志社に対する責任感が培根の脳裏を離れることはなかった。しかし、同志社を離れて1年が過ぎ下関の壇ノ浦にしばらく身を置いた時、多くの囚われから培根は解放されていった。それで、1920年1月23日に新島襄の墓前に立った時、30年前に新島から薫陶を受けた日のことがまるで昨日の出来事のようによみがえり、その感動が培根を捉えずにはおかなかったのである。その時、培根は確かに師から教えを受けた若い日の自分に立ち帰っていた。教えを受けて勉学に志し、大いなる幻を懐いた心を取り戻していた。この経験が同志社在職中と西南学院在職中における培根のキリスト教教育の取り組みを大きく変えるのである。

1920(大正9)年9月に西南学院に奉職した培根は、本稿の第2章第4節(2)の「三〇. 西南学院へ」で見たように、早くも4年後の1924(大正13)年9月に記した「三事」(以下、「三事(1924)」と記す)において、西南学院における自らの使命を自覚している。「三事(1924)」は、3項目について名称を付けた上で解説をしている¹⁹⁶⁾。それから3年後の1927(昭和2)年9月6日付の覚書に残された「三事」(以下、「三事(1927)」と記す)もある¹⁹⁷⁾。

196) 村上『波多野伝(四)』稿本、1085-1087頁。

197) 「三事(1927)」は次の通りである。

1 哲学 唯物又ハ不可知論=精神哲学(有神論)

2 信仰及道徳

合理派、自由派=正統派(超自然主義)

功利、実用…直覚、道義(良心)

3 国家 有らゆる形式のデモクラシー=皇室中心主義

村上『波多野伝(四)』稿本、1102頁。

「三事（1927）」は3項目についてそれぞれの名称を記した上で簡単なコメントを着けたメモである。さらに、1936（昭和11）年5月の西南学院創立20周年記念日に書き残した4項目からなる覚書「予が十六年間勤続中聊か西南学院のために盡くしたりと思う点」¹⁹⁸⁾がある。その内容は「三事（1924・1927）」に準じるものである。これら3点の覚書は西南学院において培根が明確で一貫した使命感をもって教育活動に従事した事実を示している。3点のうちで最も詳しく内容を記しているのが、「三事（1924）」である。ここでは、「三事（1924）」によって、西南学院における培根のキリスト教教育を検討する。

三事

1 歴史（欧州近代史）

欧州に於る近世の強国の盛衰消長の顛末を教へ、併せて日本民族の世界に於る位置を明にし以て健全にして博大なる国民的精神を学生の心に涵養することを務む。

2 哲学（哲学史）及び論文

古今の大哲学者の世界観及び人生観の一斑を教へ、唯物思想の浅薄偏狭にして取るに足らざるのみならず道德上、極めて有害なることを明にし、以て健全且つ廣汎にして深味ある精神の人生観の理論的背景を学生の心に

198) 「予が十六年間勤続中聊か西南学院のために盡くしたりと思う点」は次の通りである。

- | | | |
|-----------|---|--------------------|
| 1 学問…………… | [| カーライルの哲学（理想主義） |
| | | 西洋史、獨逸語（自由主義及立憲主義） |
| 2 信仰…………… | [| 聖書本位の福音的キリスト教宣布 |
| | | チャペル集会 基督教主義教育の高調 |
| 3 国民精神……… | [| 皇室中心、君民一体の国民思想 |
| | | （進歩的国民主義）の鼓吹 |
| 4 学院の秩序維持 | [| 三四の扮擾 |
| | | 一．水町氏事件 |
| | | 二．ドージャー院長事件 |
| | | 三．ボールデン院長留任事件 |

村上『波多野伝（四）』稿本、1253-1254頁。

扶植することを務む（哲学史及び文明史，補足の意味にて，カーライル及び他の精神学派の人々の筆になれる論文を講読す）。

3 聖堂（禮拜）

チャペルの集会を規則正しく行ふことに依りて学生の信念涵養の機会を作ると共に福音的基督教に準拠して信仰の正脈を明にし以て彼等の純真なる信念と堅実なる信念と堅実なる品性とを養成することを務む。

予が西南学院に於る仕事は外面上，種々に分かるべきも，是等を一貫する内面の趣旨は，要するに前記の三事実行する事に外ならじ，而して之を実行することに依りて聊かにても学院の発展上に貢献することを得ば予が願足る。

西南学院における培根の基督教教育は第1に「3 聖堂（禮拜）」を主要な柱とした。そこで、「チャペルの集会を規則正しく行ふ」ことを務め，チャペルを「学生の信念涵養の機会」として，「彼等の純真なる信念と堅実なる信念と堅実なる品性とを養成する」ことを目指した。このような人格の育成を意図するチャペルへの志向性は「1 歴史（欧州近代史）」「2 哲学（哲学史）及び論文」にも通じる。教える事が単なる知識の伝達に終わらないように努めていたからである。むしろ，「1 歴史（欧州近代史）」では「健全にして博大なる国民的精神を学生の心に涵養する」ことを目指し，「2 哲学（哲学史）及び論文」では「健全且つ廣汎にして深味ある精神的人生觀の理論的背景を学生の心に扶植すること」を務めた。要するに基督教教育はチャペルにおいても授業によっても学生の健全な人格の形成を目的とした。第2は培根の研究活動との関わりである。「1 歴史（欧州近代史）」と「2 哲学（哲学史）及び論文」は，本稿の第3章第3節の「(1) 波多野培根の研究活動」で見た通り，西南学院で日常的に取り組んでいた培根の研究活動が背景にある。培根は自らも真摯に学びつつ学生に「1 歴史（欧州近代史）」「2 哲学（哲学史）及び論文」を教えた。自ら学び続ける事によって，培根は学問研究に対して学生と同じ立場に立っていた。したがって，彼のクラスはただ一方的に高みから講義

するものではなく、学生に教えつつも共に生きた学問を謙虚に学ぶ場となっていた。そこで第3に西南学院における培根のキリスト教教育にあくまで教育現場にこだわる、いわば現場主義を指摘できる。たとえば、村上は培根がチャペル現場を大切にされた様子を「自ら進んでその運営を担当したチャペル（学校礼拝）講話」において、具体的にその様子を紹介している¹⁹⁹⁾。かつて同志社でしていたように学内行政に関わることもなくただ教育理念を教えるのでもなく、培根は西南学院において教育現場を何よりも重んじてそこで学生と共に過ごし、チャペルや講義を通じて育ちゆく学生を何よりの誇りとし喜びとしたのである。

おわりに

「村上寅次『波多野培根伝』」の研究が明らかにした真実は、波多野培根から村上寅次に継承されたキリスト教教育への志である。1930（昭和5）年4月西南学院高等部に入学した村上は、4年間培根の薫陶によって全人格的な影響を受けた。中でもキリスト教教育に対する培根の真摯な姿勢は村上の魂に深く刻み込まれた。だからこそ、1938（昭和13）年4月西南学院中学部に奉職した村上は、1984（昭和59）年12月に西南学院大学を定年退職するまで繰り返しキリスト教教育者波多野培根を教育現場において想起し、教えを受け続けた。これが「村上『波多野伝』」稿本が構想され執筆された背景である。

ところで、波多野培根から村上寅次にキリスト教教育の志を継承する出来事が西南学院の教育現場で起こっていたことを、どのように評価し記憶すればよいのであろうか。これまで西南学院史研究においてC. K. ドージャーを初めとする宣教師の活動が注目されてきた。彼らが重要な役割を果たしたことは言うまでもない。しかし、おそらくそれは学院史における一面にすぎない。西南学院の現場では学生・生徒に対する教育活動と人格形成に地道に真剣に取り組んできた多くの日本人教職員がいる。日本の近現代という困難な課題に次々と直

199) 村上『波多野伝（四）』稿本、1099-1101頁。

面した時代の福岡という地域社会にあって、西南学院がキリスト教に基づく教育事業によってこれまで貢献できたかなりの部分は、実は質量ともに日本人教職員の誠実な働きに拠る。培根から村上へのキリスト教教育の志の継承という出来事もまた、その中に位置づけられる。したがって西南学院史は日本人教職員が担ったこれらの貢献をふさわしく叙述し、伝えるべきであろう。

ところで、現在の日本キリスト教史や西南学院史研究において波多野培根を取り上げる上である種の難しさがある。この難しさは彼が皇室を敬っていた事実に対する評価からきている。戦後民主主義のリベラルな立場は戦前・戦中の天皇制統治機構に対して極めて批判的であり、戦後のキリスト教研究は多分にその影響を受けてきた。両者には共通する思想・歴史観・社会的立場が多くあるからである。しかし、天皇制に対する批判的なイデオロギーを内包した立場で、果たして戦前戦中を生きたキリスト教教育者の波多野培根を正当に研究できるのであるか。そこで、培根の研究においてはまず歴史研究の原点に立つことを提唱したい。すなわち、あらゆるイデオロギーに基づく価値判断をひとまず排除して、波多野培根を彼自身によりそって分析し、考察する。もし何らかのイデオロギーに基づく評価が必要であれば、その上で自らが立つ価値観を自覚し、歴史研究による研究成果に対する判断を下していけばよいのである。

本稿は当初このように大きな分量になることを予想していなかった。ところが、書き進むうちにどんどんどんどん字数ばかりが増えていった。それに反して当初予定していたいくつかの検討事項は考察できないままに終わっている。そのため、全体を見るといくつか論旨に重複や不一致が生じている。しかし、それらは今後の課題とすることを明記して今回はここで筆を置きたい。